

治教育を受けた。

ローマ人は實用を重する國民であつたから雄辯の術は早くより研究されローマ市の一隅には常に演壇の設備があつて何人と雖も自由に壇上に昇つて意見を發表し得た。當時の政界に雄飛した政治家は何れも雄辯に長じてゐた。グラツクス、ケーゲル及び彼の如きも其の一人である。

キケロは紀元前七〇年既にキリキア州知事の暴政を攻撃する大演説に於て大雄辯家の名聲を博し紀元前六三年にはコンスルとなり在職中大に人望を得、カチリナ (Cathina) の陰謀起るや之を摘發痛撃して其の名益々揚がり「國の父」と迄尊敬せらるるに至つたが紀元前六〇年三頭政治 (Triumvirate) の開始さるるやケーザルは紀元前五八年閻族派の首領カトー及びキケロをローマより放逐する策を講じたので彼はマケドニアのテッサロニケに走つてゐたがブルツス、ケーザルを殺すに及び歸つてアントニウス等と國政に干與し「キケロの大赦」等を行つた。後アントニウス (Antonius) の非望を痛撃するに及んでその意見合はず遂にアントニウスの爲めに暗殺された (紀元前四三年)

死後幾多の演説、筆記及び文章を遺し幸に今日に傳はり模範的ラテン語 (Latin) として今も廣く教科用書となつて居る。

彼は又哲學者であつて深遠な理想を有した人であつた。

キモン (Cimon) (卅五回豫備)

アテネの將軍にしてかのマラトン戦 (Marathon) の勇將ミルチアデス (Miltiades) の子である。アリスチデス (Aristides) の死後非常な勢力をアテネの政界に占めゐた。彼はデロス同盟 (Delos Confederation) の艦隊を率ゐてトラキア沿岸方面のベルシヤ人の勢力を尙一層驅逐し歩を進めて小アジアのエウリメドン河畔 Eurymedon に (紀元前四六五年頃) ベルシヤの陸海軍を撃破し又サラミス (Salamis) 灣に敵艦隊を破り遂に兩國間に後年キモン條約と稱せらるる平和條約が成立した譯だ。主なる條件は左の如きものである。

- 1、向後小アジアに於けるギリシヤ植民市府は悉くベルシヤより獨立する事
- 2、向後ベルシヤの艦隊は其の領海外に游戈せぬ事尙其の陸軍は小亞細亞の西岸より三日里程の範囲に行軍し得ぬ事等

アテネ人は自己の意志を他人の爲に枉ぐる事を恥辱と感じたからベルシヤ戦役にギリシヤを危急より救つた功臣も同國人嫉視の中心人物となり罪なくして例のオストラキズム法 (Ostracism) によつて放逐の憂き目を多く見た。キモンの如きも民黨の爲めに追はれた一人であつた。

後召還せられベルシヤ軍に對抗したが面白からずして紀元前四四九年キプロス島 (Cyprus) にて死去した。

グーテンベルヒ (Gutenberg) (十三回)

第十四・五世紀には種々の大發明があつて其が實用化される様になつてから中古の社會状態が全く一變した。就中羅針盤、火藥、活版印刷術の三大發明があつて文化の進歩を促進するに最も効果があつた。

活版術の發明説に關して和蘭人は同國ハールレムの人ラウレント・コスター (Laurent Coster) であると稱してゐるが彼が發明したものは古代支那地方に行はれてゐた木版であつて現今より見る時は頗る幼稚なものである。此時マインツで生れてストラスブルグに住居してゐたグーテンベルヒは或日コスターの工場を訪問して其木版を見て一四三六年迄非常な苦心と意匠をこらし之を改良して木製活字版を發明するに至つた。十四年後にはマインツの鋳職人のファウスト (Fust) ベートル・シェツフェル (Peter Schöffer) と協力して現今の如き金屬製の活字を工夫した。

恰も印刷術の大革命を見た時廉價な印刷用紙の輸入を見、兩者相伴なつて文藝復興の萌芽時代にあつて此等の學藝を迅速に諸地方へ傳播し文化上に鈔からざる便益を與へた。

グロチウス (Hugo Grotius) (四十二回豫備)

第十七世紀に出でたる和蘭の國際法學者である。當時和蘭國は宗教的鬭争時代で政治家のオルデンバルネフェルと共に穏和派の驍將であつた。彼は教會を國家に従屬させ様と努力したが嚴格派の爲破られ一六一九年終身禁錮者と決せられたが夫人の奇智によつて城壁を脱したと云ふ。出でて刑法論を公にし一六二五年に刊した「平和及戰爭法規」は名高く、國際法學者の鼻祖と稱せらる。時三十年戰爭中で彼は「戰爭の絶滅は出來ぬが可成國家間の理解の爲に使節を派遣し合ふこと、戰爭中と云へども公正な態度を誤まらぬ事」等を論じ國際平和の考案として重大な史的意義を有する。又海洋の自由論 (The Freedom of the Sea) の首唱者として有名なもので、米大

統領ウイルソンの十四ヶ條の中にもある「海洋自由」説は彼の學説に出發してゐるとの事である。

クリステネス (Kleisthenes) (十九回豫備)

紀元前五百年頃のアテネの人、民主的共和政治の完成者にして僭主政治の顛覆後貴族中のアルクメオン家 (Alcmeonidae) と他の貴族との衝突が起るの恐れがあつた時クリステネス出で、其の方法宜しきを得て、未然に防ぐ事を得たのは彼の偉大なる功績である。

次に彼は民権を擴張し貴族黨の勢力を殺ぐ事に苦心しソロン (Solon) の制度に改良を加えた。後年豫期せるが如く貴族黨の反抗を受け一時國外に逃れたがアテネ人の同情によつて復び故國に歸るを得た。彼は又オストラキズム即ち貝殻彈劾法 (Ostracism) の創設者として有名である。

グナイゼナウ (Gnaeus) (卅一回本試)

奈翁のエルバ島脱出はウイーンに會する列國の委員に大なる恐怖心を抱かしめ遂には會議の難關たりしサクソニヤ、ポーランド問題を一先づ放棄し奈翁を以つて平和の敵とし、これを仆す迄は同盟を解かぬ事を決議した。ワートルロー (Waterloo) の一戦は奈翁のためには運命を決する戦であつた。彼ナポレオンは此の一戦に速製の軍隊を以て一代の心血を注いで之に當たつたが天運非にして遂に總崩れとなつて全く彼の大望は水泡に終つた。

ワートルローの前哨戦として幾多の小會戦が行はれた。始め奈翁は普軍ブリウヘル (Blücher) と英以下の聯合軍ウエリントン公 (Duke of Wellington) との聯絡を斷つて別々に之を撃破せんとし一八一五年の六月敵の第一

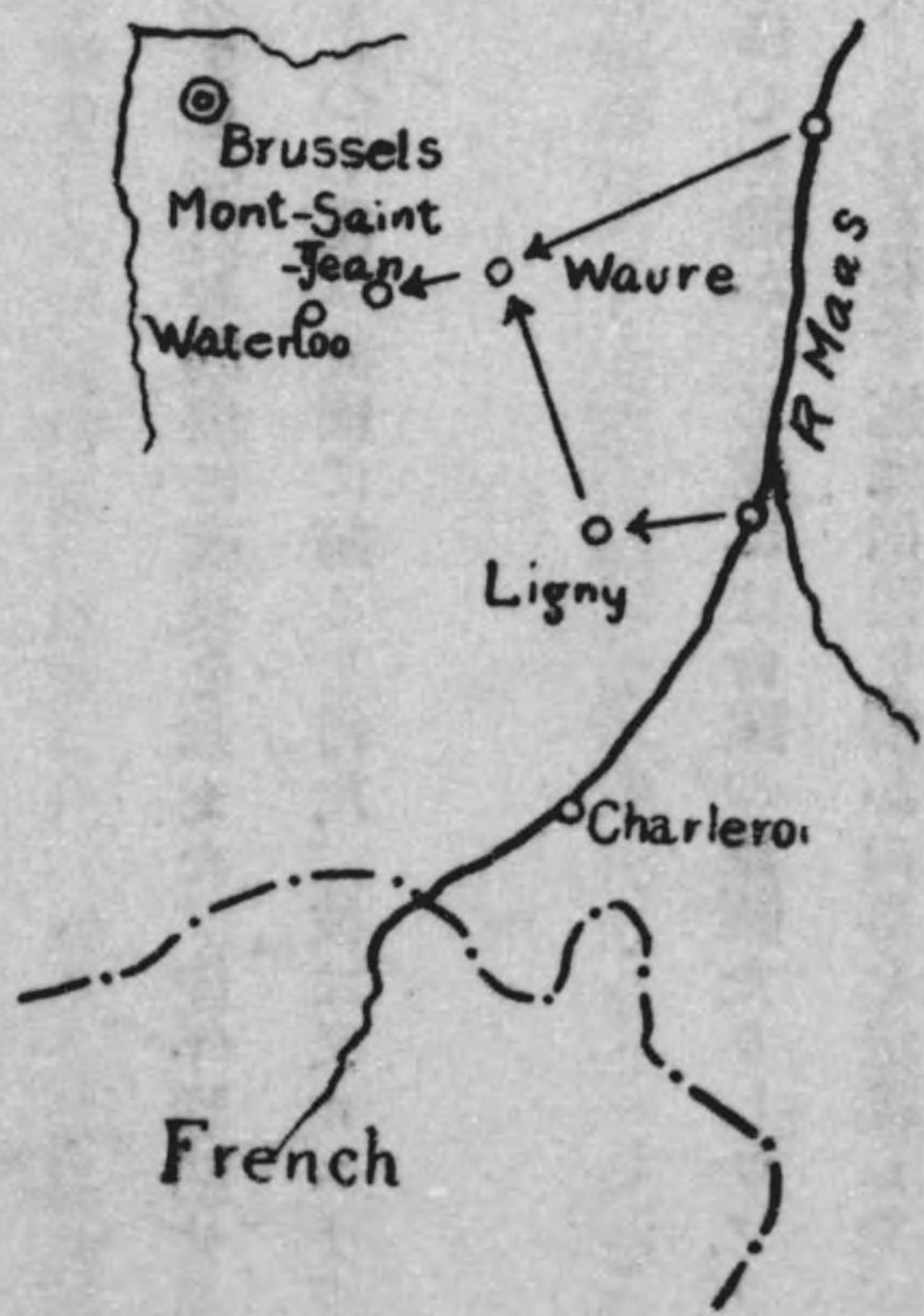
聯絡地點と目されたシアールロア (Charleroi) を占領し次日にはリニー (Ligny) でブリウヘルを破つた。此戦不幸にして普將ブウヘルが負傷したので參謀長グナイゼナウは代はつて一軍の指揮を取る事となつた、彼は大英断を以つて道なき路を非常な困苦を忍びながら夜陰に乗じて北方ワープル (Wavre) の方へ退却した。此は英軍と聯絡するためであつたが意外の好結果をもたらしたのであつた。奈翁はかくとも知らず兩軍の聯絡を絶つことが出来て己れの目的半ば達したと信じたのであつたがこれ大なる齟齬を來たして後のワテルローの戦勝を得たのもグナイゼナウの此行動が主因をなしてゐるものにして聯合軍の勝利と共に逸する事の出来ない人物である。

グラブプロット (Gravelotte) (廿五回豫備)

所在 メッツ要塞の南西に在り。

史實

ナポレオン三世時代迄フランス國民は二百年來歐洲の一大強國を以つて自ら任じ文化上にも大いに貢獻する所があつたが其隣邦にドイツが和合統一して隆盛の形勢を示すに至つたので嫉妬の念禁じ難きもの有り加ふるにメキシコ事件以來の外交上の失敗を償ふ爲めに國人の輿論に従ひ普國と一戦を賭するの必要に迫られてゐたのである。遂に西班牙王位繼承問題は其導火戦となり一八七〇年七月戦端は開始された。



グラブプロットはメッツ前面の戦があつた所で始め普國第一、第二軍はザールブリュッケンの戦後佛軍を其附近に破りナポレオン三世をしてシャロン滞陣の餘儀なきに至らしめた。

かくて普軍は今や國境を越えて潮の如く寄せ來たり八月十四日にはコロンベール (Colombey) に十六日はビオンブート (Vionville) に十八日はグラブプロット (Gravelotte) に何れも勝利を得、バゼーヌ將軍 (Bazaine) の退路を断ち其約十八萬の大軍を糧食の不十分なメッツに壓迫し第一軍と第二軍の一部で之を包圍し他の諸軍は直ちにパリに向つた。佛軍は猛虎の如き勢ある普軍に敵す可くもなくセダン (Sedan) の落城、パリーの陥落となり一八七一年一月の結末を見る事になつた。

クストツア (Custoza) (廿回豫備)

所在 伊太利ベロナ州の一村

史實

奥・普間の反目次第に増加し遂には干戈に訴ふるに非ずんば圓滿なる解決を得べからざるを知るや慧眼なビスマルク (Bismarck) は伊王ビクトル・エマヌエル二世の奥國に隷屬してゐるベネチア領を併呑せんとする野心ある事を知り奥國を此方面から制肘せんと企て遂に一八六六年四月八日伊國



と攻守同盟を結んで戦勝後ベネチヤ領を與ふ可きことを約した。

然してイタリヤ方面ではラマルモラ將軍十四萬の兵を以つてミンチオ河東の地に陣してゐたが戰略宜しきを得ず、埃國大公アルベルト將軍 (Albert) の僅に七萬四千の兵と同年六月二十四日クストツアに激戦して大敗を蒙り再擧の機をなからしめ、かくて南方にては伊軍の敗北に海陸とも終つたが幸に普魯西本軍が非常な戦勝を得たので伊太利は素志を達成する事が出来た。

クナクサ (Cumax) (卅一回豫備)

所在 エウフラテス河畔バビロン市の北方に在り。

史實

希臘上古の歴史を通じて始終一貫常に波斯の勢力が其の一方に加擔し援助を與へて抗争してゐることである。

ペロポネソス戦役のスパルタ最後の勝利も小アジアのベルシヤ知事キロス (Kyros) の援助によつたものである。恰度戦役の末年頃にベルシヤ王ダリウス二世死し繼承問題が起つた。即ちキロスは其長兄たるアルタクセルクセス二世 (Artaxerxes) は父王即位前に生れたから即位權なしとなし母後の信任を得て遂に擧兵するに至つた。スパルタはキロスの援助を乞はれたからリサンドロス (Lyssander) の盡力で二萬三千人の兵を出し紀元前四〇一年にはクナクサに聯合軍は大にベルシヤ軍を破る事を得た。

然し此戦の爲其の將キロスを失ひ且つギリシヤ傭兵の司令官クレアルコスをも失つたのでギリシヤの一萬の兵

は歸還の餘儀なきに至り糧食なく敵地にあつて悲惨な状態となつた。此の逆境にあつて希臘魂は發揮され協力して自治團體を組織し長官及び將校を選擧し如何なる事あるもベルシヤ人に降服はせぬ事を約し具に艱難に遭遇しトラスベンドより本國に歸るを得た。クセノフォン (Xenophon) の著アナバシス (Anabasis) には一萬人の退却 (Retreat of ten Thousands) とて詳細な當時の記事を遺してゐる。該著によつて一方ベルシヤの實狀を知るを得尙又戦術上に得る所少なからず後年アレキサンドル大王の遠征に大なる参考となつたものである。

グラナダ (Granada) (十七回豫備)

所在 イスパニヤの南方にある一市。

史實

教祖マホメット (Mahomet) によつて始められし回教は政教の兩權を以つて盛に各方面に侵入しサラセン帝國を形成するに至つたが七五五年には東西兩カリフの分立を見、西班牙のコルドヴァ (Cordova) は西方の都として一時盛大を極めた。

サラセンの東西カリフ國は一時降盛を極めたが其後次第に衰へ埃及にファチマ (Fatima) 朝、西班牙にカスチラ (Castile) アラゴン (Aragon) レオン (Leon) 等の基督教國が興つて回教の勢力範圍も徐々に縮少され第十五世紀になつては回教徒は南方グラナダの一地方に據るのみとなつた。

時のアラゴン王フェルヂナンド (Ferdinand) は、カスチラの女王イサベラ (Isabella) と婚して西班牙王國の

基礎を樹立し大に王權の擴張を圖り遂に回教徒の根據地たるグラナダを從來の約に背き朝貢を缺きたるを口實として、討伐の軍師を出し包圍する事十年にして、一四九二年一月之を陥れ、其全土を併合しイスパニヤ統一の偉業を完成した。

回教徒たるマウル人 (Moors) の驅逐は其後も繼續されたが此戦は人種戦争であつて同時に宗教戦争であつた。従つて常に人民の權利は無視せられ酷烈な壓迫が加えられたのでマウル人は再び叛旗を翻したが只敗北を繰返すのみにして舊教の熱狂者フィリップ二世・三世の時代に至つては益々悲惨な状態に陥り終に其生れ故郷を逐はれグラナダ王國は全く廢墟となり滅亡する事となつた。

クチヌク・カイナルチー (Kitchuk Kainardji)

(四十三回本試)

所在 バルカン半島ブルガリア國の東北部シリストリア府 (Silistra) の東南に當る。

史實 一七七四年露國カタリナ女帝 (カザリン) と土耳其との間に此地で平和條約を締結さる。



其條約によつて (a) 露國は南方に領土を開拓すること

b、露國の商船は自由に土耳其の領海を航行する事を得。

c、クリミア半島の獨立を承認すること。

クラウゼウィツ (Karl von Clausewitz) (四十四回)

第十九世紀の初頭活動した普魯西の將軍で戰術研究者として世界に名高く軍事專門の名著を後世に残した人である。普魯西の軍人となつて、後、露西亞軍隊に見習生として入り一八一八年陸軍士官學校の教官となつたが一八三〇年にその職を辭した。砲兵隊の檢閲者として勤めてゐたが一八三一年の末ブレスラウ (Breslau) で虎疫の爲に死んだ。

彼の著名なる理由は戰略を講述し著作したからである。普魯西の陸軍(後の獨逸軍)の精銳は彼の功績である。彼は戰術作戰上の特殊な技術を講述したと同時に非常な熱誠で戰は敵が絶滅する迄堅忍不拔の意氣を以て遂行せねばと教へたクラウゼウィツの未亡人は夫の死後五年を費して戰術的著作 Hinterlassene Werke über Krieg und Kriegführung (英譯) Posthumous works on war and strategy) 強て譯すれば「戦争及び戰略の死後の著作」として出版された(一八三七年)。此書が純粹な理論的立場から戰爭の技術を解説した世界的名著として戰略の標準書である。爲に世界の各國語に譯述されて近世戰術の金科玉條となつてゐる。

彼の戰術と意氣とは一八六六年の七週間戰役 (Seven Weeks war) の大勝となり一八七〇一年の普佛戰爭の

勝利の結果を齎した。精強無比なる獨逸軍隊の技術と精神を生んだ母である。

キヤクサレス (Kyzares) (廿九回豫備)

世界最初の統一國を形成したアツシリア帝國は版圖の廣大なるも統御する才に欠けてゐた爲に愈々統治困難となるばかりであつた。其時偶然北方からスキタイ (Sakha) キンメリヤ (Chimera) 兩蠻族の侵入するに及んで遂に紀元前六〇六年其の滅亡を見るに至つた。

今蠻族侵入の次第を考察するにキンメリヤ族はもとドナウ河とアゾフ海との間の地方に住したものであつて南方に出でリジア國に侵入し始めたのである。次にスキタイ族は黒海の東方から迂回してメジア領内に侵寇し其の勢ひ猛烈であつたので右兩國は援を本國アツシリヤ王アツスルバニバル五世に求めたがアツシリヤは内亂鎮定に急であつて援兵を派遣し得なかつた。

茲に於てメジア王のキヤクサレスは紀元前約五九八年獨力を以つてスキタイ族を驅逐して自立しメジア帝國を立て經營又宜しきを得て國威伸張するに至つたがリジア王アリアテス三世とハリス河を挾んで其境域相接觸する様になつて一時攻争を事としたが新ベビロニア王の仲介によつて一先づ和議の成立を見た。キヤクサレスはメジア帝國の創立者である。

ゲツチスブルグ (Getysburg) (卅八回豫備試)

所在 北アメリカ合衆國ペンシルバニヤ州南部に在り。

史實

アメリカ合衆國の南北は建設當時より政治、經濟、人道上各々差異點を有してゐたが奴隸廢止論者の巨頭リンカーン (Lincoln) の大統領に當選するや南カロラリナ州以下の大州はモントゴメリー (Montgomery) に會合してアメリカ聯邦を設けて分離獨立の宣告をなし遂に南北戰爭を現出するに至つた。

大局から言へば戰爭の始期から中期迄は南軍が常に優勢であつたが北軍が途中から策戦を一變するに及んで稍々有利に向つた。ゲツチスブルグの戦は南北戦役末期一八六三年七月一日より三日迄行はれた戦闘にして南軍の名將リー (Lee) が北軍の將ミードの爲に敗られし所である。此が爲に南軍はポトマック河南の地に退却するの已むを得ざるに至り西方に於てはグラント將軍のピックスブルグ、ポートハドソン等の城砦を占領しミシシッピ一河口一帯の地を略有して以來戰運一轉して遂に北軍の大勝となつた。

實にゲツチスブルグの一戦は勝利への意氣を與へた記念すべき戦闘である。

ケブレル (Kebler) (十回豫備)

ドイツの天文学者にして所謂「ゲブレルの三大法則」の創始者として有名である。遊星の軌道及び遊星運動の法則は彼によつて明にせられた。第十七世紀初期の人である。

ケーロニア (Choronea) (卅四回豫備)

所在 ギリシヤのボエオチアの舊市。

史實

上古バルカン半島のギリシヤ諸國は割據して相争ひアテネ、スパルタ、テーベの三國の外にベルシヤ國の干渉を受け各國相次いで疲弊し北方にマケドニアの起る好機會を與へた。

時にギリシヤのアンフィクテオニア同盟は紀元前三三九年ロクリスの一市アニフィサ(Amphissa)の神地占領を罰するため其實行委員をフィリプス(Philip)に命じた。彼は大命を受けて南行の途中フォキスのエラテア市を占領した。此の一舉は彼の野心を遺憾なく發揮したものであつてデモステネス(Demosthenes)の主張は始めて容れられテーベ市とアテネ市は同盟して彼の南侵を防ぐことゝなつた。フィリプスこれを知るや直ちに軍を集めてボエアチヤに進め聯合軍とケーロニアに戦い大に之を敗つた。時に紀元前三三八年にして爾後暫時にしてテーベは全ギリシヤの覇權を掌握するに至つた。

今當時兩軍の優劣を對照するに(1)ギリシヤには將材に欠けた事、(2)マケドニアの陣形は密集隊であつて之に長鎚を使用した事は一層有利であつた事。(3)マケドニアの兵は平常から訓練された實戰の經驗を有する傭兵であつたがギリシヤ兵は往時のスパルタ兵の如きものでなく士氣の衰へた國民軍で編成されたものであつた。されば兩軍の勝敗はぬ前から既に決定してゐたのである。

コルネーユ (Cornelius) (一六〇六年—一六八四年) (十六回豫備)

「朕は國家なり」と自稱して萬機を親しくし專制主義を奉じた佛蘭西王ルイ十四世の治世は確に佛國王政の極

盛時代であつた。コルベール(Coibert)等の財政整理策宜しきを得、國家の財源が急増したのを利用して彼は土木、建築に使用するの一方文學、美術を大に奨励したから幾多の巨匠大家を輩出した。コルネーユは當時悲劇の大家であつてラシーヌ(Racine)と並び稱せらる。

コルネーユの著書には有名な「誓」がある。此は古典歴史の基礎及び濫觴であつて無二の寶物として貴ばれてゐる。これによつて彼は一躍大家の列に入つた。これは佛蘭西戯曲に一時期を劃したる程の作品である。其頃嫉妬深き凡庸作家の誹謗に答へるため彼は更に「ナラース」シンナ「ポリウクト」の三大傑作を出した。以上の四作は後年の作「嘘言家」と共に佛蘭西悲劇及び喜劇の模範的戯曲とされてゐる實に彼はフランス劇壇の鼻祖である

コルネリア (Cornelia) (十七回本試)

羅馬のスキピオ・アフリカヌスの女にして、例の共和政治時代諸種の改革を企圖せしグラツクス(Gracchus)兄弟を生みし賢母である。幼少の時より學を好み文才あり其子を愛をもつて教育し羅馬の人民より「此の母ありて此の子あり」と尊敬さる。嘗て多くの富貴の人と一堂に會せし時各其の珍寶を競ひし時彼女は從容として「妾に寶玉なし只二子あるのみ」と言ひたりと傳へらる。

ゴルチヤコフ (Goltschakov) (卅四回本試)

有名な露國の將軍であつて政治家、アレキサンドル二世帝の時代露國の世界政策進行上に偉大なる貢獻をした人である。

(1) 内政改革

露帝アレキサンドル二世は即位の初期當時の自由思潮の影響を受けて従前の形式を脱し、言論の自由、農奴の解放其他内政の改良を企圖してゐたがゴルチャコフ宰相となりポーランドに叛亂のあるや又専制政治の昔に復し、大いに政治、宗教、言論の統一をなし汎スラブ主義 (Pan Slavism) を鼓吹し、外はバルカン半島にスラブ民族の覇権を確立せんとした。

(2) 外交政策

更に彼の功績は外交上の活躍にして佛露間の靈障の管理問題から端を發した(一八五四年より六年迄)のクリミア戦役 (The Crimean War) の敗北に終るや佛國の地位の歐洲政界の中心となれるがその反對に露國は大打撃を蒙り、威信全く地に墜ちたかの感があつた。普佛戦役の爲に各國の多端なるに乗じゴルチャコフは一八七〇年の十月末不面目なるパリ條約破棄の通牒を發し黒海に關する事項は爾後効力を失ふ事を列強に通告した。各國は翌年二月ロンドンに會合し左の議定書によつて明に之を認めた。

(1) 露・土兩國共に黒海に造船所、軍港の築造、軍艦を製造し得る權を恢復すること

(2) 黒海上に於ける兩國の軍艦數は自由たる事。

(3) 列國は露國が萬一、土國を威壓するが如き事ある時は軍艦を黒海に自由に入れ得る事

條件付きではあるが之は確に外交上に於ける露國の一大成功である。然も何等の勞無しに得たのだから尙更の

事である。

其の後露國は南侵政策を企てスラブ統一運動を名とし土領バルカン半島に其の勢力を伸展さすの機會を鶴首してゐた。當時土國領内には幾多の弊政あり加ふるにキリスト教徒の酷遇に遭えるものありブルガリヤの虐殺事件等を口實として、遂に干渉を始め露土戦役を現出するに至つたのであるが、其結末たるサンステファノの講和 (San Stefano) の條約は諸國民の不平醸出し特に英國は世界政策上より墺國は政治上、商業上より物議をかましたので普國の宰相ビスマルク公は各國の全權を招聘してベルリン會議を開催した(一八七八年)。此際露國の宰相ゴルチャコフの期待に反しビスマルクは露國に不利な處置をなしベッサラビヤと他の一部の領有のみとし却つて墺國の勢力を伸張せしめた。

此後ゴルチャコフは其忘恩を怒つて佛國と接近するに至つたのでビスマルクは遂に一八八二年墺・伊國と共に三國同盟を成立せしめたのである。ゴルチャコフの死後には露・佛間の二國同盟の成立を見、遂に三國同盟と對抗するに至つた。

ノブデン (Oberdan) (十回本試・廿七回豫備)

英國の經濟學者、自由貿易の主張者、ウイトン會議後漸時は保守主義が勢力を得てゐたが一八三〇年佛國に七月革命 (July Revolution) の起るや燎原の火の勢を以つて自由主義は全歐洲を流るる思潮と化した。

何れの時代を通じても共通であるが、佛國の政界は急激で革命的なのに對し英國の漸進主義にして平和的な改革

は西洋史上の一大偉觀たるを失はない。コブデンの首唱になる穀物條例 (Corn Law) 廢止問題の如きも又其一つである。

右條例は農民保護のために出來たものであつたが關稅が高い爲價格を騰貴せしめ却つて勞働者に非常なる困難を與へ工業家に及ぼす影響は甚だ大であつた。各地の工業市は熱心に之が廢止を唱ふるに至り、コブデン、ブライト (Bright) の兩氏が中心となつてマンチエスター市に一八三八年穀物條例廢止協會を組織し穀物輸入稅全廢論を唱へ經濟上、保護政策の非を論じ諸方に遊說し一八四一年國會議員に擧げらるるや議場に其主張を公にし一八四六年にはピール (Peel) のトーリー黨内閣は遂に食料品輸入稅廢止法案を議會に提出して之を通過せしめ幾多の利便を庶民に與へて苦痛を救ふ事が出來た。これと同時に英國の經濟上保護の組織を廢し、自由貿易の制度を採用することゝなつた。尙、彼は政治上、佛國との通商條約締結委員となつて功績があつた。

コツセンツア (Cosenza) (四十三回豫備)

所在 伊太利南部現名カラブリア半島 (Calabria) に在る。

史實

羅馬帝國東西に分裂の年 (三九五年) 西ゴード王アラリック (Alaric) 即位して強盛となり、東ローマの年金の不履行を怒り希臘地方を却掠した。西ローマ帝國の名將スチリコ (Stilico) は一先づ其軍を敗りしが後四〇一年アラリック大擧して伊太利に侵入するに及びガリヤ・西班牙の守備兵を撤退して之を妨ぐ。此邊境の守備緩め

るに乗じてガリアの地へワンダル (Vandals) スエビ (Suevi) の蠻族が殺到したのであつた。此難局打開の爲にスチリコはアラリックと和解してガリアの蠻族に當らす事としたが、西ローマ皇帝のために疑はれてラヴェンナ (Ravenna) にて殺され、再度アラリックは伊太利に侵入し四一〇年遂に羅馬市を陥落せしめた。

紀元前三〇九年のガリア人侵入 以來八百年にして羅馬市は始めて蠻民の荒掠に會つた。更にアラリックはシリイ島を略しアフリカ征伐の雄志を持つてゐたがアフリカのローマ知事がローマへの糧食を斷つた爲大に困りアフリカ征伐への途次コセンツアにて四一〇年病歿した。強暴な「西ゴート王の病死」は西ローマ帝國の滅亡を約半世紀間延期した。次王アタウルフ (Ataulf) はローマの「フエデラチ (Foederati)」として西班牙へ赴きて建國した。

コンスタンチヌス帝 (Constantinus) (廿回本試)

羅馬帝チオクレチアヌスは廣大なる羅馬帝國を一人の力にて統御する事

の困難なるを知つて分國制度を採り四分して二人のアウグスツスと二人のケーザルとに治めしめ一人のアウグスツスの位を辭した場合他の同位者も職を去り二人のケーザルの昇進するの制を定めたがチオクレチアヌス帝の去つた後もマキシミリアヌスは職を去るを欲せず帝國は混亂状態に至つたがケーザルであつたコンスタンチヌスの子コンスタンチヌスは伊太利に於いて其の後政敵を敗つて遂に紀元三二三三年帝位に登り、羅馬帝國を統一し



た。

彼は世に大帝と呼ばれる人にして宗教、政治、戦略に總ての方面に達越せる才能を發揮した。實に彼は羅馬帝國掉尾の英主にして東羅馬帝國が永續したのも大帝の功績に待つことが大である。左に治績の主なるものを擧ぐ。

(1) 遷都。當時の國都羅馬は多神教の巢窟の様であり且つ幾多の悪因縁が纏まつてゐて大政維新の効を完ふするには適せず加ふるに西に偏して東方を經營するの便ならざるも知つてゐたので風光明媚にして歐亞兩大陸の咽喉地たるビザンチオン (Byzantium) を選び三三〇年には此の地に遷都し名稱もコンスタンチノポリス (Constantinopolis) と名づけた。

(2) 行政。彼は又政治方面にありては官僚政治を確立しテオクレーテアヌス帝の政策を踏襲し分割の政策を採り中央には二將軍、五大臣の制を創め地方にあつては行政權と兵權とを分離せしめ、邊境並びに古都羅馬には守兵を駐在せしむる等行政組織を完成した。

(3) キリスト教の保護。基督教は代々の羅馬帝より絶えず迫害を受けながらも漸進的に勢力を得て教會組織を各所に生じ團體的勢力となりつゝあるので彼は此を利用してローマの統一を全ふするの便なるを考へ三一三年にはミラノ (Milano) の寛令を出して基督教を公認したのは確に卓見であつた。

かくて三二五年には小亞細亞のニケーア (Nicaea) に宗教會議を催し教義を一定してアタナシウス派 (Athanasius) を以て正教 (Catholic) とした。

然し彼の歿後は一旦振張した國力も再び陵夷し漸次衰運に向つた。

コルテス (Cortez) (十六回豫備)

第十四・五世紀に三大發明ありて文化の進運に非常な効果を與えたが就中羅針盤の發明は遂にコロンブスの新世界の發見、次にマゼランの世界一周となつて商業の範圍を世界的に擴大するに至らしめた。

コルテスはイスパニヤの軍人にして探検家、一五二〇年メキシコを發見し僅少の兵力を以つて新しい武器を利用して土民を征服し首都メキシコを攻略した。コルテスは此地に暫時とどまつて政治を執つてゐたが新秩序樹立はなか／＼困難であつたが後本國に歸つて貴族に列せられた。本國にこの富源を増加せしめたのは彼の功績である。然し西班牙人は眼前の少利に營々たりし爲に後年此等の殖民地も皆叛する様になつた。

コルドバ (Cordova) (十二回本試)

所在 イスパニヤの西南グアダルクビル河岸 (Guadalquivir) に臨む一都。

史實

回教は常に政教兩權を併用してゐたから盛に各方面に侵入してサラセン大帝國を形式するに至つたが教祖ムハメットの血統が絶えて後はオンマヤ朝代り、次に七五〇年アバス朝が起つたので前朝の宗族アブデル・ラーマン (Abdel Rahman) イスパニヤに走つて獨立しカリフとなつてコルドバに都した。

當時のサラセン文化は西歐の文化を遙に凌駕してゐたものでバグダッドとコルドバとは東西文化の中心點であ

つて西サラセンの諸王は代々學問を獎勵したれば科學の研究益々旺盛を極めた。コルドバは實に西歐文化の淵源地であつて西洋文明開發促進の中心地であつた。従つてコルドバには有名な大學も數多あり當時の歐洲社會に於ける先覺者も又多く此地に留學しサラセン學者に親炙するを光榮としてゐた。

サラセン帝國は一時隆盛を極めたが、その文化の發達した時期は頗る短く國勢と共に衰へるに至つた。此には士民に宗教又は國家に對する愛著心の薄かつたが爲であつてこれに對して西班牙にカスチラ、アラゴン、レオン等の基督教國出でて對抗するに及び其範圍も縮少されコルドバは遂にイサベラ女王によつて滅され、最後のマウル人の根據地たるグラナダ(Granada)も一四九二年には陥つてしまつた。

コルキラ (Corcyra, Corfu) (四十二回豫備)

所在 希臘の西海岸にある一小島。

史實

- (1) 紀元前八世紀の頃コリント人此地に來つて殖民せしに起源する。
- (2) アテネはコルキラの請願によつて兵を出してコリントを討伐しコリントは援をスパルタに乞ひ茲にペロポネソス戰役始まる。
- (3) ヴェニスの大なる中古紀中はヴェニスの勢力圏内であつた。
- (4) 近年獨逸皇帝ウイリヤム二世の別墅のある風光名媚の島として著はる。

- (5) 世界大戰中セルビアは國土全部獨逸軍の掌中に歸するや此島に政府を置いて避難し「コルフ島の宣言」は實に名高い。

コルベール (Colbert) (十六回・二〇回豫備)

佛王ルイ十四世の治世第十七世紀の後半は佛國王政の極盛時代であつた。これより先ルイ十三世が僅かに九歳で即位し母后マリア・デ・メヂチ (Maria De Medici) が攝政してゐた時内治、外交共に見る可きものではなかつたが幸にリシュリユー (Richelieu) マザレン (Mazarin) 等の賢明なる宰相代々出でて其衰運徐々に挽回し王權は大いに擴張され中央集權の實は完成し佛國をして歐洲第一の強國たらしめた。

ルイ十四世はマザレンの死後宰相を置かず「朕は國家なり」(I am the state) と稱し君主專制主義を奉じ萬機を親裁し大いに人才を登庸した。コルベールも又其拔擢組の一人にして治績の大畧左の如きものがある。

(1) 財政整理策

マザレンの時代失敗した財政混亂の後を承けて彼は大藏大臣に擢用されるや歳入表を作り冗官を淘汰し、漸次に賣官を廢し世襲職をやめると共に下級民に課せられたタイユ (Taille) を減じ鹽稅を初め租稅徵收請合制度を廢して直接に人民より中央政府に徵收する事となし、以て財政の一大整理を斷行した。

(2) 重商政策 (Macantile System)

更に彼の偉大なる功績は保護政策を勵行した事である。内地商工業の發達を保護するために反物、レース、武

器の如き輸入品に禁止的重税を課し、一方外國より技師を招き指導の任に當らしめ新企業を補助し工業家の外國移住を禁じ外國船の佛國に入國するものには高額の税金を徴収する等國內の市場を保護した。これは經濟學上重商主義と稱せられ、コルベルに始まるからコルベルチスム(Colbertism)とも稱せらる。

(3) 殖民政策

ヘンリー四世の殖民政策を復興しルイジアナ、新フランス(カナダ)等の殖民地を開き、西印度、東アフリカ、東印度等に貿易會社を作り出張所を各地に設け東洋方面の商利に迄大いに着目した。

かくて其方法宜きを得國庫の收入は彼が就任後十年にして倍額に達するやうになつた。王は此財源を以つて各種の事業を始め宏大な土木工事を起し巨費を投じてヴェルサイユ(Versailles)宮殿を建て壯麗の極を盡し大いに文學・美術を奨励し佛國文學の黄金時代を現出し佛國は流行の中心地となり各國は競ふて模倣するに至つた。コルベルの各方面に於ける功績大なりと云ふ可きである。

サドワ (Sadowa) (十四回豫備)

所在 獨逸ボヘミア領内の一村名。

史實

ウイーン會議後獨逸聯邦内に墺地利と普魯西と頤抗する事になつた。普魯西王は對立の永續する可能性の無き事を認め且は獨逸帝國建設の爲にも一戦を賭する覺悟を決めて今は機會を待つのみとなつてゐた。偶然シレスウ

イヒ・ホルスタイン問題 (Schleswig-Holstein Question) 起り兩國開戦の導火線となつた。

既に鐵血宰相ビスマルク (Bismarck) は伊國のゴボン (Gobone) と一八六六年の四月秘密裡に攻勢的同盟を締結して居り名參謀モルトケ (Moltke) は又周密な策戦を樹立してゐたので宣戦後迅風の如き勢ひで三十二萬六千の兵を召集し墺國の機先を制し僅に三ヶ月にして牙城せまり一八六六年の八月未曾有の大勝利を以つて終結したのである。

戰鬪中サドワ村附近及びケーニヒグレーツ (Koenigsgrätz) に於ける激戦は兩軍の決戦であつた。普魯西のエルベ軍、第一、二の三軍約二十二萬は墺國のベネデック總督 (Benedek) の二十一萬五千の大軍と七月三日會し一大決戦を試みたが墺地利軍は大敗しオルミッツ (Olmutz) に退却するの止む無きに至り普軍は破竹の勢で躍進しウイーンに向ふ事になつた。此より墺軍は再戦の意氣全く挫折し勝敗の決愈々明となり八月の末にはブラーグに於いて本條約も結ばれる事になつた。普國に取つては最も記念す可き一戦である。

サンド・リバー (Sand River) (廿六回、卅回本試)

一八七八年のベルリン會議によつて多年の懸案であつて絶えず紛亂の源となつてゐたバルカン問題も一先づ解決したが列強は休息の暇もなく争つて世界政策或は帝國主義を率じて未開のアフリカ、アジア地方に自國の領土を少しでも多く獲んと志した。

特に英國は其先驅者にしてアフリカ内部の探検にも先鞭を着け北方埃及の經營より南方には南アフリカ聯邦を

組織し傳統的の政策として大陸縦貫主義を唱える迄に至たが遂に最近の世界戦争によつて其宿志の貫徹を見た。

サント河協商 (Sand River Convention) は其搖籃時代にケープ植民地とブール (Boer) 人との間に結ばれしものにして始め和蘭の東印度會社がケープタウンに植民地を開いたが其後英國の占領する所となり一八一五年のウィーン會議によつて全然其領有は英國のもの確認された。所が和蘭系のブール人 (和蘭人と土人との雜種) と英植民人と軋轢を見る事になり絶えず英人はブール人を壓迫し侵略を事とするので遂に其の羈絆を脱するが爲に故國を去つて東北に移住し一八三九年にはナタール共和國を創立しプレトリウス (Pretoria) を大統領に選んだ。ケープ植民地の英人は又地方に手を伸ばし土人を煽動し優勢な兵を送つて侵入を始めたので又此地を去つてオレンジ自由國を建設したが英國のケープ植民總督サー・ハーリー・スミス (Sir Harry Smith) は又事に托して此地を占領したのでブール人の多數は更に北進しプレトリウスと共に走つてトランスバール國を開くに至つた。英國が漸次南アフリカを手に入れんとする國策的膨脹主義ではあるがブール人にとっては悲惨な事であり其地方に苦節の後國基將に成らんとする時敵の侵襲を受けて赤手空拳になつて終るのでプレトリウスは何んとかして英本國と交渉を重ねて國基の安定を得ようとした。

遂に一八五二年英國外相グレーはプレトリウスとサント河協商を結ぶ事になつた。主なる條項は左の如きものであつた。

- 1、バール河外のブールの地を南アフリカ共和國としてこれを認め内事に干渉せざる事
- 2、今後はバール河北の地を占領せざる事
- 3、ブール人は奴隷を廢止すること。

然れども此の條約の有効期間は短時日であつて其後一八九九年に起つた南阿戰爭の結果全く英國の植民地となつて兩國共に其統治を受ける事になつた。

サー・ウォター・ローリー (Sir Walter Raleigh) (十二回豫備)

エリザベス女王の治世中無敵艦隊 (Invincible Armada) 擊破 (一五八八年) 後は昇天の意氣を以つて軍備、産業、植民、文藝と總ての方面に大英帝國の基を形成した。

就中航海植民事業の勃興は非常なものにして世界一周に、北氷洋に、新大陸に、幾多の名探検家を出し印度には東印度會社を設立し亞細亞發展の端緒を開く等見る可きものが多かつた。

ローリーも又當時の探検家であつて彼は早くから新大陸に着目し一五八四年には北アメリカの東岸肥沃の地にバージニア (Virginia) 植民地を作り煙草、甘藷、玉蜀黍等を盛に栽培し英本國を始め西歐諸國に輸送して利益を得又此の地方に栽培せしむるに至らしめた。

サラトガ (Sarotoga) (廿五豫備、卅七回豫備)

所在 北米ニウヨーク州の一市。

史實

北米に於ける英國の植民地は漸次繁榮に向ひ十八世紀には十三州の植民地を數える様になつた。然るに本國の實業家は久しく植民地貿易の利益を獨占し加ふるに本國政府も七年戦役後の財政困難を救ふ爲に課税せんとしたので植民地人の猛烈なる反對に遭ひ納税を拒まれたので政府も一度は條例を撤回したが更に翌年一七六七年茶、硝子、紙等の輸入品に課税した。當時自由平等の思想は盛に唱導され、又一面には英佛の植民戦役も終結して英國に依頼する必要も無くなつて來たので獨立の氣運が大いに動いて遂に一七七五年より獨立戦役を見る事になつた。

獨立軍は最初軍隊の訓練に乏しく兵器、糧食も又貧弱なもので時々利を失つて前途を憂慮せられた。



には植民軍の失敗に終つたがワシントン (Washington) の指揮によかつたのと佛國ラファイエット、ポーランド國の熱血兒コシユ

ーシコ等の來援するものも多かつたのとで一八七七年には獨立軍始めてサラトガに大勝利形勢果然一變した。

此の戦の影響は随分大きく、佛國政府は自由平等主義の感動より一は植民地戦に於ける雪辱戦の意義より觀望して機を窺つてゐたが容易く前途の光明が見えかけたので旗色を鮮明にし公然之と同盟して英國に開戦し愈々獨立軍の勢振ひ次にヨークタウン (York Town) の戦勝を得て列國も又獨立を承認する様になつた。

サラチン (Saladin) (十回本試)

埃及並びにシリアの سلطان であつて一一八九年より九二年迄續いた第三十字軍の時サラセン人を指揮して獨佛、英の諸王と戦かつた人。

始め貴族であつて義侠心に富み一兵卒としてヌレチンの下に在つたが後、埃及の土耳其宰相となり主權を握り威名を輝かし第三回十字軍の時には聯合軍間に内訌のあつたのに乘じヂペリアスにて基督教徒を破りイエルサレムに入りチルス市を圍んだ。獨帝はサレフの小河に溺れ、佛王フィリップは英王對して嫉妬の餘り歸國し英王リチャード一世單獨疲勞せる兵を率ひてイエルサレム市を包圍したが遂に陥らず一一九二年サラチンと休戦した。主なる條項は左の如きものであつた。

- (1) 三ヶ年間休戦する事
 - (2) チルス、一帯の海岸地方をキリスト教徒に割讓する事
 - (3) 爾後聖地巡禮者を妨げない事
- 王は和議の翌年死去した。

サン・ステファノ (San Stefano) (十三回本試)

所在 コンスタンチノブルの西南に在る。

史實

露國の南侵政策は一八七七年の露土戦役と化し土耳其軍の勇將オスマン・パシヤ (Osman Pasha) の奮戦等ありしがブレブナ (Plevna) の要塞陥落後は露軍の連戦連勝となり遂に翌年三月三日兩國間にサン・ステファアノの條約が締結された。此條約によれば

- (1) モンテネグロ、セルビヤは共に領土を擴張しルーマニヤと共に獨立を承認せらる
- (2) ブルガリヤ國は土耳其本國に租税を納めて自治制を許され基督教信者を公選して君主とする事を許さる。
- (3) トルコは國內の改革を必らず斷行する事
- (4) 土國は露國に償金三億一千万ルーブルとアルメニヤの大部とドブルチヤを割讓する事
- (5) ダーダネルス海峡は戦時平時に論なく局外中立國に戦艦の航行を許す事

等であつて露國のストラブ統一運動の完成も近きにあらんとの形勢であつた。時に英國の外相ソールスベリー (S. Salisbury) は強硬に反對して此條約を認めなかつた。つまり露國がバルカン地方で覇を唱える事は英國の世界政策にとつては大威嚇たるを脱しないからである。當時奥國も又政治、商業上の利害關係より露に對して頑強に反抗し風雲將に急ならんとしたが普國宰相ビスマルクの調停によつてベルリン會議が同年七月開かれ前條約は大に變更され殆ど無効となつてしまつた。露西亞にとつては恰も日清戦役後に於ける三國干渉とも見る可きものである。

サボナローラ (Savonarola) (廿六回豫備)

伊太利の宗教改革論者。フィレンツェの貴族にして幼時より學を好み二十四才にしてドミンゴ派の僧侶となる

一四一四年のコンスタンツ宗教會議に於て教會改革問題も一旦解決され教會の統一成立したとはいへども教會の勢力は依然振はず法王亦大志とはなく俗事に關し奢侈生活を樂しむ様になつたので彼は斷然立つて勇を鼓舞し腐敗せる宗教界に一波瀾を起さんとし其の勢力は一時フロレンス附近にありて可成り人目を惹きたりしも未だ法王黨の權力に問ふ可くもなく彼の警世の叫びも異端として遂に捕へられ禁刑に處せられた。爾後暫時反抗の聲を聞かない様になつた。即ち彼はウイクリフ、フス等と同じ宗教改革 (Reformation) の先驅論者である。

サン・ビンセント (St. Vincent) (二十三回本試)

所在—葡萄牙の南部の岬。

史實—奈翁の埃及遠征の前、英國の名提督ジャームスは佛の同盟西班牙海軍を此岬附近で撃破し佛蘭西海軍をして一層其勢力を微弱ならしめた。

ジエムソン (Jameson) (廿八回本試、四十一回豫備)

伯林會議以後歐洲の天地が平穩になつてから各國は帝國主義を奉じ寸土を争つて暗黒大陸なるアフリカに着目した。英國は早くより南阿の經營に着手し遂には併呑政策を持するに至つた。時に南阿に於けるキンバーリー、ヨハネスブルグの金剛石、金鑛の發見さるるや一攫千金を夢みた歐洲人特に英人は競ふて此地に向ふ様になつた。當時のトランスヴァール大統領クリューゲル (Krugger) は英人の野心を看破し獨逸以下の諸國に同情を求め警戒を怠らなかつたが偶然ジエムソン (Jameson) 事件を惹起した。

南阿特許會社の社長ローヅ (Cecil Rhodes) がアフリカ縦貫の一大理想を樹て在住英人のために参政權を求めてクリューゲルと對峙してゐる時ジエームソン博士 (同會社の一支配人) は私かにローヅの命を奉じ一八九五年の五月十二日ヨハネスブルグ市に英人の保護とオイトランドの不平黨一派の一揆を助ける爲五六百の騎馬巡査と共に大膽にも共和國に侵入した。

然るにブール人は之を探聞したので彼等一行を途中に要撃し遂に之を捕へ英政府に送つたので政府はこれを禁錮に處し翌年ローヅも植民地の首相を辭するの止むなきに至つた。

又此事件は後に起る南阿戰役の一遠因とも又前哨戰とも云ひ得る。

ジョン・アダムス (John Adams) (三十八回本試)

北米合衆國第二代の大統領、初め辯護士なりしが後獨立に盡力し一七七六年七月獨立宣言書を可決せしめた一七八〇年合衆國を代表して和蘭に赴き、一七八二年フランクリンと共に佛蘭西に渡り同盟を約し、ワシントン大統領となるや彼は副大統領に選ばれ一七九七年大統領に當選する。(一八二六年歿)

【注意】彼の長子ジョン・クインシー・アダムスは一八二五年第六代大統領となつた。

シオモン (Chamont) (四十一回本試)

所在 佛國オートマル縣の首府

史實

諸國民獨立戰爭の稱のある一八一三年のライプチヒ (Leipzig) の戰後奈翁はモンテロー (Montreuil) の一戰

に勝ち稍形勢が有利に傾ひて來た時列國とシヤチヨンに會して講和の議が開かれたが列國は更に奈翁が壤地利を懷柔せんとするを見、英國のカツスルリーの發議に基きシヨモンに會し英・墺・普・露間の左の條約を締結した。

(1) 奈翁が佛國境を一七九一年の舊に復せざる限りは斷じて之と和せざる事

(2) 今後共防禦同盟を作つて初志の貫徹に努力する事

かくして壯烈な巴里攻撃は開始された。即ちシオモンは戰勝への祝福す可き會合の催された地である。

ジョン・ソビエスキー (John Sobieski) (卅八回本試)

オスマン・トルコは一五二六年のモハチ (Mohacs) の一戰以來勢力を南歐に震撼せしめたが其後十七世紀に入つては徐々に失勢するに至つた。

當時オーストリア政府がホンガリヤ内の新教徒を壓迫し士卒の宿營を強いる等の暴虐を行なつた事から一六七三年には人民蜂起して官憲に抗した。中にもエンメリヒ・テケリ (Emmerich Tokori) と云ふ勇敢なる貴族ありて強大な兵力を得、次に皇帝レオポルドの反對者佛王ルイ十四世の援を得、且トルコ帝は又テケリをオンガリヤ王に封じ大軍を送り保護に當らせた。

尙トルコ軍はオーストリア領に侵入し焚掠を逞しくしながら一六八三年にはウィーン城に迫り包圍し首府は危急に陥つた。然るにオーストリア軍中にスタルヘンベルヒ (Starhenberg) なる者ありて奮戦してゐる時ロート

リンゲン公チャールスの率ゐる帝軍とポーランド王ジョン・ソビエスキーが救援の爲にウイーンへ來たので城下に激戦が行はれ一六八三年の九月にはトルコ軍は敗北して退却するの餘儀なきに至つた。就中ソビエスキーの勇戦は目覚ましいもので遂にウイーンの危急を助けた。其後トルコの勢力は俄に衰へ、ホンガリヤも程なくドイツ軍に征服されテケリは逃亡した。

ジョン・ノックス (John Knox) (卅六回本試)

蘇格蘭の宗教改革論者で第十六世紀の初期に生れルイテルと同様青年時代はローマ正教の宣教師であつたが教會の腐敗、法王の俗化を憤り法王より絶縁し新教を高唱する事になつた。

當時蘇格蘭には舊教の保護者女王マリヤありて同教の全盛時代であつて彼は常に非常な迫害を受け、其成功し難きを知つたので一先づ新教 (Protestant) の瑞西ゼネヴァに走りカルピンと提携し時々本國に注意の弛むを見て布教に努力した。

ノックスが英國を去つてからはエリザベスとマリヤ兩女王が政權上の争を起し此が新舊兩教徒の争と化し遂にマリヤは退位する事になつたのでノックスは時運の可なるを見、勇みて本國に歸り新教徒の急先鋒となつて萬丈の氣焰を吐いた。

然れどもエリザベスは其後新舊兩教議を折衷したものを國教として統一令 (Act of Uniformity) 迄出すに至つたので彼の理想に迄到達し得なかつたとは言え新教主義の大に加えられたのは彼の功績である。彼は英國宗教

界に於けるルイテルである。

【注意】アメリカ合衆國の外相にも同名の人あり。滿洲鐵道中立問題を提議したことでも有名である。

シャジュール (Chateaul) (二十三回本試)

紀元一七五八年佛國の宰相となる。當時佛、英兩國は植民地問題の爲に相反目し、一七五六年七年戦争起るや遂に干戈を交ふるに至りしがシャジュールは此の際急に英國に侵入して、一舉に之を撃破するの利を思ひ、諸方に散在せる佛國艦隊を英吉利水道に集中し以て陸兵五萬五千の輸送を策した。然るに此の頃英國は其海軍力遂に佛國を凌駕し、且つロッドニーの如き名提督ありしを以てシャジュールの此謀略に對し直に抗戦の策を講じ、佛國艦隊の未だ出動せざるに先ち、不意に諸港を襲ひて悉く撃破した。シャジュール屈せず盛に輿論を喚起して海軍の再興を計り、更に西班牙と同盟して英國を挫かんとせしが、英國また機先を制して西班牙艦隊を撃滅せしむため其の計畫再び顛倒した。尋で一七六三年パリ條約成り兩國和議を締結せしもシャジュールは英國に對して報仇の念止まず自ら進んで外務大臣より海軍大臣に轉じ専ら海軍の充實に努め大に其面目を一新し之によつて佛國は亞米利加合衆國獨立戦役に際し、植民軍を授けて英國に大打撃を與へ、マルセイユの條約成るに及び其領土を擴張することを得た。

ジズカ (Zizka) (四十回豫備)

ブライグ大學の教授フス (John Hus) が一四一四年のコンスタンツ (Constance) の宗教會議の結果翌年焚刑

に處せらるるや其の信徒激昂し遂にフスに反対した牧師、律僧に復讐し、ブラーグの市役所を破壊し大官を暗殺する等の暴行をなした。

老王ウエンツェルの死後皇帝シギスモンド (Sigmund) がボヘミア王を兼ねたので益々乖離し排斥叛亂の火を各地に擧げた。ジズカはフス信者中のタボル派の人であつて一軍の將となり屢々シギスモンドの軍を敗つた。

彼は戦の中途一眼を失ひ後には失明者と迄なつたが戦界に長じ籠に乗つて地形を暗じ徐ろに策戦したと言ふ。

かくの如く一時勢威大であつたが中途にて彼が仆れてからは二派に岐れて振はなくなつた。

彼も又ウイクリフ・フス等と同様宗教改革の先驅者であつて又殉教した尊き人物である。

少ピット (Younger Pitt) 一七五九年——一八〇六年 (十五回豫備)

英國の有名な政治家にして、かの名高き老ピット (Older Pitt) (ウイリヤムピット・チャタム伯) の第二子、彼は父に劣らぬ大政治家にして其事績甚だ多い。彼は初め國會議員となりついで宰相となる。佛國大革命の起るやブルボン王家の保護に努め、ついでナポレオン出するや歐洲列國を誘ひて同盟を組織し、極力之に反抗した。彼はナイルランド問題に關して職を辭せしが其の後再び宰相となり、トラファルガー (Trafalgar) の海戦に勝利を得たる後益々敏腕を振つてナポレオンの政策に反対したがその没落を見ずして病歿した。

ジブラルタル (Gibraltar) (二十六回本試)

所在 西西班牙の南端にある英領の港市 (同名の海峡に臨む)

史實 七一一年サラセンの勇將タリク (Tarik) 此地を經界しジブラルタル (タリク、の岩 Jebel al Tarik) の名起る。西班牙繼承戦役の時、一七〇四年此地を陥れ、一七一三年ユトレヒト條約 (The treaty of Utrecht) によつて確實に英領となる。北米合衆國獨立戦役の際西班牙は此海角の恢復を圖りしも失敗に歸し永く英領として地中海の制海權の確保の爲に放さぬ。

シラクサ (Syracuse) (二十八回、十八回豫備)

所在 伊太利シシリ島の南部にある希臘ドーリア人の植民市。

史實 第三ポエニ戦争の時羅馬の艦隊百五十隻を以て此市を圍む。此市の有名な物理學者アルキメデス (Archimedes) は機械學を應用して敵を苦しめたるも紀元前二一二年羅馬に降る。

シャンポリオン (Champollion) (卅六回本試)

埃及は世界最古の文化發源地である。此の古代埃及文化に關して研究した世界的に有名なる學者は佛國のシャンポリオンである。

彼は盛に埃及の古代を研究しロセッタ石 (Rosetta Stone) の埃及文字を希臘文字と比較、研究して其讀方を發見した。一八二四年にはチャールス十世の命を奉じて伊太利のトリノ、ローマ、ナポリ等の博物館に行き埃及の遺物を蒐集し後年憶がれの埃及に向つて學術的探險の途に登つた。シャンポリオンの熱烈な究學心は幾多の著書となつて公刊され埃及歴史研究に一大光明を與へた。

シノペ (Sinope) (卅九回本試)

所在、黒海の南岸に在る。

史實

(1)ギリシヤのイオニヤ植民地の一市であつて古代黒海貿易の中心地、ポントス王ミトリダテス四世この地を征服しシノペを都とせし事あり。

(2)露帝ニコラス一世はペートル大帝以来の南侵策を奉じてトルコ侵略の大望を抱いてゐた時聖地問題起り露場管理権の要求、ギリシヤ教會の保護権を拒否さるるや露土間の開戦となつた。一

開戦の年即ち一七五三年の十一月末兩國間にシノペの海戦が行はれ土將オスマン・パシヤ勇戦せしも衆寡敵せず露將ナヒモク (Nachimov) の爲に敗られ多く溺没した。

こゝに至つて英佛は東方政策のため露國が此方面に侵出する事は西洋の均勢を破らんとするものと認めて宣戦する事になつた。結局この戦はクリミア戦の主なる近因となつた。

シヤートブリアン (Chateaubriand) (一七六八年—一八四八年) (四十三回本試)

佛蘭西のローマンチズム派の先驅者。『クリスト教の神髓』『イエルサレムへの巡禮』『殉教者』『墓よりの思ひ



出』は其代表作であるが、華麗な筆致で、従来の靜穩な古典的文學に比して、技巧と氣力に富んでゐる。尤も誇張の風は存してゐるが七月革命で王政復古なるや此老詩人の宗教上、政治上の意見が勝利を得たので彼の黄金時代が生れる。——大臣となり公使となりて活躍し政治的生涯も可成り華かなものであつた。

セシルローズ (Ceil Rhodes) (二十三回豫備)

英國の「南阿のナポレオン」と稱せらるゝ奇傑で、十七歳の時肺患療養の爲、南阿に赴きしが、性放曠にして精力絶倫、冒險投機を有し、金剛石鑛山を採掘して巨萬の富をつくり、ついで南阿の首相となる(一八九〇年)ブール人に壓迫を加へて、トランスバール (Transvaal) 大統領クリュゲルを捕へんとして失敗し、つひに官を辭して南阿特許會社の社長となり北方ロデシヤを經營した。ローズの理想は自ら實現せざりしも英本國外相チエンパレンによつて遂に實現せられた。

セダン (Sedan) (十七回本試)

所在 佛國東北部白耳義國境に近い要塞市。

史實 一八七〇年ナポレオン三世獨軍に包圍されて降伏した所。かくて佛蘭西第二帝政の没落をなす。

セネカ (Seneca) (十七回豫備)

羅馬の修辭學者セネカの子。又大富豪を以て名高い。幼少の頃羅馬に來り代言人となり、後ストア派(克己主

義)の哲學を學びて泰斗と仰がれ暴君ネロ帝の師傅となり罪を得て、六五年泰然として死に就く。著書安心立命論最も著はる。セネカ

セルヴンテス (Cervantes) (一五四七年—一六一六年) (九回・二十四回豫備)

西班牙王フィリップ二世の晩年に出でたる戯曲小説の大家、初め軍籍に入り一五七一年レバントの大海戦に参加して勳功を樹てた。後文筆を以て立ち、其流麗にして滑稽味のある數多の名作は當時の人々に痛く賞讃せられ、滑稽小説の白眉と稱せらるゝドンキー・ホーテ (Don Quixote) は此人の作である。(一六一六年の沙翁の死んだ) 同じ日に彼は死んだ)

センラック (Saulac) (四十二回本試)

所在、英蘭の南部英國海峡に面してゐるヘスチングス (Hastings) の別名である。

九世紀の初頭英蘭の七王國を統一してエグベルト (Egbert) 王位に就いた。王孫アルフレッド大王に至つてデーン人(丁株より來るを以て Danes 人と稱した) の侵入に會ひ驅逐する事能はず十一世紀の初めデーン王カヌート (Canute) は英蘭を征服し(一〇一六年) 丁株・瑞典・那威を兼領して北歐に雄飛したが王の歿後、アルフレッド大王の後裔エドワード (Edward) 王位に就いた。然るに王歿後繼嗣無く王后の弟ハロルド (Harold) は王位を襲ふた。當時佛蘭西に居たノルマンジー公ウイリヤム (William) は英國王位繼承の權ありと稱して大舉侵入し一〇六六年のセンラック(ヘースチングスとも云ふ) の決戦に勝つて英蘭を領有してノルマンジー王朝を創

めた之を『ノルマンの英蘭征服』(Norman Conquest of England) と稱せらる。ウイリヤム征服王 (William the Conqueror) は厳格な制度を建て、銳意治を圖りしが新來のノルマン人と先住民のアングロ・サクソン人と反目し久しく融和せなかつたが時を経るに従つて、其制度、法律、風習、道德、文藝、言語が混和して活氣に富んだ優秀な國民性を發揮した。——今日英國の祖先はかゝる雜種の混血から出來たものだ。普通此センラックの戦で萬般の事態が變つたと言はれる。

サン・シモン (Saint Simon) (十一回本試)

佛蘭西の社會主義者で且つ近世歐洲社會主義の建設者である。實證主義 (Positivism) を提唱して近代文明を實證主義的に導いた點に於て、フランスの文明史上並に思想上重大なる位置を占める。アダム・スミス (Adam Smith) の經濟學說を根據にして「製造品の賣價と原料の代價との差額は全部製造者、即ち労働者の囊中に收得すべきに至るとする。此學說は萬世不易の眞理だ」と喝破した。永く社會黨の論據となる。

センババ (Bempach) (十七回豫備)

所在—瑞西國リュツェルン湖 (Lucern) の北西に當る。

史實—瑞西の獨立戦争の時一三八六年此地に瑞西軍は塊地利軍を撃破した。不羈獨立の精神を有する瑞西軍は封建的領主の束縛をかくして脱した。

スタイン (Stein) (十六回豫備)

スタイン伯はプロシヤの名高い政治家、ゲツチンゲン大學を終へ、一八〇七年ウイレルム三世に仕へて宰相となりしもナポレオンに貶黜せられ逃れて露西亞に赴きナポレオンに反対して「ナポレオン没落」の策動に必死となる。——ウイン會議にも大に活動した。

スタニスラウ・レスチンキ (Stanislaus Leszcynski) (一六七七年—一七六六年) (卅回本試)

一七〇年波蘭王に選立され僅にして廢せられた。波蘭王アウグスト死するや、王位繼承問題起り佛王ルイ十五世に推され再び王位を要求して大亂を醸したが一七三八年ウイン條約により其の要求を捨てて。

スチリコ (Sullio) (三五九年—四〇八年) (二十回、十五回本試)

西羅馬帝國の將軍。三九五年西ゴートの酋長アラリック (Alaric) は希臘を劫掠するや、彼はローマ軍を率ゐて東ローマの救援に赴き、西ゴートをコリントに包圍した。又四〇五年東ゴート人伊太利を犯すに及び之を破る。されど其威勢強大なるを見て四〇八年ホノリウス帝の命によりラヴェンナ (Ravenna) に於て殺さる。

スバルタクス (Spartacus) (三十八回本試)

羅馬奴隸戦争の首魁。紀元前第一世紀の後半に於て、羅馬の武人の一隊に推されて蜂起し、羅馬の討伐軍を連敗せしめ羅馬も一時危急に陥らせしがリキニウス・クラツクス征討軍に將として來り撃つやスバルタクスは討死し其餘黨もボンベイウスに殲滅される。

スバロフ (Suvorov) (一七二九年—一八〇〇年) (十五回、卅二回本試)

芬蘭生れの (瑞典人系) 露西亞の名高い將軍、七年戦争に出陣し、一七八九年トルコ征伐に大功を樹て一七九四年波蘭の反亂を鎮定し、一七九九年第二回大同盟 (對佛) の露境聯合軍總司令官となりて伊太利恢復を志しアルプ山を越えて伊太利に入り佛軍を破る。

スカンデルベク (Scanderbeg) (一四〇四年—一四六七年) (廿七回本試)

アルバニア生れの勇敢な將軍、父に繼ぎアルバニア侯となり回教を禁止し、土耳其軍隊をしてスルタンに裏切らせマホメット二世を苦しめた。彼はアルバニア及びエピロス山地の要害によつて土耳其軍と戦ひ或はバルカン諸國と糾合して歐洲基督教徒の選手として異教徒トルコ人討伐の任に當る。ヴァルナの戦以後フニヤチの軍も不振にして基督教國の威勢日に非となりしも彼は其死 (一四六七年) に至るまで健闘しアルバニアの獨立を維持した。されど彼の死後は適任なく強大なる土耳其に侵され——西歐全土も遂に土耳其に奪はれんとするが如き形勢となつた。

ソルフエリノ (Solferino) (七回)

所在 伊太利北部ガルダ湖南の村落。

史實 伊太利統一戦争の時、一八五九年六月二十四日、境地利帝フランス・ヨセフ自ら總督となり、マジエント (Magenta) の敗耻を雪がんとて軍を進め、此村に沿へる丘上に於て、佛帝ナポレオン三世及びサルヂニア王の聯合軍と激戦せしが境軍遂に大敗し佛國に屈服するの止むを得ざるに至る。此役境軍の死傷二萬五千被捕者

六千、佛軍の死傷一萬五千、サルチニア軍の死傷五千に及びし激戦であつた。

タウロツゲン (Tauroggen) (三十四回本試)

所在 || チルチット (Tisit) の東北に在る。

史實 || ナポレオン大帝露國征伐に失敗するや、リガ (Riga) にあつた普將ヨーク (York) は叛旗を翻し、獨斷を以て一八一二年十二月末此地にて露國に休戦し將來露獨同盟して強敵ナポレオンに拮抗すべきことを約束した。奈翁の運命これより一層悪くなる。

タキツス (Tacitus Cornelius) (八回)

古代羅馬の歴史家にして、辯論にも又長じてゐた。名將アグリコラ (Agricola) の女婿となり「小プリニー」と共にマリウス、ピスカスを告發したるを以つて有名である。

歴史は當時年代記の様なものであつたが彼は純粹の歴史を構成した。有名な「ゲルマニヤ誌」(Germania) はゲルマニア民族の制度・風俗・習慣を観るによい。彼の著に「アグリコラ傳」(Agricola) がある。此は後世傳記書類の模範と稱せられるもので特に性格を巧に洞察してゐる。「ヒストリエ」(Historiae) は彼が在世當時の歴史を述べ「アンナレス」(Annales) アウグスツス帝殂落の歳から紀元六九年までの編年體歴史である。

ダニエル・ウエプスター (Daniel Webster) (一七八二年—一八五二年) (三十九回豫備)

アメリカ合衆國の政治家にして法律家、又非常なる能辯家である。聯邦同盟主義を提唱し一八一三年議員とな

り大陸封鎖より起れる英米間の紛争に際して對英宣戰に反対した。

希臘獨立戦争に對して神聖同盟の行動を非難し輿論を動かしたハリソン大統領、ファイルモア大統領の國務卿となりのち大統領候補に出でしも失敗した。

ダマスクス (Damascus) (卅二回本試)

所在 || シリヤ地方の中心都市。

史實

上古に於ける西歐文化の淵源地は埃及とメソポタミヤ地方であつて此文明國の間にフェニキアの商業國があつた。而してフェニキアは兩文化の傳播に貢献する所大であつた。ダマスクス市はフェニキアの近くにあつてメソポタミヤと交通の要路に位し「東洋の眼」とまで稱せられた。

ダビッド王 (David) も一時此の地をヘブライ王國の首府と定めし事もあり後に波斯領となつてゐたがアレキサンドル大王遠征の途路イツスス (Issus) 戦後南下の途中に征服された。

此地は又聖墓イエルサレムの近くに在るので自らキリスト教の中心都市をなしてゐたが第七世紀に入つてサラセン人の迫害に遭ひハリド (Khaled) アムル (Amru) 等の爲に占有せられた。

聖祖ムハメットの死後カリフの地位オンマヤ家に移り中心地もメチナからダマスクス市に遷された。此から同市は産業、政治の都となり繁榮を極め得た。其後オスマン・トルコの侵入を受け十字軍の役中にも暫々戰禍に見

舞はれた。此地附近はキリスト、サラセン兩宗派の發源地であつた。

タリク (Tarik) (十六回豫備)

回教徒は第七世紀より九世紀迄西歐に活動を演じた。特にカリフ (Caliph) は信教、朝貢、侵略の三策を掲げて大勢力を形成し地中海は恰も内海であるかの如き觀迄呈した。

タリクは埃及へ派遣されてゐた將軍ムサの部將であつた。其時イスパニヤのウイッチア (Witiza) が王位を西ゴードのロデリック (Rodrig) に奪はれたので其不平の徒と共に援をアフリカのサラセン人に求めた。タリクはムサの命によりて兵を率ゐて海峽を越えジブラルタルの要塞 (タリクの岩意) を根據として七一年ヘレスド・ラ・フロンテラ (Xeres de la Frontera) に戦ひ西ゴードを滅亡させ、ロデリックを溺死せしめた。即ちタリクは西ゴードの征服に勳功のあつた人である。

の ダルウイン (Darwin) (一八〇九年—一八八二年) (十六回豫備)

有名な英國の生物學者にして進化論 (Evolution) の鼻祖である。エチンバラ及びケンブリッジ大學で生物學を研究し一八三一年南洋探検船ビイグル號に乗組んで「博物學者の世界航海」を公にし其他生物學に關する著書多く人々評して「博物界のニュートン」と稱する。就中「種の起源」(Origin of species) は人口に膾炙する名著である。彼の生物學的進化論が唯に博物界のみならず他の學問研究法も進化論的研究が熾となり文化社會に及ぼしたる影響は實に絶大なるものがある。

タレラン (Talleyrand) (一七五四年—一八三四年) (十回豫備)

佛蘭西の有名なる政治家にして外交家である。始め僧侶なりしものち政治界に入り、一七九二年英國に派遣せられ後ナポレオン一世の拔擢を受け外相となつて外交上殊勳を立てた。後ブルボン王家のルイ十八世に出仕し、外相となり(貴族に列せらる)ウイン會議には大使として派遣せらる。

タレント (Taranto) (十八回豫備)

所在 伊太利南方カラブリアに在る富強な希臘の植民港市。

史實 羅馬人は嘗て此港に入港せざることを誓ひしも、紀元前二八二年入港したればタレント人は兵船を破壊し乗組員を殺戮した。こゝに於て羅馬人は口實を得て問責の師を起し開戦を布告した。タレント人は本國エピルス (Epirus) 王ピルス (Pyrrhus) の來援を得しも紀元前二七五年、ベネベントム (Beneventum) の一戦に大敗してピルス急に歸國したれば此市もローマに征服せられ自治を許さる。西羅馬帝國の滅亡後はゴート人・ロンバルチャ人・サラセン人等に領有せられ一〇六三年ナポリ王の征服する所となる。

ダンバー (Dunbar) (廿九回豫備)

所在 英國のスコットランド州に在る。

史實

民權の蹂躪、壓制を事としたスチュアート朝のチャールス一世 (Charles I) は遂に國民の反抗によつて撃破さ

れ共和政時代を現出する事になつた。英傑クロムウエル (Cromwell) は議會黨を率ゐて王政を仆し五人の政府委員を作つて事實共和國となした。此時議會にインデペンデント (Independents) (共和政治主張) プレスビテリアン (立憲王政主張) (Presbyterians) の兩派を生じたが彼は武力を以つて保守派を征服し共和政の實を擧げた。チャールス一世處刑の報各地に傳はるやスコットランド、アイルランドの勤王黨は蜂起し共和國を認めない事になつたので彼は征討の軍を出だした。

初めスコットランド軍は堅固な要塞によつて敵を攻めたので流石のクロムウエルも退却を志したがスコットランド軍の牧師が王等の陣營生活の逸樂に慥らず、戦勝に乗じて陣を前に攻撃の態度を取らしめた。

此を見たクロムウエルは王は味方の掌中の物であると勇を鼓しダンバーの一戦に大いに敗つた。時に一六五〇年九月これよりエヂンバラを征服して完全な勝利を得た。次のダンバー戦勝の一週年にはアイルランド軍をウ



ースター (Worcester) に敗り共和國の威力は大英全土に及ぶ事になつた。
タンネンベルヒ (Tannenberg) (卅八回豫備)

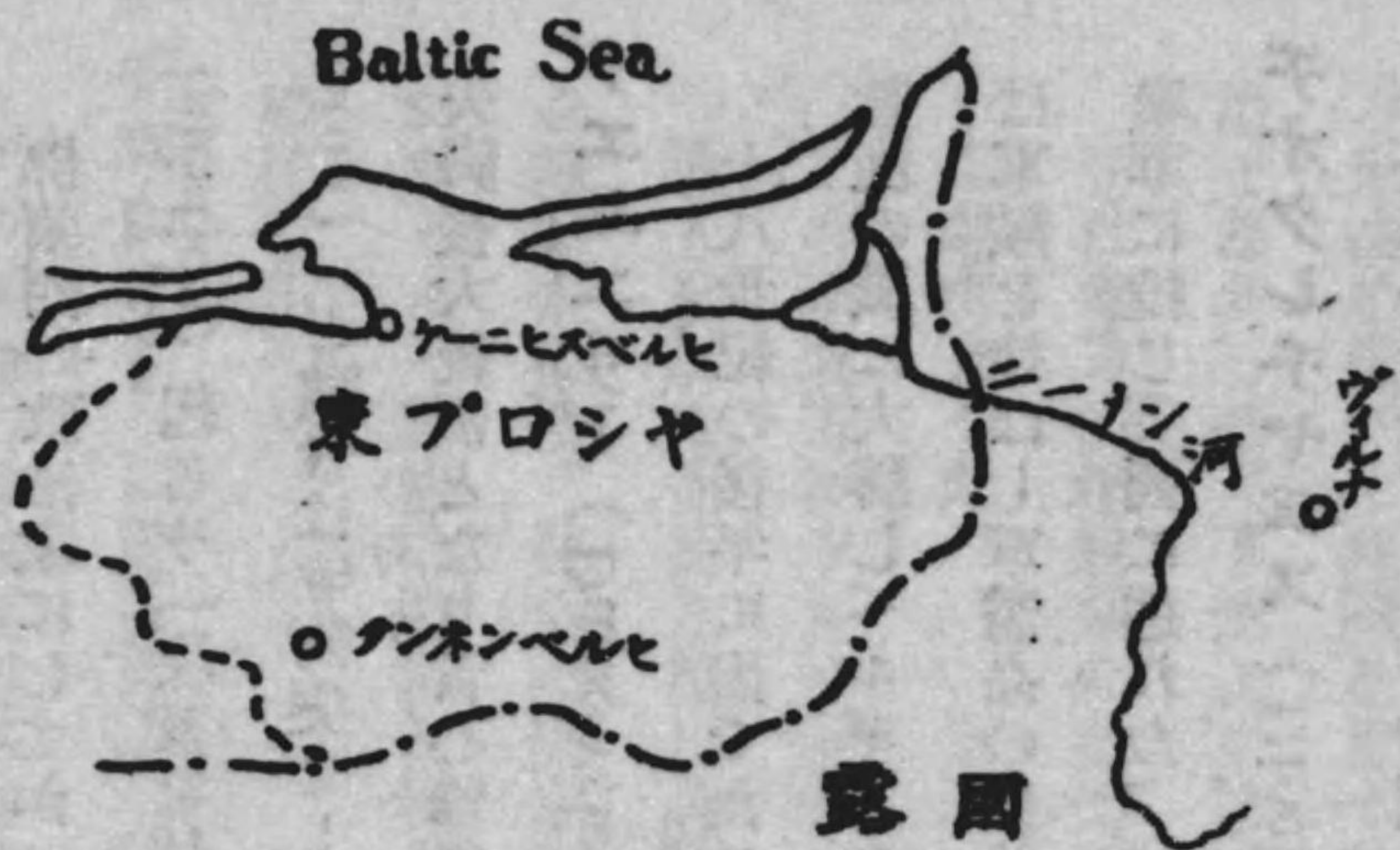
所在 東プロシヤの地名にして湖沼甚だ多い地方。
 史實

(1) ポーランド王カシミル (Kasimir) ヤゲロ (Jagello) の時代は中世ポーランドの極盛時代である、此當時プロ

シヤは搖籃期であつてドイツの騎士團體がスラヴ諸族と激戦し、オーダー河からフィンランド灣迄延長して建國をしたが一四一〇年北上せるポーランドのヤゲロ軍の爲タンネンベルヒに惨敗し團長は部下と共に戦死し騎士團體はポーランドの宗主権の下に立つ事になつた。次で一四六七年トルン (Thorn) の和約が兩國間に成立し團長はケーニヒスベルヒに移り全くポーランドの統治下に服する事となつた。

(2) 歐洲戦役の開始せらるるやドイツ國は西方に攻勢的態度を取り一舉にして巴里迄を潮の如く襲撃せんとした。其間東方は少數の兵士にて防禦の状態を敢て戦はうとはしなかつた。露國も此の機に乗じて遅延ながらも活動を開始した。先づ東プロシヤ方面へ侵入し、レンネンカンブ將軍はヴィルナから西に向ひ、サムソフ將軍はワルソーから北進して來た。一九一四年の八月二十六日には露西亞のサムソフ軍と獨逸のヒンデンブルグ將軍の率ゐたる一隊とタンネンベルヒの一大會戦が試みられヒンデンブルグの作戦奇勝を博し寡兵を以つてよく敵を敗りサムソフ

は退却の途、湖沼の多いマズールの森林方面に追ひつめられ自身は戦死し全滅を蒙つた。これが爲レンネンカンブも退却し九月には東プロシヤ一帯再度獨逸に奪取された。然も此方面の戦は西方マルヌ戰の牽制とな



つた所に深い史的意義が含まれてゐる。

チエール (Thiers) (一七九五年—一八七七年) (十三回)

佛蘭西の政治家にしてかつ歴史家である。一八三二年代議士となり、次で國務大臣となる。東方問題 (Eastern question) 起るや「埃及を扶け土國を抑へて自國の勢力を張らん」とせしも英國の外相パルマストン (Palma-son) と議合はす衝突せしが佛王ルイ・フィリップはチエールを罷免せしめ殘念乍ら退く。後ナポレオン三世失脚後大統領となり苦心慘憺國家經營に努力した。

チエムエリー (Dunovriez) (二十六回本試)

十八世紀の後年に出でたる佛國の將軍である。大いに佛蘭西大革命に盡力し、バアルメー・ゼンマーペー等の數度の戦に大勝しベルギーを征服せしがネールピンデン (Neerwinden) で奥軍に破られた。過激なジャコベン黨は軍隊を送はし軍需品の供給を怠りしたためと稱した。彼は溫和思想を抱き、ブルボン王統の恢復を策して失敗し奥軍に投じ英國に逃れた。彼がチロンド黨員 (溫和主義) なりしたため他のジロンド黨は禁錮せられて遂に滅ぶ。

チオクレチヤヌス (Diocletianus) (二十回本試)

羅馬の賢帝。ローマ帝國の中心勢力の衰頹と皇帝權の確立するに従つて朝廷に跪禮を用ふる等のベルシヤ風の外形が容れられ始めた時にチオクレチヤヌスは出でた。

帝の立ちしは二八四年にして皇帝の威信も地を拂ひ國勢又廢頹に傾むてゐた時であつた。彼は廣大な羅馬帝國

を一人の力によつて統御する事は至難であると考へ四分制度を採つた。即ち二人のアウグスツス (Augustus) と二人のケーザル (Caesar) を置き自己はアウグスツスの一人で最高權を持ちニコメチヤ (Nicomedia) に都して東方を治め儀式・典禮を重くし朝廷の威嚴を加へたので彼の治績と相待ちて共和制の殘骸は消失し純然たる專制政治となり一時天下がよく治まつた。

帝は地方派遣將軍の勢力が過大で、却つて禍する事を思ひ文武兩權の分離を計り行政官の權能を縮少し各縣を十二部に分つた。

この頃北方にゲルマニヤ (Germania) 民族が起つて屢々入寇したので兵備の必要を覺りイタリヤ兵を増加し且つ蕃人を以て傭兵となし兵數を四倍に増加し兵制を改良した。尙彼はよく財政方面に意を用ひ稅制を一定し生活必需品の價格、賃金の決定等も行つた。彼は各方面に非常な手腕を發揮し綱紀を振肅せしめたる等の功はあつたがキリスト教徒に迫害を加えか一事は確に大失敗であつた。後三〇五年職を辭してコンスタンチウス・クロルスに位を讓つた。

チスレリー (Disraeli) (十六回本試)

二月革命の餘波は直ちに普くヨーロッパ諸國に及び到る所に政治上の改革を起させた。英國にあつては改革の機運が既に熟してゐたが其の成功を促進せしめた功は大であつた。

一八四七年の選挙の結果はホイグ (Whig) トリー (Tory) 兩派の政争を變じて自由 (Liberal) 保守 (Conservative)

native) 兩派の對立となつた。前者は内政の改良、平民主義を政綱とし後者は國威の發揚、帝國主義の實施を目的とした。

ヂスレリー(後のベコンスフィールド伯(Beaconsfield))は選ばれて保守黨の首領となつた。

彼は一八三七年國會に入りて議席を占め次で保守黨のダービー(Derby)伯に拔擢され組閣の時大藏大臣、院内總理となつた。當時選舉法の改正は輿論であつたのでダービーも自ら進んで之を成し遂げんとてヂスレリーに議案を作らしめた。之は一八六七年提出され幾多の修正に遭つたが通過した。其後ダービーは辭職しヂスレリーは代つて首相となつたが改選の結果敗れて自由黨のグラッドストーン(Gladstone)内閣が成立した。

グラッドストーン内閣は六年の間持續しアイルランド國教廢止法案、並びにアイルランド土地法案等幾多の懸案を解決したが外交方面に國威を失墜し、且つ内治も急激にして社會の或分子をして不安を抱かしめ不満の聲が少なくなかつたので遂に一八七四年議會を解散したが保守黨の爲に敗れ辭職した。

ヂスレリーは保守黨を率ゐて再び内閣を組織し専ら國威の發揚に努力し前内閣の反對に内治を停滯勝にし外交方面に留意し海軍の擴張等を計つたので國民は一般に新内閣を謳歌した。

然るに國威發揚政策を採つた結果財政上に大打撃を受け一般に經濟上の危期に際會し同盟罷業等起る様になり民意から離れつゝあつた時アイルランド問題又急を要する事になり遂にその内閣は崩壊を見るに至つた。

伯林會議は彼の内閣中に行はれたものであつて露國のバルカン進出は英國の世界政策上大妨礙となるを考へ外

相ソールスベリーと共に強硬な態度に出で同會議には自ら列席し露國の要求を減せしめバルカン半島に於ける權力の平衡を保持し得て外交上の大勝利を齎らしめた。此が爲めに華族に列せられベコンスフィールド伯となつた。又彼は文學的趣味をも有してゐた人で著書等もあつた。後職を一八八〇年辭し翌年歿した。

○チチヤン (Tiziano) (一四七七年—一五七六年) (十一回本試)

文藝復興期の伊太利に出でたる名高い畫家である。好んで人物畫を描き、現に獨逸ドレスデンの博物館にある「耶穌基督の圖」は世界に名高い。彼は其生涯が非常に幸福で、王侯貴族から深い尊敬を受け、常に華やかな空氣の中に其日を送つてゐた。その豊饒な生活やまた風光明媚な水の都ヴェニスに居住してゐた關係から、其繪は色彩が非常に絢爛で筆觸が流暢で、題材は多く現世の歡樂を謳歌したもので自己の戀人や王侯の肖像、快活なギリシヤ神話等であつた。其傑作は「清濁二種の愛」「贈金」「ヴィナスとアドニス」「花神」「キリストの責苦」其他婦人の肖像畫である。ヴェニス派の代表者として色彩畫家として古今獨歩の稱がある。

チドロー (Didrot) (二十八回本試)

第十八世紀の前半、革新文學發達當時の佛國の劇詩家にして又多方面の學者であつた彼は百科全書の編纂を志し自ら總裁となり數學、哲學に長じた同志ダランベール(D'Alembert)と語らひ知名の學者をして各専門の部分に分擔執筆せしめ一七五一年から七二年迄に二十八冊の大著述を完成せしめた。

該書は全ヨーロッパに革命の新思想を流布したものであつて無神論、舊制度の排斥、財産私有の否定等過激に

になり世人はこの派を「百科全書派」と稱してゐる。

デュケーン (Dugene) (卅二回豫備)

ルイ十四世の治世には幾多の卓越せる相將出で以つて佛國王政の燦然たる時代を現出せしめた。

財政のコルベール (Colbert) 外交のリオンヌ (Lionne) 軍政のルーボア (Loubois) チュレンヌ (Turenne) 等枚舉に遑無き位であつた。

就中デュケーンは海軍を代表す可き人物であつて初めスウェーデンの軍隊にあつたが後佛國に入りて榮進し海軍司令官大將となり一六七六年イスパニヤ及びオランダとの戦に勳功を立てし人である。

瑞典王チャルス十二世 (Charles) (一六九七年—一七一八年) (第一回)

チャルス十二世は僅か十五歳にして王位に登る。王は敏捷活潑にして資性英邁。此の時ロシア皇帝ペートル大帝は波蘭・丁抹と同盟し、バルト海沿岸の瑞典領を分割せんとした。チャールス十二世は大舉して丁抹に侵入し、和を請はしめ、次にロシアに侵入してナルヴァの戦に大勝を得、更に波蘭に侵入して之を占領した。其の後再びロシアに侵入せしがポルタヴァの戦に大敗して土耳其に逃れ、後本國に還へる。其の後諸威と交戦中彈丸に中りて戦死した。

チャルス八世 (Charles) (一四七〇年—一四九八年) (三十一回豫備)

フランス王ルイ十一世の子、幼年の時に貴族の反亂ありしも、ブルターニウ公の女アンナを娶りて以て其の領

土を併せ王權を確立し、後伊太利と戦端を啓くや、一四九四年兵を率ゐてナポリを侵略せしこともある。

チャルストン (Charleston) (廿七回豫備)

所在、北アメリカ合衆國南カロリナ州の一市

史實

(1) 合衆國獨立戦役の一七七六年六月末チャルストン市の沖合に於て英國艦隊は、米艦の爲に撃破された。又一七八〇年の三月には英軍は同市に包圍され遂に降伏した。

(2) 政治、經濟、奴隸の問題から南北戦争(一八六一—一八六五年)を起したが其時南カロリナ州のチャルストン市は南軍のポールガードによつて防禦されてゐたが戦亂の一焦點となり海陸から攻撃を受けたが遂に陥落を見なかつた。かくて史上有名となる。

デュプレクス (Duplex) (一六九七年—一七六三年) (七回)

佛蘭西の商人、後、印度植民地知事となりて敏腕を振ひ莫太利繼承戦争起るや印度總督としてモンゴル帝國の衰微に乗じて巧に諸侯を操縦して佛國の勢力を擴張し遂に英領マドラスを占領し印度に於ける佛國の國威を大いに發揚した。——後本國に召還された。

デュゲクレン (Duguesclin) (一三三〇年—一三八〇年) (二十八回本試)

佛蘭西の將軍。一三六四年ノルマンディーの總督となり、一三六九年佛蘭西陸軍總司令官となり、百年戰爭に従事して大功を立てる。

○チユランヌ (Turenne) (一六一一年—一六七五年) (八回)

佛蘭西の元帥、三十年戰爭に名聲をあげ一六四五年バワリア兵を破り、其後諸所に轉戦して名聲四方に馳せる。

○チユルゴ (Turgot) (一七二七年—一七八一年) (五回・七回)

佛蘭西の政治家、一七七四年佛蘭西王ルイ十六世に拔擢せられ財政整理の大任に當り、交通を便にし、租税を均一にし政費節約、冗員淘汰其他著々効果を奏せしも貴族の反抗を受けて約二ヶ月、業半途にして退けらる。

○チヨサー (Chancer) (一三四〇年—一四〇〇年) (八回本試)

英國の文豪、詩人、英語の父 (Father of English) と稱せらる。文藝復興時代 (Renaissance) に於ける文學の代表者である。最初は佛國文學の翻譯をなし、伊太利のダンテ等の詩篇を読み深く感動し *Troilus and Creseyde* 及 *House of Fame* の二大詩篇を出した。晩年英國純文學の發揮に努め、生涯の大傑作 *カンタベリー物語* (Canterbury Tales) を出して英文學の標準語となる。

○チルジツト (Thisit) (十六回豫備)

所在 東普魯西の東北部ニイメン河の西岸にある都市。

史實 此の地に於て佛帝ナポレオン一世は一八〇七年普、露兩國と平和條約を締結した。普佛は七月九日、佛・露は七月七日に調印した。其の條約の重なる事項は、露國は佛國の建設せるワルソー公國、ウエストフアリア王國、ライン同盟を承認し、普國は佛國に一億四千萬フランの軍費を賠償し、ライン、エルベ河兩間の地を割譲し、ワルソー公國建設の爲めに波蘭より略取せる諸地の還附を命ぜられ、大陸封鎖令を遵奉する事を約した。

○ツイリウス (Dulius) (十回本試)

ローマの執政官 (Consul) 紀元前二六〇年シシリ島海岸ミレー (Mylae) 岬の近海にて羅馬の海軍を指揮してカルタゴの艦隊を撃破し、羅馬人をして「カルタゴの海軍恐るゝに足らず」の念を抱かせローマ史上特筆すべき大勝を得た。

○ツオルンドルフ (Zorndorf) (四十回豫備)

所在 ドイツ、オーデル河の中流に在る。(地圖は次の頁にあり)

史實

七年戰爭(一七五六年—一六三年)に普魯西王フレデリック大王は常に機先を制して各地に奇勝を博した。一七五八年の八月には露將フェルモル (Fermor) の率ゐるケーニヒスベルヒ (Konigsberg) を越えて來た軍隊とツオルンドルフに會してこれを撃破した。此の戦役に大王も大なる犠牲を拂つた。

其後大王の軍も戦闘力、漸次に減退し遂にホツホキルヒ (Hochkirch) クネルスドルフ (Kunersdorf) の敗戦となつたからは毒を仰いで自殺せんと迄したが幸にも局面一變して平和を見、益々國威を發揚する事を得た。

テクセル (Texel) (三十回豫備)

所在 和蘭ゾイデル海口に點列せる、フリシヤン諸島 (Frisian) 中の最大島にして、最も西南端に在る。テクセル海峡によつて本陸と分る、長さ六里巾二里に過ぎず。

史實 一六五三年英國海軍の提督ブレイクは、此處にて和蘭の提督トロムプ (Tromp) 及びデ・ロイテルの率ひし艦隊を破り、一六七三年には英國提督ルベルト (Rupert) は再び茲に於てデ・ロイテルと戦つた。一七九七年には英國提督ダンカン (Duncan) は此の海口を封鎖し、更に一七九九年佛蘭西に與せる和蘭軍艦十二隻の商船を率ひて來りしが、此處にて英國海將ミツチェル (Mitchel) に投降した。

デケレア (Deklea) (二十七回豫備)

所在 ギリシヤのアツチカに在る。

史實



文化を中心にギリシヤを統一せんとするアテネの爲に保守的なスパルタは其妨害者であつた。尙ほ文化、民族、

政治、經濟に於ても著しく相違してゐた。二國は遂に紀元前四三一年より紀元前四〇四年迄三回に亘つてのペロポネソス戦役を起した。

紀元前四一三年第二回の戦役中スパルタ人がアテネ人の都市デケレアを包圍占領し時々其附近を掠奪する等の事があつた。

テゲトフ (Tegethoff) (九回)

一八六六年七月普墺戦争の際、彼は墺太利艦隊を指揮してリツサ島 (Lissa) 附近で伊太利のピサノの率ゐたる伊太利艦隊を撃破したるを以つて有名である。

テミストクレス (Themistocles) (十五回豫備)

アテネの政治家で且つ將軍である。波斯戦役の起るや彼は波斯を防がんには『須らく海軍を擴張し、軍港、要砦を築きアテネをして海上王たらしめんとする必要あり』と主張し、彼の政敵アリスチデスを市外に追放し、アテネの政權を握り己れの主張を實行した。

かくて波斯王タクセルセスは第三回希臘遠征の軍師を出し、潮の如き勢を以て南下し、サラミス灣に集合せる希臘の艦隊を、サラミス灣口の風浪荒き水道に誘ひ出し巨大な敵艦の操從不自由なるに乗じテミストクレスは自ら輕舟を率ひて敵艦の間を縦横に駆け廻り、大いに之れを撃破し偉功を立てた。其後國民の人望を失ひ、去りて波斯に入り、アルタクセルセスの寵遇を受けベルシヤにて歿した。

デルファイ (Delphoi) (十回本試)

所在 希臘フォキス州の西南に在る。

史實 此の地にアポロン神殿あり。此神託は希臘人の最も重んずる所にして、宣戰・媾和・都府建設等の一國の大事は、此神託によつて處決した。又此地のアムフィクシオニク會 (Amphictionic) は著名なるものにして希臘十二族の使節此の地に相會し、神殿の保護及び希臘諸邦相互間に殘忍暴戾なる所爲をなさざる事を盟つた。此會は希臘諸邦協同一致の精神を起す上に與つて力があつた。

デ・ロイテル (De Ruyter) (一六〇七年—一六七五年) (十一回本試、二十一回豫備)

和蘭の名提督、紀元一六五二年和蘭、英吉利兩國間に葛藤を生ずるや、水軍を率ゐて英國の精銳なる艦隊を嚆まし又瑞典、丁抹の開戦に際しては、丁抹王を援けて瑞典軍を撃破した。次で蘭、英兩國間再び開戦するに及び、彼は和蘭艦隊の司令長官となりて戦略の妙を盡し、テムス河口を砲撃して、敵艦數隻を焼き、ロンドンを封鎖し、ポーツマス (Portsmouth)、ハリッチ (Harwich) を脅威し、遂に英國をしてブレダ (Breda) の和約を締結せしめた。一六七二年には、佛蘭西王ルイ十四世が西班牙領ネーデルラントの併合を阻止せられたるを銜み英國及び瑞典と同盟して大舉和蘭を攻むるや、其海軍を督して善く英佛の聯合艦隊に對抗し、以て敵軍の上陸を妨害し、後和蘭が西班牙と同盟して佛蘭西と戦ふに當り又軍に従ひ一六七五年シシリ沖の海戦に重傷を蒙りて倒れた。

トスカネリ (Toscanelli) (卅回豫備)

トスカネリは第十五世紀後半の文藝復興時代の末期に輩出したる伊太利の天文學者であつて星學や地理の研究を以つて有名である。彼は又地球の球形説を唱道し「印度に達するには西方に直航する方がアフリカを周航するよりも遙に近し」と言つて時人を驚歎せしめ、コロンブスをしてアメリカ發見をなさしめた。

④ トーマス・モア (Thomas More) (卅二回本試)

中古の西欧歴史は基督教會を中心として起つたものであつて何も其束縛を脱する事が出来なかつた文化方面にあつては勿論其影響を受けてゐたが第十五世紀に入つて宗教を離れて人間性の神髓を悟らうとする人道學派 (Humanism) が起り此等の學者は宗教改革の急先鋒となつた。

モアはイングランドに出た有名な人道派の學者であつて新説を唱へ經典の研究より寺院の改良を企てオクスフォード大學を中心として大いに活躍したが時のヘンリー八世王は「信仰の保護者」(Defender of the Faith) の稱號をローマ法王より得てゐた位だから此新説を排斥し反駁書を出した位であつた。

然るに王妃カザリンの離婚問題から法王と衝突し一五三四年には首長令 (Act of Supremacy) を發して宗教に於いても主權者であると宣言して以來教育制度も改新され人道派の人々の活動も認められた。モアの著書に有名な「ユトピア」(Utopia) がある。

トリエント (Trient) (廿八回豫備)

所在 伊太利北部に在る一市

史實

ローマ人、ゴルド人及びフランク人の屢々都であつた所で一〇二七年からトリエント僧正の支配に歸した。爾後舊教の中心都市となり宗教改革の時代には時々宗教會議が開催された。

皇帝チャールス五世は新教徒との戦の一面に佛國と北伊で争つたので外敵に當る爲に新教徒と融和せんとして先づ一五四五年第一回の宗教會議を此市で開いたが新教徒は列席を拒んだので不調に終つた。其後暫々企てられてゐたが何れも中絶の形であつたが一五六二年から三年迄法王ピウス四世に依つて第三回目のトリエント會議が開かれた。此會議は反動的なエスイタ教派が中樞になつて行なつたが宗教改革も又決議中に認めてある。其主なるものに教會法規の改善、僧職の監督を嚴重にする事、免罪符の販賣中止等がある。これは恰も敵の武器を奪つて己れを守るに當るものでカトリック教會 (Catholic Church) の基礎となり新教弘通に一大打撃を與へる事となつた。

トランスメヌス (Transimennus) (二十六回豫備)

所在 中部伊太利にある。

史實 第二回ポエニ戰役の際、ハンニバル北部伊太利に入り、進んでトランスメヌス湖畔にて(紀元前一二七年)羅馬軍を殲殺した所として名高い。

トリボニアヌス (Tribonianus) (十六回本試)

羅馬の法律家として著はる。彼は東ローマ皇帝ユスチニヤヌスの宰相となり、帝の命を奉じ十六名の法律家と共に従來ローマに行はれし法律、命令類を蒐集して『ローマ民法全典』(Corpus Juris Civilis)を編纂した。此の法典は全典、法典、法學通論、新法典の四種より成り、今日に至るまで歐洲諸國民法の骨子となつた。

ドラック (Drake) (廿二回豫備)

英國の有名な水師提督、一五七七年數隻の船を率ゐて南アメリカに至りマゼラン海峡通過後太平洋を横切り阿弗利加の南端喜望峯を経て世界一周を行なつて歸る。

一五八八年にはイスパニヤの無敵艦隊 (Invincible Armada) をハワード (Howard) と共にドーバー海峡に粉碎し千載不朽に名聲を輝かした。

アルマダとの戦は英國民が國難に際して國民自由の爲に舉國一致して遂にドレークをして大勝を得しめたものである。アングロ・サクソン民族の永く誇とするに足る可く、此が又英國海上權の擴張の起源となり遂に今日の如き大英海軍國を建設せしむるに至つたのである。實に彼はエリザベス朝に於けるネルソンである。

ドン・ファン・ド・ストリア (Don Juan Dausiera) (廿九回本試)

イスパニヤのフィリップ二世は自國勢力の擴大、新教の撲滅、自由民權の破滅の三政策を奉じ舊教の代表者として克く活躍した。

東方の雄、オスマン・トルコは侵略の欲望が盛でチュニス人をして海賊的行爲を取らせ徐々に蠶食したので地中海上の商業は攪亂されトルコの伊太利侵入等も憂られる様になつてからは基督教國一般の存亡に關する問題となつて來たので遂に法王ピウス五世は一五七一年ベネチヤ共和國イスパニヤ國等を談らひ遂に神聖同盟を結んで一大打撃を與へんとした。



フィリッパ帝の異母弟ドン・フアン・ドーストリアは三百隻の同盟艦隊の司令官となりオスマン・トルコのピアリー・パッシャー(Piri Pasha)の艦隊を一五六七年の十月レパント(Lepanto)に撃つた。此役土國海軍は船の操縦が巧で聯合軍は苦境に陥たが土軍の幹部中に死傷者多く加ふるに聯合側には宗教的、人種的の敵愾心が旺盛であつた爲め勝利を得た。

此海戦の影響は可成り大であつた。當然の結果としてトルコ海軍は不振となり、同國衰微の一原因となり逆にイスパニヤ國は地中海の制海權を得て世界海上の最優者となりて一五八八年迄盛大を來たした。

此英傑もレパントの海戦後、王の嫉妬を受け遂に憤懣、憂愁の極早く此世を去つた。

ナポレオン三世 (Napoleon III) (一回)

本名はルイ・ナポレオン (Louis Napoleon) 大奈翁の甥に當る。伯父の偉業を慕ひて、佛蘭王たらんとして失

敗し海外に亡命してゐた。一八四〇年再舉を圖りて亦成らず英吉利に走つたが後本國に歸り一八四八年國會議員となり大統領に選舉せらる。常に帝位を希望し文武の要職を兼任し自黨の人材を任用し偶々議會の不評に乗じて非常處分ク・デター (Coup d'Etat) を行ひ(一八五一年十二月)議會を解散して大統領の任期を十ヶ年に延長し國民投票の結果帝位に登りナポレオン三世と稱した。茲に佛國第二帝政成る(一八五二年)

(1) 即位の初、「國威の發揚」を志し、且つ己れの地位を保護せんが爲に一八五四年—五六年のクリミア戦争に關係し、戦勝の結果大いに佛國の威信を高めこれ實に『小奈翁』の最も得意の舞臺であつた。

(2) 伊太利統一を援助して名聲を揚げた。

(3) 墨西哥の叛亂(一八六一年—一八六七年)に干渉して失敗し、國威を失墜せしめた。

(4) 佛國民が普魯西の強大を嫉むに至るや、民意を得んがため西班牙繼承問題より普魯西と開戦し(一八七〇年)連戦連敗セダン要塞にて獨軍の包圍を受けて遂に捕虜となる、此時佛國はナポレオン三世を廢位して、共和政治に改めた——翌年英京ロンドンに通れて其身を終る。

ナバリノ Navarino (九回、十六回本試女子の部)

所在。希臘のモレア半島の西南海岸に在る一小灣である。

史實。近世の希臘獨立戦争の時、希臘を擁護せん爲に組織された露・佛・英の聯合艦隊が一八二七年此灣にて土耳其・埃及の艦隊と激戦して土耳其海軍を殆ど殲滅させた——此戰の爲に「希臘の獨立」は時日の問題となつた。

やがて一八二九年のアドリヤノール和約となつて独立は確認される。

ナルバ Narva (三十一回豫備)

所在 露のレニングラード (Leningard) の西方芬蘭に臨む一小港でナルバ河に沿ふてゐる。

史實 北方戦争 (The Northern War) の初年一七〇〇年十一月卅日瑞典のチャールス十二世 (Charles XII) が精兵八千猛虎の勢でペートル大帝の四萬に餘る大軍と此地に會戦してペートルをして惨憺たる敗北をなさしめた。——曠古の大英雄ペートルは決してこの試験に屈せなかつた。再會の日の爲の準備に勵んだ。「北方の狂人」チャールスは波蘭からサクソニアへ向つてペートルに良い準備期を與へたのであつた。

ナント Nantes (二十二回本試)

所在 佛蘭西のローアル河下流に臨む都會である。

史實 佛蘭西の新舊兩教派の争の結果ブルボン王家 (Bourbon) のヘンリー四世此地にて「信仰の自由を許し新舊兩教徒は同權なる事」を承認宣言した。所謂「ナントの勅令」(Edict of Nantes) と稱せらる——後一六八五年ルイ十四世之を取消し舊教主義に復活した。

ナンシー Nancy (廿四回・廿七回・卅二回豫備)

所在 佛蘭西東部、メッツの南方の一小都會である。

史實 一四七七年一月五日ブルグンド勇膽公チャールス (Charles the Bold) が瑞西の十三州聯邦と此地に戦ひ

て大敗した所である。此の戦の結果

(1) チャールスは瑞西人を降す事を得ば都を此地に負め中央集權を行はんとせしが豫期に反して敗死しブルグンド國は佛國王の領有となつた。

(2) 一方戦勝した瑞西同盟軍は武名益々揚り、東方ハプスブルグ家を破り西方ブルグンドを敗北させて、此戦後事實上獨立を完成したのである。

ニコメディア Nicomedia (三十三回豫備)

所在 小亞細亞の西北隅にある都市でニケーア市 (Nicaea) の西南方に當る。

史實 羅馬帝國の内亂を鎮定して紀元二八四年ディオクレチヤヌス帝 (Diocletianus) 位に即く。版圖廣大にして一人の能く統治すべからざるを察し大英斷で帝國を東西の二部に分ち自ら此地に居て全國の統治權を總攬したのである。

ニエール Niel (三十五回豫備)

佛蘭西のナポレオン三世の信任を受けた將軍である。一八五四年—一八五六年のクリミア戦役にナポレオンは工學を以て有名なニエールをしてセバストポール要塞攻撃に努めしめた。彼は攻撃すべき地點を選定して、坑道を作り地窖を穿ちて攻撃したる事が大いに奏功してやがて陥落となつた。

一八五九年サルジニアと(佛と協同して) 奥太利と戦ふやマクマオン・カンロベールと出陣して殊勳を樹てた。

ナポレオン三世普魯西との國交緊張するや彼を陸相に任じた彼は全力を傾注して戦備に着手したが戦端始まる前に病歿して佛國の武運に多大な影響を及ぼした。

ニーブル Niebuhr (廿六回本試)

十九世紀に於ける獨逸の歴史學の泰斗である。ニーブルは始め法學に志し長じて普國政府の官吏となり羅馬駐屯附の公使を拜命し公務の餘暇に古代史の研鑽に努力し考古學、言語學等を學び後年史家となつて令名を馳せた。彼は當時の史家が抽象的な理論に走り修史事業を輕視する傾向あるを歎じ古書古典を探索し史料の確否を批判し炯々たる史眼を以つて中正不偏なる史實を述べ史界に科學的研究法を採り入れ一新面目を開いた大家である。彼の傑作「ローマ史」は此の見解でなりしものであつて其記事の周密、正確且つ清新な論證とは幾多のローマ史を凌駕し史界に貢獻する所頗る大であつた。

ネーズビー Nasby (八回)

所在 英蘭のノーザンプトン州 (Northampton) に在つてロンドンから西北方に當る。

史實 英蘭革命爆發して紀元一六四五年六月英王チャールス一世が議會黨の首領クロンウエルと戦ひて大敗せるは此地である。國王チャールスは捕虜となり王黨軍の敗北、議會軍は決定的勝利となつた史的意義深き戦である。クロンウエルの組織せる獨立黨 (Independents) の爲に「暴君」「國賊」の名義で一六四九年國王は哀れ斷頭臺上の露と消へた。

ネー Ney (卅三回本試)

佛蘭西の將軍にして且貴族で一七六九年(不思議にもナポレオンと同年生れ)プロシヤのライン州ザールルイの桶匠の子に生れ、一七八八年佛蘭西の陸軍に入り、大革命の際は屢々各地に轉戦して勇猛の譽高く、殊に一八〇五年奈翁の埃太利征伐の途次獨逸に侵入して、戦功を樹て、公爵となり、一八一二年露西亞征討より退却の時、殿軍を指揮して、敗軍を擁護し乍ら氷雪に慣れたコザック (Cossacks) の追撃を避けつゝ奈翁をして、速く巴里へ返さしめた。實に彼は勇中の勇 (The bravest of the brave) と稱せらるゝ所以である。——ナポレオンは敗北してネーとも訣別しネーは王政復古の後ルイ十八世に仕へたが一八一五年三月一日ナポレオンはエルバ島 (Elba) からカンヌ (Cannes) に上陸し巴里を指して進軍した。國王ルイはネーをして之を撃退せしめんとしたが奈翁に對するや今昔の感に堪へず、猛將潸然と涙を流して、抱擁し合ひ、無人の野を驅るが如く巴里に入つた。六月十六日所謂ワテローの役に於て、ネーは英軍をカトルブラー (Quatre Bras) に襲撃して退却せしめたるが最後には奈翁の決定的敗戦となつて彼は捕へられ同年國事犯人として銃殺された。

ネストリウス Nestorius (十八回、廿五回豫備)

西紀四二八年君府の首長となつた人で「基督は神人兩性を具備するとの説」ネストリアニズム (Nestrianism) を唱道したが四三一年エフェソス (Ephesus) の宗教會議で異端者として擯斥され、更に黜職された。西方アジアへ謫せらるるや波斯王の尊信を得て、後支那(唐)に傳へられネストリウス派は景教と稱せられた。

ネルビンデン (Neerwinden) (二十七回本試)

所在 白耳義の東部リエージュ (Liege) に近き一村落である。

一七九三年一月廿一日ルイ十六世を断頭臺上の露と消へしめ佛蘭西は愈々革命の狂態を演出すや普・英・奥・西・蘭は第一回大同盟 (The first Coalition) を組織して佛蘭西軍と同年三月此地で破つた。佛蘭西の將軍デュエムリエー (Dumouriez) はジャコブン黨 (Jacobins) が軍隊を迷はし、軍需品の供給を怠り無能なものを自分の同僚としたのが最大の敗因だと主張して國民公會の召還に應ぜず奥地利軍に投降した。——此戦後、佛蘭西の革命主義者は愈々排外的となつて来る。

ノワラ Novara (八回)

所在 北伊太利のロンバルディア平野 (Lombardy) に在つてミラノ市 (Milan) の西方に當つてサルジニア王國の首府であつた。

史實 伊太利にては二月革命の影響を受けて自由統一の運動益々熾烈となりサルジニア王チャールス・アルベルト (Charles Albert) は此の好機會に乗じて北伊太利を統一し奥地利に宣戦した。然るに奥將ラデツキー (Radetzky) の爲に一八四九年三月廿三日此地に破られて獨立運動は失敗に歸し、王は長子ヴィクトル・エマヌエール (Victor Emmanuel) に讓位し奥國の鐵鎖の許に依然伊太利は分裂の舊態に復した。

○バイロン (Byron) (十七回本試女子の部) (一七八八年—一八二四年)

英吉利の詩人で、全歐の文壇の巨星にして近世文學史に著しき感化を與へたる大家である。彼は素行修まらず、大に家庭の失望を失ひしのみならず、財政の煩累に苦しみしが、熱情の士にして曠然故國を去り、始め希臘、土耳其、伊太利等を旅行し、一八二三年希臘獨立戦争の起るや、私財を抛ち自ら劍を携へて其軍に投ぜしが病を得てミンロンギ (Missolonghi) に歿す、不羈放逸の性質と特殊の天才とを有し、尙古派 (Classicism) と理想派 (Romanticism) との特徴を一身に集め『チャイルド・ Harold』(Child Harold) 『ドンファン』『アビスドの花嫁』『マンフレッド』等の傑作を出す。

パスキエビチ (Paskievitch) (三十四回本試)

南露ポルトヴァ (Poltava) 生れの將軍で其事績は左の如し。

- A、ナポレオン戦争中露西亞侵入を撃退して奏功する。
- B、希臘獨立戦争の希臘軍を扶けて土耳其人を破る。
- C、七月革命の爲に影響を受けた波蘭が大紛亂を起すや叛徒を嚴重に鎮壓した。
- D、タリミヤ戦争に参加しシストリアにて傷く。

バゼーヌ (Bassano) (一八一一年—一八八八年) (二十九回豫備)

佛蘭西の將軍にして、タリミヤ戦争に功あり、一八六三年墨西哥遠征の際佛軍の總督となり、一八七〇年普佛戦争起るに及び、佛蘭西本軍の將として十五萬の兵を率ゐて、普魯西に侵入せしが忽ち撃退せられて同年八月十

日より十八日に互り数回の激戦に敗北し、バゼーヌはメッツ (Metz) に圍まれしが救援軍到着せず終に敵に降る。戦後死刑に處せられんとせしが辛うじてマドリッドに遁れ書を著して自己の行動正しきを述べしも佛國政府は之が發賣を禁止した。

バーゼル (Basel) (二十三回本試・二十九回本試・三十回豫備)

所在 瑞西の都會、ライン河の獨逸領に入らんとする沿岸。

史實

A、一四三一年宗教改革派の會合を催した事

教會内部の積弊を除去せん爲、獨逸皇帝シギスモンド (Sigismund) が此地に催し「法王の權力を滅殺して各國教會の勢力を増さん」と欲した。然るに法王の非常なる反抗に會ひて空しく解散となつた。

B、バーゼルの講和

一七九五年佛國革命政府は普國と和し「ライン左岸の地」を占領し同年西班牙も佛國と和睦し「奥地利ネーデルランド (白耳義地方)」を讓られ佛國に敵せしは英奧兩國となり佛蘭西の威勢大いに振ふ。

パバイヤ (Pavia) (三十五回豫備)

所在 伊太利ポー河中流北岸に在る。

史實 野心家のフランシス一世 (佛王) は強大となれるチャルス五世 (獨逸皇帝) を抑へる目的で獨逸内の新教

徒と氣脈を通じて挑戦した。一五二五年ロンバルジヤ平野のパバイヤに戦つてフランシス一世は擒となりて敗れ遂に翌年 (一五二六年) 「マドリッド條約」締結されてフランシス一世は國へ歸る。

一五二一年以來二十四年に及べる獨佛抗争の第一戦はかくの如くチャルス五世 (獨逸) の勝利に歸した。

パーマストン (Palmerston) (一七八四年—一八六五年) (二十回豫備)

英國の名高き政治家、彼はグレー (Grey) ホイグ黨内閣の外相となりて選舉區改正法案 (Reform Bill) の通過を扶け、ついでラッセル内閣 (Russell) の外相となり外交上の功績甚だ多く後首相となつて自由貿易政策をとる。彼の外交政策は頗る強硬な態度であつた。其の業績は、

A、東方問題 (Eastern Question) に關しても埃及を抑壓しアデン (Aden) を占領し東洋 (印度) への交通を安全にした事。

B、阿片戦争 (Opium War) 一八四二年終るや南京條約で香港を割取して東洋發展の根據地をつくる。

C、クリミア戦争 (Crimian War) に参加して露國の南下をふせぐ。

以上の如く外交上の敏腕を振ふて名聲を博した。

ハムデン (Hamden) (一五九四年—一六四三年) (三十六回本試)

著名なる英國の民主的政治家にして愛國者、聖雄クロンウエルの従兄弟、性質沈着剛毅、英王チャルス一世は英蘭人の公民的自由と宗教的自由を減さうとするが彼は王の命ぜる船税を拒む王はハムデンを捕へて投獄せんと

せしに茲に革命的な内亂起る。

バヨンヌ (Bayonne) (二十五回本試)

所在||佛蘭西の西南隅ピレネー山麓(西班牙國境の近傍)

史實||一八〇八年佛帝ナポレオン一世が西班牙王フェルチナンド七世と條約を締結して退位せしめた。

ハリス (Halys) (三十回豫備)

小アジアのポントスの西部を北流して黒海に注ぐ河。

アッシリア滅亡後、興起せるメジヤ (Media) とリジヤ (Lydia) との境界となる。

バルセロナ (Barcelona) (三十二回本試)

所在||西班牙の東部地中海に面する西班牙第二の大都會。

史實||紀元前三三三年ハンニバルの父ハミルカル・バルカス (Hannibal Barkas) によつて建てられた。一八〇八年—一八一四年半までナポレオンに占領せらる。

バルボア (Balboa) (一四七五年—一五一七年) (二十九回・四十一豫備)

西班牙カスチリアの貴族で探検家、ダリエン (Darien) 地方に植民地を開き、一五一三年始めて太平洋 (Pacific Ocean) を発見した。

パルミラ (Palmyra) (四〇回本試)

所在||小アジアのダマスカス (Damascus) の東北方百五十哩の地 (シリアの地)

史實||其初めアラビヤ沙漠の沼地に建てられソロモン王 (Solomon) が商業地として計畫せるものと云ふ。

ゼノビア女王 (Zenobia) 時代に最も繁榮し自立した爲二七二年羅馬人に掠奪せられ、女王も擒となる。

アウレリアヌス帝 (Aurelianus) の時に此市はローマに破壊されて荒廢に歸した。

古來パリイに結ばれたる平和條約の年代及當事國 (三十四回本試)

パリイ和約の中世界史上有意義なる條約を摘記すれば、

1、七年戰役後の巴里條約 (一七六三年)

參加國 (英・佛・西・葡)

英吉利は佛蘭西よりカナダ及び西班牙よりフロリダ半島の地方を割取した事。

2、佛蘭西大革命中の條約 (一七九一年)

佛蘭西サルヂニア間に締結。

佛蘭西はサボヤ地を取る。

3、大陸封鎖 (Continental System) に関して (一八一〇年)

當事國 (佛國・瑞典)

瑞典を大陸對鎖に加入せし、其代償としてポメラニア (Pomerania) リウゲン島 (Rügen) を與へる。

4、ナポレオン一世歿落後の條約 (一八一五年)

歐洲同盟間にナポレオンを英吉利の監督の許に置く。

5、クリミア戦後の和約 (一八五六年)

當事國 (英・露・佛・土・サルチニア)

露國南下の大野望を失ふ。

6、佛兵羅馬退去の件 (一八六四年)

當事國 (佛・伊)

佛兵は羅馬市より撤退すること。

7、世界大戦後の和約 (一九一九年)

協商側 英・佛・米・伊・日

主なる當事國 同盟側 獨・埃

◇3・4・6は平和條約でないが史上に名高いから記入したまでである。

ヴァレンヌ (Varennes)

所在 佛蘭西東北部の一市。

史實 佛蘭西大革命勃發當時一七九一年六月二十一日ルイ十六世及び家族同伴王宮を逃れ、翌日此地に捕へられ巴里へ護送せらる。これよりルイ十六世は國民の信用を全く失ふ。

ハウード (Charles Howard) (十回)

一五八八年西班牙の無敵艦隊 (Invincible Armada) を撃破し祖國を安泰に導いた英國の水師提督である。

ハンス・ザックス (Hans Sachs) (十六世紀の人) (二十五回豫備)

南獨逸の靴の職工より起つた樂人、一五五八年ニュルンベルヒの宗教儀式禮拜堂奏樂室の樂人中最も卓越した樂人で且つ詩人であつた。聖書の詩篇俚言を作詩し或は喜悲劇を作る。

ハンムラビ王 (Hammurabi) (紀元前約二二五〇年頃) (二十六回本試)

バビロニアの英主にして鋭意國力の發展を企圖し、先づ東方のエラム (Elam) 族を討伐し、漸次隣國を征服して遂にバビロニアの全土を統御するに至る。舊バビロニア王國は實に王の經營に成れるものにして、其の制定したる法典は世界最古のものとして知られる。

○バンヤン (Banyan) (三十回本試、十四回豫備)

英國のアン女王時代に出でたる著名なる文學者。クロンウエルの革命當時一六四五年議會軍に投じ、又王政復古後、過激なる集會の指導者として流罪に處せられたが執行されず十二ヶ年間牢獄で送る其在獄中不朽の名著

(Prigrin's Progress)即ち「天路歷程」は世人の賞讃を受け、文名大いに擧る。後牧師として一生を終る。

ピウス七世 (Pius VII) (三十五回豫備)

羅馬法王 (一八〇〇年—一八二三年) 佛蘭西と結びナポレオンに帝冠を載かせたが後其法王領も奪はれる。ナポレオン没落後又領地を恢復した。

ピウス九世 (Pius IX) (廿八回豫備)

羅馬法王。一八四六年即位し、當時自由統一主義流行したれば在位中法王の権力下に伊太利諸邦の同盟をはからんとして羅馬市を自治制として國事犯人の大赦を行ひ、法王領の憲法を制定したるが人民の反抗に會つて失敗し一八四八年ガエタ (Gaeta) に逃れ佛蘭西の援助によつて之を恢復した。

一八七〇年普佛戦争起り佛蘭西兵羅馬を退くや伊太利王ヴィクトル・エマヌエル (Victor Emmanuel) 兵を率ひてローマに入る。法王はヴァチカン宮殿 (Vatican) 内に退き、宗教界に其餘威を保つのみとなつた。

ヒエロ (Hieron) (三十三回本試)

ヒエロには次の二王がある。

1、ヒエロ一世 (Hieron 1)

シラクサ王。紀元前四七四年年カンネー附近にてエトルリア (Etruria) の艦隊を撃破して其海軍力を殺ぐ。王

は文學を好み文學者を寵遇する。ピンダルシモニデスの如きも其最も寵愛せられた一人である。

2、ヒエロ二世 (Hieron II) シラクサ王

能く其國を治め、ローマ・カルタゴ對抗時代に羅馬に加擔して其親交を保つこと約五十年に及ぶ。彼の助力が羅馬をして覇權を握り易からしめた。

ピシストラッス (Pisistratus) (紀元前五三七年—紀元前五二七年) (二十八回豫備)

アテネの名士。ソロン (七賢人の一人) の親友、彼はアテネの内紛に乗じて平民黨首領となり貴族黨を壓倒し遂に政權を奪ひアテネの主權を握る。世に之を僭主 (僭主 Tyrant) と云ふ。こゝにソロンの富人政治は仆れ、僭主政治となる。彼はソロンの遺法を遵奉し、文藝を奨励し、商工業を盛んにして種々なる善政を施す。其治績大いに擧る。

ピタゴラス (Pythagoras) (紀元前五四〇年—紀元前五〇〇年) (十一回豫備)

希臘の哲學者にして數學者「宇宙は數理關係より形成される」と稱しピタゴラス派を始め、著書は無いが其説は門弟によつて傳へらる。幾何の「ピタゴラスの定理」は周知の事である。

ピドオ (Pydonas) (三十六回本試)

所在 マケドニアのサロニカ灣 (Salonike) 西岸の古市。

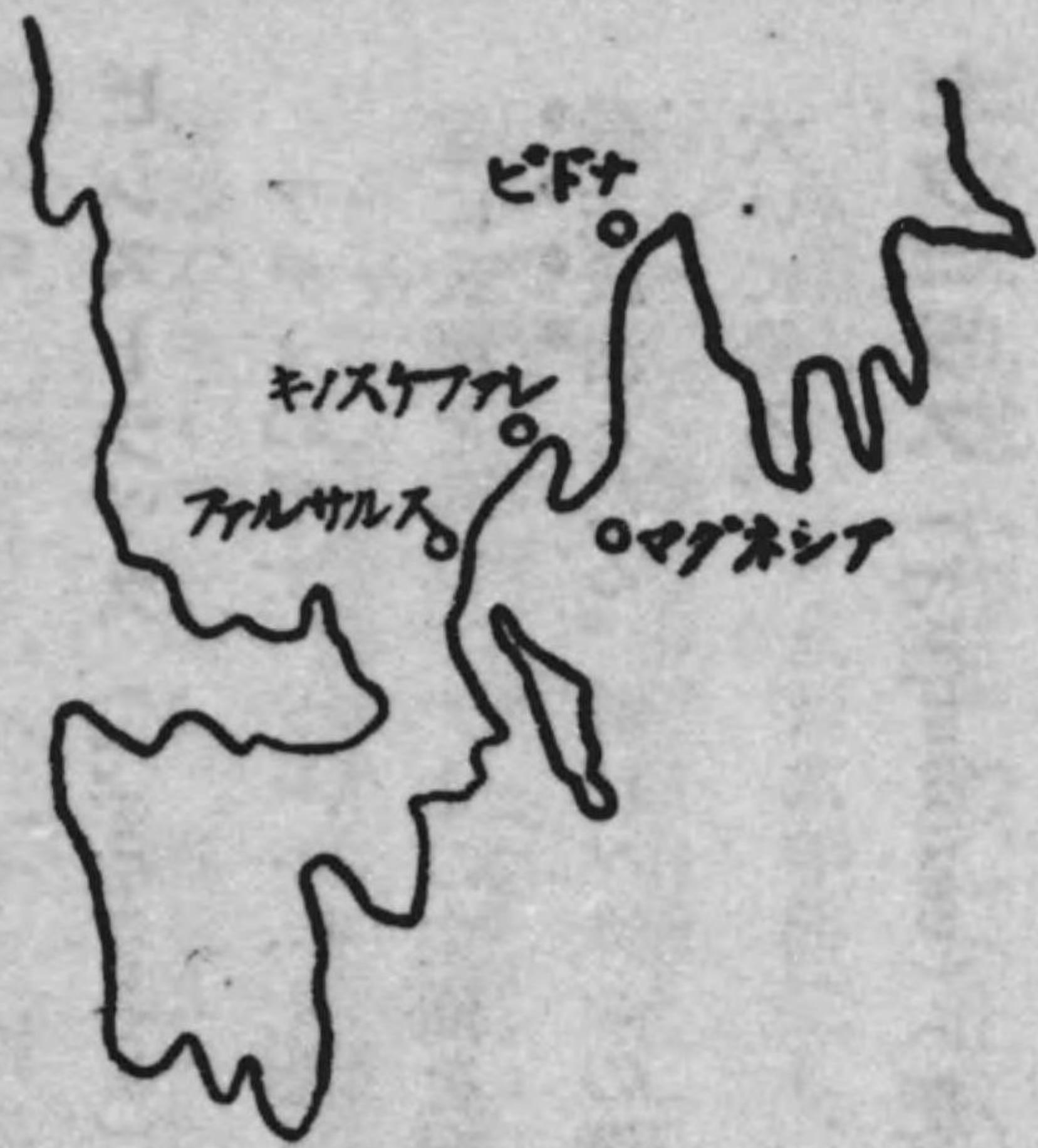
史實

マケドニア王フィリップの庶子ペルセウス (Perseus) がローマ黨の義兄デメトリオス (Demetrius) を殺害した事から第三回マケドニア戦役を起す事になった。

此役、始めローマ軍は利を失ったが紀元前一六八年ルキウス・エミリウス・パウルス (Lucius Aemilius Paullus) が代つてローマ軍の將となるや策戦宜しきを得マケドニアのペルセウスの軍をピドナに敗つた。此時マケドニア軍の死者二萬に及び捕虜の數も一萬以上に達した。

從來羅馬は各地を征服しても屬國とせず年賦金を納めしめ自治を許してゐたが此役後マケドニア帝國は四共和國に分割され何れも服屬國となつた。

史家ポリビウス (Polybius) は此年を以つてローマ帝國の世界統治權の確立し政策變更の機會なりと定めたのも又意義のある事である。



ヒメネス (Himenes) (一四三六年—一五二七年) (二十八回本試)

ヒメネスは西班牙の大僧正にして又政治家。カスチリヤに生れフランシス派の僧にして學徳高くトレドの大僧正となり管區の莫大なる收入を擧げて、慈善事業に費した。女王イサベラの授戒僧なりしが、其の死後フェルチナンドに仕へ、其の王嗣フィリップを補佐した。一五六〇年フィリップ死するや、カスチリヤの攝政となり國勢

を執りしが、一五〇九年アフリカのオラン (Oran) を征せんとし、私費を投じて兵一萬四千馬四千を整へ、暴風雨に乗じて自ら赴き遂に之を奪取した。一五一六年フェルチナンド歿するや其の遺言によりチャールス一世 (獨逸皇帝チャールス五世) の攝政となりしが翌年チャールスの爲め職を剝奪せられ間もなく歿した。

ヒメラ (Himera) (四十一回豫備)

所在 シシリー島の北岸に在る。

史實

カルタゴはアフリカの北方に位し本國のフェニキアと反對に隆盛に赴き地中海西部の覇權を掌握してゐた。

シシリアは當時ギリシヤの植民地であつたが本國に波斯戦争があつて多端なるに乗じてカルタゴは豊饒なる此地を奪はんとシラクサを攻めた。シラクサの僭主ゲロンは紀元前四八〇年の九月サラミス海戦と同日カルタゴ軍をヒメラに敗り大勝を博した。

ヒメラ海戦の價値はサラミスの海戦と同様に大なるものであつてこれよりギリシヤの勢力は地中海西方に振ふ事になった。

ピルス (Pyrrhos) (西紀前三一八年—西紀前二七二年) (三十七回本試)

希臘のエピルス王ピルスはアレクサンドル大王の親戚に當り大王の大業再現を理想としてゐた。マケドニアを平定して次いで西方諸國を征討せんとて紀元前二八〇年伊太利に侵入し、用兵の巧妙と戦象の利用で敵軍ローマ

人を破る。シシリ島に渡りカルタゴ軍と對峙せしが其海戦に敗れ後陸軍もローマ軍と戦ひベネヴェント(Beneventum)に撃破され遂に本國に歸還し、其後引續きスパルタ軍に破られて了つた。

ビルヌーブ (Villeneuve) (一七六三年—一八〇六年) (二十二回本試)

佛蘭西の海軍提督である。英將ネルソンの艦隊を牽制せんため西インドに向ひしも其目的を達成せず、カチス港(Cadix)に逃げ込み一八〇五年十月二十一日ネルソンとトラファルガル(Trafalgar)の沖に會戦して大敗した。これが爲めナポレオンの英國侵入の大策は失敗に終る。

フアシヨダ (Fashoda) (三十四回豫備)

所在||埃及スダンの白ナイル河(White Nile)畔の小都會。

史實||佛蘭西は第十九世紀末に亞弗利加サハラ一帯の地方及びコンゴ地方を占領し、進んで紅海岸のチブチ(佛領)と連絡せんと一八九六年マルシャン大尉(Marciand)をしてフアシヨダを占領せしめた。然るに英吉利はキツチネル(Kitchner)をして埃及スダンを經營せしめる。此市にてキツチネルとマルシャンとの紛争生じ(一八九八年)兩國の平和將に破裂せんとするが如き形勢となつた。然るに佛國政府は遂に讓歩した。要するに英國の大陸縱貫政策と佛國の大陸横斷政策とが衝突し佛蘭西の敗北となつたのである。

ファビウス (Fabius) (二十七回本試)

羅馬共和時代(紀元前三世紀)の有名な將軍。五度執政官に選ばれ紀元前二二一年獨裁官(Dictator)に選立さ

れ名將ハンニバルと戦ひ「決戦せず追ひ來れば逃げ敵が逃げれば追ひ——敵をして兵器・糧食に窮せしめん」との持久戦を執る。ハンニバルも此策には手の出し様なく誠に以て困窮した。然るにローマの國人は彼を「躊躇家」"Cunctator"と綽名を付けて罵る。

野戦を避けて敵の跡を遂ふ曠日彌久の策はローマの國民に理解されない。然しハンニバルには確に大敵であつた。

ファルサルス (Pharslus) (十三回)

所在||ギリシヤの北部、テッサリヤの中部。

史實||紀元前四八年ケーザルがポンペイウスを此地に破つた。第一回三頭政治より此戦に至つてケーザルの政治的地位向上し彼の專制始まる。

フィヂアス (Phidias) (紀元前四八八年—紀元前四三〇年) (九回)

アテネの有名な彫刻家(ペリクレスの文化黄金時代)絶世の名工、パルテノン寺院中の神像、及びオリンピアに聘せられて彫刻したゼウスの立像(黄金と象牙にて)等に其優秀なる伎倆を窺ひ得る。

フイニヤチ (Hunyady) (四十一回本試)

匈牙利の攝政にして且つ將軍である。

一四五六年土耳其の勢益々盛なる時、彼は土耳其人を撃退し、匈牙利の危急を救つた。

其子マチヤス・コルヴィヌス (Matthias Corvinus) は國民の感謝を以て王位に選立された。

○フイテ (Fichte) (十五回本試)

獨逸の大哲學者(カントの高弟)ライプチヒ大學にて神學と哲學を攻究シカント (Kant) の哲學を學び其偉大な哲學思想に驚歎し熱心に師事し、遂に「一切の默示の批判を嘗試す」の論文を師カントに呈して痛く其歎賞を得、これより一躍して大家に伍し一七九四年イエナ大學の教授となる「知識論」學者の本分を論ず」を出して世界の視聽をひく。一八一〇年ベルリンに高等學校を創設した。當時ナポレオンの佛蘭西軍獨逸を蹂躪した時なれば「獨逸國民に告ぐ」の名演説にて國民の敵愾心を鼓舞激勵した。

フィリッピ (Philippi) (十二回、三十八回豫備)

所在||希臘マケドニアの一市。

史實||紀元前四二年、オクタヴィヤヌス及びアントニウスが此地にケーザルを殺したブルクス及びカシウスの軍を破つて彼等を敗北自殺せしめた。

フィルモア (Fillmore) (十一回)

北米合衆國第十三代の大統領(一八五〇年—五三年)我國へペルリを派遣し我が開國を迫つた。

フォンテヌブロー (Fontainebleau) (十四回豫備)

所在||佛蘭西首府パリの南方、セーヌ河の西、佛蘭西諸王の宮城地。

史實||一八一四年佛帝ナポレオン大帝は此地に退位の條約を對佛大同盟の諸國と結んだ。

フォン・ボイスト (Bent) (四十回本試)

フォン・ボイストはサクソニヤの首相として敏腕の名聞ゆ。丁抹戦役に際し、一八六四年五月獨逸聯邦の代表となつて倫敦會議に列し、シウレスウイヒ・ホルスタイン問題に起原せる丁抹戦役善後處置を討議した。

一八六六年普墺戦役起るや、王を助け、普魯西と戦ひて失敗せしが、後轉じて墺地利に入つて首相となり、當時兩立せる匈牙利の政治家フランシス・デアクと協商し互讓契約によつて依然兩國と結合を約した。獨佛戦役後一八七二年ボイスト・ピスマルクの會見あり、次第に獨墺兩國の接近を見しが、ボイストは元來親獨者にあらざりしを以つて臆てアンドラツシー代りて首相となる。かくて三帝協商なり、獨墺二國の防禦同盟成立し兩國は俄に其の親密加ふるに至つた。

ブカレスト (Bukarest) (三十二回本試、三十三回豫備)

所在||ルーマニアの首府。

A、第二バルカン戦役の媾和地(一九一三年)

第二バルカン戦争でブルガリアは五國の敵を受けて連戦連敗の悲境に陥り、遂に屈伏してブルガリアの新領土が減少された。

B、世界大戦末期の媾和(ルーマニア對獨墺側)

獨逸軍に壓迫されたるルーマニアは露國のプレストリトブスク媾和後遂に屈服して所謂『ブカレスト和約』を成立した(一九一八年五月七日)。

- 1、一九一三年のブカレスト條約で得た地方をブルガリア國に還附すること。
- 2、ドブルチャ地方を同盟四國側に割讓すること。
- 3、ルーマニアの西部を奥國に割くこと。

此條約は一九一九年のヴェルサイユ和議で取消された。

フツゲル (Fuggel) (二十五回本試)

フツゲル家はアウグスブルグの富豪にして、マキシミリアン一世時代より特に優遇せられたがヤコブ・フツゲルは西班牙、亞米利加に於ける商利を獲得せんとし、チャールス一世に莫大な金力を寄與し競争者ある皇帝選舉に勝利を得させ、ハプスブルグ家強大の基礎を致した。

チャールス一世のち皇帝となり、チャールス五世と稱する、フツゲルの功勞を思ひ、一五三〇年同家を伯爵に列して優待し金銀貨鑄造の權を許した。フツゲル家は其の後學問の擁護、慈善事業等、社會事業に盡す所が多い。

プシエミスル (Psemysl) (四十回豫備)

所在||ガリシヤ地方。ヴィスツラ河の一支流に沿ふ城市。

史實||世界大戰役中東部戦線の一堅城。一九一四年九月頃露軍は世人の豫想を裏切つて敏速に行動しガリシヤ

に殺到し忽ち其大部分を占領しレンベルヒ・ヤロスラウの兩要塞を陥れ進撃又進撃。カルパチャ方面に出でプシエミスルの要塞又露軍の強襲に堪へずして陥らんとする。——かくの如き露軍の大成功は、奥軍の銳鋒を挫き、西部獨軍の進出を大に牽制した。然るにプシエミスルの奥將よく守り、同盟軍の攻勢に轉移と共に圍を解きて去る。一九一五年三月一度露軍はプシエミスルを陥れ占領せしも維持困難にして獨軍に再び奪還せられた。然し爾後獨軍の形勢も日に非となつた。

フラテエー (Plataeo) (二十回豫備)

所在||ギリシヤのボエオチャ州にある首府。

史實||ペルシヤ戦争の時、ペルシヤの海軍はサラミス海戦 (Salamis) に敗績して王クセルクセスは倉皇東歸せしが其將マルドニウス (Mardonius) 陸兵三十萬を以て此所に留り、希臘征服の舉を完くせんとする。紀元前四七九年、希臘諸邦の兵を合せ、スパルタの將パウサニ阿斯 (Pausanias) を總督とし進んでペルシヤ軍を攻撃せしも名將マルドニウスよく戦ひギリシヤ軍敗滅せんとせしもマルドニウスの戦歿により波斯軍戦はずして潰走し勝利は却つて希臘同盟軍の手に歸した。

フランシス (Francis Baint) (三十六回豫備)

フランシス派の開祖、伊太利のアツシシに生る。羅馬教會の極盛期なる第十三世紀に出で、高德一世を風靡し所謂フランシス僧團を率ゐて伊太利各地を托鉢し、貧賤老病を救つた。一二一〇年法王もフランシス派を公式に認

めた。ドミニック派と共に無智の人民を教化し、法王権伸張に最も有力なる援助を與へた。

ブラマンテ (Bramante) (三十八回豫備)

第十五世の中葉伊太利に生る。復活式 (Renaissance Style) 建築の大家、かの有名なるセント・ペトロ寺 (St. Peter) は彼の設計に成る。不幸にしてその完成を見ずして歿した。

プリニウス (Plinius the Elder) (三十三年—七九年) (十一回本試)

ローマ唯一の科擧者と知らる。老プリニウスは最も多方面の學者で歴史、修辭學、文法に關する著述もあつたが盡く滅びて、今は博物學 (Historia Naturalis) と稱する三十七卷の百科辭書的の書を存するのみである。此の書は彼の博學と勤勉との結晶で後世多く利用せられたけれども、隨分誤謬も尠からぬので注意を要するのみならず、其長所は博搜に存して獨創の見るべきものはない。然し彼が七九年のベスビオ (Vesuvio) の大噴火に際し、一身を探檢の犠牲に供したので其の名を不朽ならしめた。

フルトン (Robert Fulton) (一七六五年—一八一五年) (十七回本試)

北米合衆國の人にして蒸氣船の發明者、ロンドン或はパリにも在任し機械師として渡世してゐた。一八〇三年初めて蒸氣船を建造してセーヌ河に浮べ、世人を驚かし、ついで米國にかへりハドソン河 (Hudson) に蒸氣船を浮べ百五十哩を三十二時間で航海した。彼の發明は蒸氣力によつて世界の交通を迅速且つ正確にならしめ世界を縮少したるが如き今日の情態に赴かしめた。

バルバロッサ (Friedrich Barbarossa) (一一一二年—一一九〇年) (十七回豫備)

ドイツ皇帝バルバロッサ (朱髯) の異名を有す。ポーランド・ホンガリア・デンマーク等にも其主權を及ぼし、羅馬法王アレキサンデル三世及びロンバルディアの諸市と争ひ、一一八三年コンスタンツの和議によつて同盟諸國の獨立を承認した。第三十字軍に参加して一一八八年出發し一一九〇年小アジアの南セレフ河 (Seluk) に溺死した。

ブレストリトフスク (Brest Litovsk) (四十三回)

所在 現在波蘭の中央に近く首府ワルソー (Warsaw) の東方に當る一都會である。

(1) 世界大戦役中の史實。露國は大戦亂の初頭獨逸方面へ猛進し奥國ガリチヤ (Galicia) に侵入し、他の一軍東普魯西へ侵入した爲獨逸帝ウイリヤム二世はヒンデンブルグ (Hindenburg) に露軍撃退の令を發した。ヒンデンブルグ將軍はタンネンベルヒ (Tannenberg) に露軍を粉碎し獨軍の士氣大いに振ひ、遂にワルソーをも陥れ (一九一五年八月四日) 露領波蘭を占領したのである。此時ブレストリトフスク要塞も同年八月二十五日陥落して了つた。是より永く同要塞は奪回出来なかつた。

(2) ブレストリトフスク條約 (The treaty of Brest-Litovsk) 一九一七年三月労働者及び兵士の一團より成れる過激派遂に革命を起し、其首領レーニン (Lenin) トロツキー (Trotsky) 等は政權を掌握して、勞農政府 (Workers and Peasants' Government) を樹立して、私有財産の禁止、土地の國有等の極端な共產主義を實行

せんとし、過激派政府は聯合國との協約を破つて、獨逸と媾和せんとし十二月單獨媾和の談判を此地に開き翌一九一八年三月成立した。

a、波蘭・クールランドは獨逸へ

リボニア、エストニアは獨逸の保護下に

b、芬蘭・ウクライナは獨立さすこと

c、莫大な償金を支拂ふこと。

要するに露西亞は全人口の1/3を、又全鐵道の1/3を喪失し、鐵礦の3/4を、石炭は90%を、更に豊饒な平野と近代的工業の諸都市を奪はれ獨逸の勢力は東方に著しく伸張した。此條約の結果

獨逸は東方戦場の憂患を除き意氣大いに擧り、西部戦線に殺到し前後五回の猛襲を加へ、聯合軍の心膽を寒からしめ聯合國は獨逸の勝利を恐れる様になる。——然し聯合側は結束を更に固め獨逸屈服を誓ふ。

一方過激派政府は割地償金に屈せず又意にも介せず資本主義帝國主義的政府の覆滅を企て過激思想の宣傳に努めこれに感染したのは獨逸で軍紀紊亂し社會主義共產主義が勢を得る様になる。——此時、頼みにしたヒンデンブルグ線は突破され革命勃發して遂に休戦條約(一九一八年十一月十一日)となつた。其休戦條約中にも翌年のヴェルサイユ條約中にも『プレストリトプスク條約を破棄する事』を獨逸は承認したのである。

ブレブナ (Plevna) (二十回、十七回豫備)

所在||ドナウ河南岸に在る(ブルガリア國)

史實||露土戦役の際一八七七年兩國が決戦せし地、土耳其の名將オスマン・パシヤ(Osman Pasha)死守して「戦あるのみ」と決心し寡兵にて防備不完全なる城砦によつて三萬有餘の敵兵を殲殺し殆ど五ヶ月の長きに亘つて强悍なる露軍をくひ止めた。然るにセバストポール戦役の驍將トートレーベン(Toitleben)來り持久長圍の策をたつるや糧食盡きて城砦遂に陥落し土國和を請ふ。

ブレンハイム (Blenheim) (三十五回豫備)

所在||獨逸バウリア(Bavaria)の西方ドナウ河の北。

史實||西班牙繼承戦争の時一七〇四年英の名將マルボロー公(Marlborough)此地に於て佛軍及び聯合軍を破る。

フロンド (Fronde) (三十回本試)

第十七世紀の中頃佛蘭西の宰相マザレンは王權の擴張に盡力した。此時コンデ公(Prince of Conde)を中心とする勢力ある貴族達はルイ十四世王の幼少なるに乗じマザレンの政策に反對しフロンドの大亂(一六四八年—一六五三年)を捲き起した。要するに、諸侯の子孫が死者狂となつて其祖先の有せし特權を恢復せんとした最後の躍動と見るべきである。マザレン兼ねて事變あるを豫期せしためよく鎮定し益々中央集權の實を鞏固にした。

プロンビエール (Pombios) (四十回本試)

所在 佛蘭西東南方ボスジユ州の温泉町。

史實 一八五八年七月二十日サルジニアの賢相カブール (Cavour) は佛帝ナポレオン三世と此地に密會し『佛蘭西・サルジニア兩國攻守同盟條約』の大綱を協定した。——此密約によつてサルジニアは一八五九年奥國に叛旗を翻すや佛國を之を援く。

ヘースチングス (Hastings) (一七三二年—一八一八年) (十二回豫備)

印度初代の總督である。十七歳にして印度に到り十四ヶ年間商業及び政治に従事し一七七二年ベンガル會議長となり次で印度總督に任ぜられ極端なる侵略主義を採用した。一七八五年辭職して歸國した。然るに巨萬の富は國人の嫌疑を受けて國會にて彈劾せられしがのち晴天白日の身となり遂に放釋せらる。

ヘースチングス (Hastings) (二十三回本試)

所在 英國の東南海岸にある市邑 (セントラックの地)

史實 一〇六六年ノルマンディー公ウイリヤム英蘭に侵入しハロルド伯を此地に破り、英國全土を征服し遂に英國王位に登る。此の戦を「セントラックの戦」とも云ふ (四十三回出題)

ベッサラビア (Bessarabia) (四十回本試)

所在 黒海に近い、ドニエステル河 (Dniester) とブルート河及びドナウ河 (Danubein) との間にある地域。

史實

- (1) 紀元一世紀ローマ皇帝トライヤヌス (Trajanus) は此地方を征服して州となした。
- (2) 一三六七年モルダヴィア公 (Moldavia) の領域に加へられた。
- (3) 一四七四年にオスマン土耳其に征服された。
- (4) 一七七〇年更に露西亞に奪はれ一八一二年其領有を確認した。
- (5) 一八五六年 (クリミア戰の結果) ルーマニヤ領となる。
- (6) 一八七二年 (伯林會議の結果) ルーマニヤはドブルチャ (Dobrujia) を得、豊饒なベッサラビアの地を露西亞に還附した。

(7) 一九一八年十二月末、ベッサラビア國民議會は無條件で羅馬尼と合同する事を決議し羅馬尼は兵力を以て此地方を占領し全く同國領となる (勞農露國政府はルーマニヤにベッサラビアの還附要求したこともあつた)

ペトラルカ (Petrarca) (一三〇四年—一三七四年) (八回、四〇回本試)

文藝復興時代伊太利の愛國的大詩人。彼の父は詩聖ダンテと共にフロレンスを追放せられた人である。彼は初め法律を學び、後叙事詩を作り人道學派の精神を述べ、又ギリシヤ・ローマ時代の古書を蒐集し、古代研究に努めた。——彼が人道學派の先驅者 (Humanist) として又鼓吹者として實に偉大なる功績を遺した。

ペートル大帝 (Peter the Great) (一六七二年—一七二五年) (一回)

露西亞の皇帝（モスコイ生れ）性質剛直果斷、即位後兵制を改革し、自ら職工となり和蘭に赴き學術の研究をなし英佛獨諸國を巡遊し、其文明の状態を視察し、歸國後大いに弊政の改革を斷行した。又、瑞典王の幼少なるに乘じ「瑞典の分割」を策して北方戰役を起し、一七〇三年首府をペテルブルグ（St. Petersburg）に奠め、一七〇九年三月瑞典王をポルタバ（Poltava）に破り王を土耳其に走らせた。一七一一年春土耳其を討つて敗北した。
ヘリゴランド（Heligoland）（三十七回豫備）

所在 獨逸のエルベ河口より西北方に當る北海の一小岩島。著しく海波等の爲に縮少されつゝある。

史實 もと丁抹領なるが、一八〇七年英國となり爾來英領たりしが獨逸之を得んとせしも久しく得ざりしに一八九〇年獨逸のアフリカ植民地と交換して獨領となり、キール運河保全の爲有用なる島となり軍事上大いに利用せられた。世界大戰中特に獨逸海軍の根據地となり北海の制海權を握る英國海軍に反抗を續け此附近で一大海戰があつた。——大戰後、軍事施政は全く撤去された。

ベリサリヌス（Berisarius）（二十三回豫備）

ユスチニヤヌス大帝（東羅馬帝國中興の英主）配下の將軍。

A、ベルシヤの入寇を防ぐ。

B、五三三年亞弗利加に渡つてヴァンダル王國（Vandal）を滅亡させる。

C、五四〇年東ゴート王國を滅して伊太利を略取した。

彼は以上の如く軍功多かりしも不幸讒言の爲、悲慘の中に其晩年を終る。

ペルガモン（Pergamum）（三十八回本試）

所在 小亞細亞の西端に位する古都（エーゲ海を隔てトトラキア・マケドニアに對する）

史實 紀元前三世紀の頃希臘の植民地人の創建、初めマゲドニアに屬せしが後獨立し、紀元前一九〇年シリヤ王安テオコス（Antiochus）の兵と羅馬軍とマグネシヤ（Magnesia）に戰ふやペルガモン王はロードス人と共に羅馬軍に加擔してシリヤ軍を破り、羅馬はシリヤより得たる小亞細亞の地をペルガモン及びロードスに分與した。

——爾後ペルガモンの文化も著しく發達し、後、國王アタルス（Attalus）三世歿して遺言して全領土を羅馬に獻じた（一三三^a）——羅馬は此地を收めて亞細亞縣（Asia Province）となした。

ベルサイユ（Versailles）（十八回豫備）

所在 佛國パリ西南方に在る小都會（ルイ十四世の造營にかゝる壯麗な宮殿の所在地）

史實

A、一七八三年北米合衆國獨立承認の和約成立の地であること

B、一八七一年獨逸戰後の假條約の結ばれたこと

C、同 獨逸皇帝ウイルヘルム一世の即位式が擧げられたこと

D、一九一九年世界大戰後の講和條約の調印の地

ベルナツド (Bernadotte) (一七六四年—一八四四年) (二十五回本試)

ナポレオン大帝の部將。伊太利征伐(一七九七年)に勳功をたて、一八〇五年ナポレオンをウルム(Ulm)アウステルリッツ(Austerlitz)の大勝を得るを扶けた。其後、瑞典王チャルス十三世嗣子なく彼は皇太子となる。——後大陸封鎖令(Continental System)を守らず、ナポレオンの怒にふれ、却つてナポレオンの露西亞遠征に敗るゝや獨立戦役の驍將として瑞典軍を率ゐてライプチヒ附近に轉戦して大勝を獲た。一八一八年ベルナツド瑞典王チャルス十四世(Charles) (一八一八年—一八四四年)と稱した(彼の前半生はナポレオンに忠誠をつくり、後半生は反抗を續けた)。

ヘレス (Heres de la Frontera) (三十六回豫備)

所在—西班牙の西南方、カチス港の北東四〇哩位の所。

史實—七一一年サラセン人の將軍タリク(Tarik)此地に於て西ゴート王ロデリコ(Roderic)と戦ひ大に西ゴート軍を敗績させロデリコ王戦歿して、西ゴート國は滅亡した。茲に於て西班牙半島はサラセン人の占領する所となる。

ヘロドス (Herodotus) (十回豫備)

希臘最古の歴史家にして「歴史の父」(Father of History)と稱せられ、小亞細亞のハリカルナッス(Halicarnassus)に生れ(紀元前四八〇年B.C.頃)小亞細亞・埃及・シリヤ・バビロニア等に旅行し幾多の見聞によりて

研究し其著「ベルシヤ戦争史」は特に名高い。

從來歴史の記述に韻文を以てせしを彼は快活流暢なる散文を用ひて一新生面を開き、彼の主眼は「ギリシヤの文化」(民族的な政治も含む)とベルシヤの専制制度とが其優劣を争ひたるがベルシヤ戦争だ「歴史の因果を尙、神が指圖するもの」との考より筆を執る。其材料の取捨選擇を等閑に附してゐた事は一大缺點である。

ヘンリー二世 (Henry) 英王 (一一五四年—一一八九年) (二十二回本試)

一一五四年英蘭のノルマン王統絶え佛蘭西のアンジュー伯(Angou)入りて英王となる。これをヘンリー二世と稱する(プランタジネット王朝 Plantagenetの祖)ヘンリー二世の所領は佛國にてさへ次の如く廣大となる。

A、ノルマンディー Normandy (英蘭王傳來の所領)

B、アンジュー Anjou (ヘンリー二世の所領)

C、アクイタニヤ Aquitania (ヘンリー二世の妃の所領)

英王ヘンリー二世の威權絶大となる(次のジョン愚王は失政續出し人望を全く失墜した)

ヘンリー三世 (Henry) (一〇三九年—一〇五六年) (二十三回本試)

神聖羅馬皇帝 (Holy Roman Empire) コンラデ二世の子性剛毅英邁、一〇二六年獨逸王となり一〇三九年皇帝となる(時に二十二歳)パワリヤ・スワビア・フランコニアの諸公を兼ね外は伊太利・ブルゴニーウの王となり波蘭・ボヘミヤ・ハンガリヤを服して版圖の擴大をいたす。諸政督親裁し、僧侶に食邑を與へ諸侯伯の間に介在せ

しめ叛亂を未然に妨ぐ。而して當時ローマにては三法王争ひて紛擾せしため彼はクレメンヌス二世 (Clement) を立て、「以後法王の就職は皇帝の承認を受くべき事」と定めて皇帝の權力を著しく伸張せしめた。(其子ヘンリー四世は法王グレゴリー七世と争つた王である)

ボッシュューエー (Bossuet) (一六二七年—一七〇四年) (三十一回本試)

ボッシュューエーは巴里近郊の監督牧師にして、その説教は雄辯を以て特に著はれ、彼は極端なる王權神授論 (Divine Right of King) 者にして太陽王ルイ十四世に仕へ其の持論たる王權專制を説いた。ルイ十四世の「朕は國家なり」(I am the state) の標語は彼の感化によると稱せらる (ルイ十四世幼時よりの師傅) 佛蘭西王權極盛時代は彼の思想が表現されてゐたと見るべきである。

ポンバル (Pombal) (十五回豫備)

葡萄牙の革新的政治家。歴史・法律に精通し一七五〇年ヨセフ・エマニュエル王に拔擢されて宰相となり次の如く治績大いに擧る。

- A、當時葡萄牙の貿易は英人の手に歸せしを慨き貿易權を自國民の手に納めた。
- B、エスイタ派の徒を海外に放逐し學校を建て教化に志した
- C、軍制を改革し、農業及び實業を奨励した

ポンバルは苛酷專横の行動多く、反對者を悉く監獄に投じた爲國民より排斥された。此の革新善政主義の政治

家を失つた葡萄牙は復び不幸な状態となつた。

ボリバル (Simon Bolivar) (一七八三年—一八三〇年) (三十四回豫備)

ベネズエラの人、南米の政治家として名高い、彼は一八一九年ベネズエラ、新グラナダを合して、コロンビヤ聯邦を建て其の大統領となる。ついでボリビヤ、ペルー等を合して一大共和國を建設せんとして成らず。遂に病死した。世人彼を「南米のワシントン」と稱す。

ポリビウス (Polybius) (紀元前二二〇年—紀元前一二〇年) (二十五回、二十九回、四十三回本試)

希臘の世界的歴史家でアルカディア (Arcadia) の中央メガロポリス (Megalopolis) の出生である。彼の父は羅馬の屬領が本國に敵對して戦つた其時アケーア同盟 (Achaean League) の首領の一人であつた。紀元前一六八年ピドナの戦でマケドニアが征服せられた後、希臘の天日挽回策を謀り、不幸多數の同志と共に羅馬へ送られて遊學しエミリウス・パウルス (Aemilius Paulus) の家庭に引取られ非常な幸運に遭遇した。更に其家の令息は少スキピオ即ち小アフリカヌス (Younger Scipio) で彼とは終生眞摯な友人であつて彼の力でスキピオ一家及び一族縁者をヘレニズム愛好家とした。紀元前一四六年スキピオと共にカルタゴを破滅せしめ——其條約議定の爲に奔走したのが非常な成功を収め彼の名譽を紀念する爲に希臘の數市に肖像が建てられた。

彼は斯る政治的事業に奔走せる間に後年の歴史著作の貴重な史料を蒐集したので——『二二〇—一四六の羅馬史』を書いた。同書は四十冊からなり最初の五冊のみ現存する。最後の編の斷片から次の意味の事が述べら

れてゐる。

羅馬人の掌中に廣大な領土が收められる事は世界の一大勢である。なんとなれば羅馬人は被征服民族よりも巧に政治を裁断したから統治者として最適だつたから。

彼は又『ピドナの戦を以て羅馬の世界統治権の確立期とし、羅馬が對等の文明國を敵とせる最後の戦である。此戦後の戦はギリシャ、ローマ文化圏外に立てる諸民族の叛亂鎮壓に外ならぬ』と喝破して居る。然しポリビウスは決して阿世の徒ではなく事の真相をよく達観した歴史家である事は何人も認めて居る。

ポルタバ (Poltava) (十六回豫備)

所在 露國の西南方に在る小都會。

史實 北方戦争の時、瑞典王チャルス十二世既に露國の同盟國を撃破して更に進んで露西亞を討伐せんと此府を攻圍せしも容易に抜けず困難せるに乗じて露國ベートル大帝は精銳なる軍隊を率ゐて來り瑞典王の軍を破る。瑞典の勢力此舉によりて全滅し瑞典王チャルス十二世は南方土耳其に奔る。

ボロチノ (Borodino) (二十六回本試)

所在 露國の現首府モスコの西モスコ河の上流河畔に在る。

史實 一八一二年佛帝ナポレオン一世は五十萬の大軍で露國に侵入し、此地に於て兩國の軍血戦し死傷算なく露軍遂に敗れモスコ市に退く。

ポントス (Pontus) (二十一回本試)

黒海の東南岸の古國(ハリス河よりアルメニアの境に接し今の土耳其の屬州一部トレビブンド及びシバスの地)ペルシアに屬したるが紀元前四〇〇年には獨立し紀元前六五年にはビシニア (Bithynia) の一部となり、紀元前六三年に帝政羅馬の一州に加へられ、永く屬州となつた。

ポンパイ (Pompeii) (七回)

南伊太利カンパニアの舊市。紀元六三年の大地震に一部破壊せられたるも七九年八月二十四日の夜ベスピオス山 (Vesuvius) 破裂して灰燼全市を埋め、且四隣の地を覆ふ。一七五〇年以來地下に埋没したる部分を發掘し第一世紀時代の光景は發掘の結果實見し得るに至る。

マクマオン (Mactahan) (十八回豫備)

佛蘭西の將軍にして且つ政治家である。アルジェリア (Algeria) 征討及びクリミア戦争 (The Crimean War) に武勳を樹て、ついで普佛戦争の際奈翁三世と共にセダン要塞 (Sedan) に立籠り、猛烈な獨軍の包圍を受け苦戦奮闘せしが一八七〇年九月一日城遂に陥落し八萬餘の將卒と共に敵の捕虜となる。後、普佛戦争の結果帝政を廢止して共和政治となるや彼は第二代の大統領に選舉された(一八〇八年—一八九三年)。

マグデブルグ (Magdeburg) (三十一回本試)

所在 獨逸エルベ河の中流。

史實 三十年戦争の戦場となる。一六三一年ワレンスタイン (Wallenstein) の率ゐたる皇帝軍は此市を七ヶ月包圍し次いでチリー (Tilly) に却掠せらる。一八〇六年ナポレオンに占領せられ翌年ウエストフアリア王國に合併せらる。一八一三年プロシヤに併せられる。

マグネシア (Magnaesia) (九回)

所在 小亞細亞。エフェソス市 (Ephesus) から東方一五哩、メアンデルス河畔にある。

史實 紀元前一九〇年シリヤ王アンチオクス三世 (Antiochus) と羅馬との間に交戦ありて、羅馬の大勝となつた此戦の齎らした結果は

- 1、タウルス山脈 (Taurus) 以西の地を羅馬へ割讓すること。
 - 2、エウポイヤ貨一萬五千タレントを償金として支拂ふこと。
 - 3、軍隊艦船を制限し又開戦の權利をも放棄した。
- かくてシリヤは半屬國として羅馬に服屬の姿となつた。

マザリン (Mazarin) (二回)

ルイ十四世の宰相。元伊太利人で法王の使節として佛蘭西に赴いてリシュリー (Richelieu) の知遇によつて佛國の宰相となりリシュリーの遺業を紹ぎ大いに佛國の威權を發揚させた。——其事業は、

- 1、三十年戦役に干渉し、彼の斡旋によつて一六四八年のウエストフアリア條約を締結せしめ「ライン左岸の新

領土を獲得したこと」

- 2、英のクロンウエルと同盟して西班牙と戦ひて破り、ピレネー條約 (The treaty of Pyrenes) を締結し (一六五九年) てアルトア (Artois) 及びフランドル (Flanders) の一部を得て、西班牙王フィリップ四世の長女マリアテレサ (Maria Theresa) をルイ十四世に嫁せしむる約束を結んだ。

- 3、多年戦役の結果財政膨脹し新税を設けた。爲に不平のもの續出せしが壓制して兎に角中央集權の實を完成し後事を賢オコルベール (Colbert) に託して退いた。——(一六〇二年——一六六一年)
- ルイ十四世の大事業の素地を築いたのは彼の力であつた。

マツチニ (Mazzini) (卅八回豫備)

十九世紀の伊太利愛國的革命家である。(一八〇五年——一八七二年) 伊太利統一の三傑の一人で、カプールは策略を以て、ガリバルジは俠勇を以て、マツチニは文筆の力で統一を完成させた。彼は炭燒黨 (Carbonari) に入り七月革命の際、二月革命の際も暴動を起したが何れも失敗し伊太利から放逐せられ佛蘭西、瑞西、ロンドン等に放浪して其主張を捨てず自由統一の爲に奮闘したのである。サルジニア王エマヌエール二世が奥國と開戦し統一運動を始むるや極力聲援したがヴィラフランカ條約となつて一挫折を來たした。——エマヌエール二世をして伊太利統一の大事業をなさしむるに與かつて力があつた。

マツケンゼン (Makensen) (三十六回豫備)

獨逸の名高い將軍で世界大戦始まるや司令官として出征し、次の如き殊勳を奏した。

(1) 一九一五年露軍が屢々境軍を撃破してガリチヤに侵入し諸要塞を陥るゝや大軍を率ゐて此方面に向ひ、露軍を粉碎して諸要塞を奪還した。

(2) 一九一五年十月獨逸聯合軍を率ゐたマツケンゼンはセルビア攻撃を開始しドナウ河、ザーヴ河の渡渉に成功し一方ブルガリヤの攻撃とでセルビア軍敗績して、黒山國モンテネグロと共に國土を敵の蹂躪に歸した。かゝる短時日にバルカン半島を席捲した敏速な行動は世界の人々を驚倒させた。

(3) 久しく日和見をしたルーマニアは多年垂涎せしトランシルバニア (Transylvania) の地を獲んとして聯合軍に投づるに及んで一九一六年八月ブルガリアと挾撃して其首都ブカレストを陥れ國土の大半を占領し、ルーマニアの穀物と石油は獨逸の利用に委せた。

彼は兵を動かすこと迅速にして恰も疾風の過ぐるが如く敵をして端尻する能はさらしめ以て常に奇勝を得てウイヘルム二世の信望が特に厚かつた。

マリヤ・テレサ (Maria Theresa) (十二回豫備)

オーストリアの皇帝チャルス六世の娘である。一七三六年ロートリンゲン公フランシスと婚し一六四〇年其父死するに及びて女帝として即位する。家憲 (Pragmatic Sanction) の事から遂に奥地利繼承戦役となり干戈を動かす事七年、アーヘンの和議 (The Peace of Aachen) を結んだが暫時にして平和破れ賢相カウニツ (Kaunitz) の

策で露・佛・瑞典・サクソニアと提携してプロシヤを攻撃し前に失つたシレシヤシレジアを恢復せんと計つた。これ有名なる七年戦争である。然しフレデリック大王の健闘で遂に失敗に終る。然れどもポーランド分割に與かつて從來の損失を償つた。(一七一七年—一七八〇年)

マルコポーロ (Marco Polo)

一二五七年生れの伊太利ベネチアの人。十五歳父に伴はれて陸路蒙古に到り元の世祖の厚遇を受け在留十七年余支那の各地を跋渉し世祖の妹が波斯王に嫁するに及びて、之に従ひ印度洋を航し、ホルムズ (Hormuz) に上陸し小亞細亞を過ぎて一二九五年ベネチアに歸着した。當時ベネチアとゼノアとは交戦中にて彼は一艦長として出征して捕虜となつた。獄中に「東方見聞記」を著し、ジバングの富裕を稱揚し大に西歐人の好奇心、遠征心を刺戟せしめた。

マルタ (Malta) (二十三回豫備)

所在、地中海中の一小島にして、シシリー島の南方八十哩の處にあつて「地中海の心臓」と稱せられて居る。史實

(1) 上古フェニキヤ時代にはメリテ (Malite) と稱せられ西方航路の碇泊所として繁昌したのだ。

(2) 宗教騎士團體のヨハニテ武士團が此島を十六世紀の初め獨逸皇帝チャルス五世から委託されてマルタ武士團が創立される。——近世に奈翁の埃及征伐の途次マルタ島奪取したので當時マルタ騎士團長露帝ポールは佛蘭西

に宣戦した。

(3)一八〇二年のアミアンの和約でナポレオンはマルタ島をヨハネ武士團へ還附した。——一八一四年ウィーン會議で英領と決定し西方ジブラルタルと共に地中海の制海權を確保するものとして重大な意義を持つてゐる。——現に英吉利地中海艦隊の根據地として有名である。一八八七年以來自治制を布き其住民は伊太利人とアラビア

人との混血になるマルタ人廿三萬に及んでゐる。

(4)一九一七年二月獨逸は無制限潛航艦戰を開始するや、此島附近最も危險を感じ我驅逐艦の活躍を見るに至つたのである。

ミソロギ (Misologhi) (四十二回豫備)

古代文化の花園たる希臘も十六世紀初頭より土耳其に占領せられ爾來宗教・

人種・文明の異にする土耳其の爲に束縛せられた。十八世紀の自由民權の叫び聲に勵まされ又當時尙古思想盛にして西歐人の間に古代希臘に對する憧憬

と研究を喚起し愛國の志士機を見て獨立の素志を貫徹せんとした。

一八二一年モレヤ半島に叛亂勃發して希臘人は勇敢に抵抗する。古典文化を崇拜する人士争ふて救援し就中英國の熱狂詩人バイロン (Byron) はミソロギ要塞で半月旗に飽くまで抵抗したが包圍せられ惡戰苦闘バイロンも病歿し城陥落するや希臘の各地は慘禍を蒙る。神聖同盟のメツテルニヒは極力希臘獨立に反對したるが英國外相



カンニング (Canning) は佛露兩國を誘つて一八二七年ナバリノ (Navarino) の海戰でトルコの艦隊を破つて希臘獨立の基礎をつくる。

ミケネ (Mykenae) (三十回本試)

希臘文明の淵源の悠遠なる事は十九世紀後半獨逸人ハインリヒ・シウリーマン (Heinrich Schliemann) の小亞細亞のトロヤ (Troy)・トロポネスのミケネ (Mykenae) コリント地峽南方少しの所・チリンス (Tiryns) 等に於ける發掘以來判明した。此遺物中ミケネに出でたるもの最重要なるを以て學者は其製作の時代をミケネ文化時代といふ、其文化の範圍はギリシヤ本國は勿論、エーゲ海沿岸、クレテ島、小亞細亞の沿岸邊まで廣まつた。發掘品は常に一定の様式から成りて其同一文化たるを證してゐる。時代は紀元前十七世紀乃至十三世紀の間と思はれ其文化を創作した民族は希臘人(ヘレネス)の祖先と信ぜられ——又ドリア民族遷移前に發展したものと思惟される。

ミケランジェロ (Michelangelo) (一四七五年—一五六四年) (十六回豫備、二十四回本試)

フロレンス近傍の出生。フロレンス派美術の大成者である。繪畫の妙手たると共に復古式彫刻及び建築に絶妙なる伎倆を發揮しバチカン (Vatican) 宮殿を巧に裝飾し其名聲を高め、傑作ダビテ・モーゼの像の如きは實に希臘名工ファイヂヤスの神品と對比すべきものである。又八年間苦心せし「最後の審判」といふ名畫をも描く。

ミトリダテス六世 (Mithridates) (二十二回本試)

小アジアのポントス王羅馬の共和政治、閥族貧民の兩黨相争ふ隙に乘じ、紀元前八八年羅馬領の小アジアに亂入し在留のローマ人を虐殺し横暴を逞くする。閥族黨のストラ (Strabo) に破られたが紀元前六三年の頃まで絶えず羅馬に反抗したが遂にエウフラタス河附近でポンペイウスに敗られて自盡した。

ミラボー (Mirabeau) (一七四九年—一七九一年) (二十二回豫備)

佛蘭西大革命初期に出たる佛國の大政治家。彼は革命の初期に國民議會を組織し「穩健なる立憲王政を樹立し過激黨を抑へて王室を擁護し」ラファイエットと共に社會の秩序の維持に努めたが遂に目的を達せずして病歿した。彼の死後は過激主義の跋扈を來した。

ミレトス (Miletos) (二十二回、二十八回本試)

所在 小亞細亞のエーゲ海に面するイオニア植民市。

史實 紀元前六二三年—六一二年外敵の攻撃を受けて市民よく防禦した。波斯は小亞細亞を征服せんとしたるが此市の僭主アリストタゴラス (Aristagoras) は紀元前五〇〇年アテネ及びエレクトリア (Eretria) の援助を得てペルシャに叛く。波斯王ダリウスは此地の叛亂を征伐し進んで、希臘本土もせんと欲して波斯戦争が起る。

ムリリオ (Mirillo) (廿七回豫備)

十七世紀に於ける西班牙のセビラ (Sevilla) に生れた畫家で下層社會の情況を摸寫することに妙を得、西班牙衰微時代の美術を飾つたのである。繪畫の題材は宗教上、聖書中の光景を採つたものが多くセント・エリザベ

ス、清淨な聖母等は其の傑作である。

メケナス (Maecenas) (廿八回本試)

紀元前第一世紀羅馬に在つた富豪で且つ教養の高い人である。アウグustus大帝や詩人のヴァーヂル・ホラチウスは彼の親友であつた。彼はアウグustusと共力して當時羅馬の文學、藝術の奨励者で詩人學者の保護者である——羅馬文化の黄金時代出現を助けたのである。 His name has become a Popular synonym for a glorious patron of art and literature.

メヘメット・アリ (Mehemet Ali) (廿回、廿九回本試)

埃及の太守で土國の疲弊に乘じて獨立せんとの野望を抱き、西歐式軍隊を編成し精銳なる軍兵を蓄へて好機會を窺つてゐたが希臘戦争起るや土耳其帝の懇請によつて其子イブラヒムを派遣して希臘に侵入せしめ、到る所希臘軍を撃破し結果キプロス (Cyprus) クリット (Crete) 兩島を與へられしが彼は尙不滿にて、更にシリヤの太守たらん事を要求した。土帝之を拒絶するや、アリは子イブラヒムに精兵三萬を授けてシリヤを侵しアツカを陥れ、土軍を破つて小亞細亞へ進み將に君府に迫る (一八三三年) ——露國の干渉起らんとし英・佛は土耳其に勸めてシリヤ及びアダナ州 (Adana) を與へて講和せしめる。——其後土、埃兩國再戦するや英・露・埃・四國は土耳其を援助せしかばアリ遂に屈し (一八四〇年) シリヤを還附し己れは埃及の世襲權のみを得たのである。

モリエール (Moliere) (十四回本試)

佛蘭西巴里生れの世界的の天才的な喜劇作家である。彼は最初法律を學んでゐたが後戯曲作家となつて、其風俗人情を寫すに妙を得てゐた。其の傑作 *Les Femmes Savantes*、*Le Misanthrope* (厭世家) 等で巧妙に當代の缺點を諷刺して嗤笑の種となした。ルイ十四世時代を飾る大作家であるが其作を通じて當時の社會の缺陷を窺知せらる。(一六二二年—一六七三年)

モルガデン (Morgaden) (十六回豫備)

所在—瑞西にある小山脈である。

史實、一二九一年瑞西のウリ (Uri) シュウイツ (Schwyz) ウンテルワルゼン (Unter Walden) 三州同盟してハプスブルグ家の壓制政治に反抗し長槍隊を組織して一三一五年此地に戦ひて神聖羅馬皇帝の騎士軍を撃破し瑞西國民軍の氣勢大いに揚る。獨立承認への意義深い戦である。

モンロー (Monroe) (十一回、十九回豫備)

第十九世紀の前半亞米利加合衆國第五代の大統領で一八二三年議會の協賛を経て外交の方針を列國に聲明した。所謂モンロー主義 (Monroe Doctrine) は『アメリカの事には歐洲人の干渉を許さず、アメリカも又外國の事に干渉せざる事』を明にした。これ永く北米合衆國の外交政略の根本原則となつた。一八九八年の米西戦争に至つて帝國主義 (Imperialism) に改宗する迄歴代大統領の踏襲する外交政策である。

モンク (Monk) (二十六回、三十一回豫備)

モンクとは英國の名提督アルベマール公爵である。特にクロンウエルの信任を受け一六五二年和蘭と開戦するやブレーク (Blake) エイスク (Ayseue) 等の勇將と共に英國艦隊を指揮しデ・ロイテル (De Ruyter) デ・ウィツトの率ゐたる和蘭艦隊と戦ひて殊勳を樹て、後兩國開戦の際もヨーク公ジェームスの下にありて、和蘭艦隊を撃破した。彼は政界に於てはスコットランド黨の首領として敏腕を振ひ、クロムウエルの死後一六六〇年假議會を組織し、チャールス二世を擁立して英蘭國王となし王政復古の大業を成就したのである。

ヤゲロ (Jagelon) (廿七回本試)

波蘭にては十四世紀の中頃カシミール大王 (Kasimir) の死後アンジュー (Anjou) 家のルイが君臨して、波蘭と一時洪牙利と同君聯合 (Personal Union) を成してゐたが、此王の死後一三八六年其娘のヘドウィヒ (Hedwig) が波蘭と古來反目嫉視せるリトワニア (Lithuania) 大公ヤゲロと結婚して之と合同し俄に波蘭の領土は増大し東歐に雄視する大國となつた。ヤゲロ王家は銳意國力の伸張を企て爾來二百年間 (一三八六年—一五七二年) 波蘭を統治し一四一〇年の如きは獨逸武士國の大軍をタンネンベルヒ (Tannenberg) の戦に粉碎して、大に舊領を奪還したのであつた。同王家の一五二七年斷絶してから選舉王制となり貴族跋扈し上下軋轢して國威全く衰へて了つた。

ヤン・フス (ジョン・フス) (John Huss) (八回)

第十四世紀の末葉ボヘミアから出た宗教改革論者である。フスはプラハ大學を卒業し同校教授となつて、彼

は英國の宗教改革論者ウィクリフの説に痛く共鳴し、(1)教會の腐敗を攻撃し、(2)法王の俗事に干渉するを非難し(3)偶像崇拜を排斥した。時機未だ熟せず獨帝シギスモンド(Sigismund)の首唱によるコンスタンツ(Constantz)の宗教會議の結果、フスは異端者と認められ、遂に焚刑に處せられた(一四一五年)。フスの歿後其信徒は大いに憤激して兵を擧げ屢々獨逸シギスモンドの軍を苦しめ所謂「フスの亂」と稱せらる。——彼は確に宗教改革(Reformation)の先驅者である。

ユスチニアヌス帝 (Justinianus) (十回本試)

東羅馬帝國が分立以來久しく内憂外患に苦しみが同帝即位するや勵精治を圖り内治外征を行つて國勢の伸展を見た。

内治 (1)アリウス派(Arius)とネストリウス派(Nestorianism)とを斥けて宗教上の争論を一定した。(2)トリポリヤヌス(Tribonianus)以下十六人の法學者に命じて羅馬歴代の勅令・法律及び判決例を蒐集類別して羅馬法典を編纂する。(3)支那から養蠶の法を傳へた。(4)壯麗なセント・ソフィヤ(St. Sophia)の教堂を建築した。(5)城壁を築いて國防を嚴にし天下の要害たらしめた。

外征 帝は西羅馬帝國の舊領を恢復して世界統治の理想を再現せん。

(1)名將ベリサリウス(Belisarius)に命じ亞弗利加北岸に居るヴァンダル王國を滅して、伊太利を略取し、東ゴートを苦しめ西ゴートを征して西班牙の南部をも奪つた。

(2)其後將軍ナルセス(Narses)をして東ゴート王國を征して遂に滅亡させた。

- 1. アメロヘン カイゼル(ウニセ)流徙地
- 2. ライデン 大學

東羅馬帝國(East Roman Empire: Greek Empire)の中興の英主として國家は富強に赴いたが賢明な後繼者なく漸次頹勢に赴いた。

ユトレヒト (Utrecht) (十四回豫備)

所在 地圖に在る。

史實

A. ネーデルランド獨立。

ネーデルランド獨立戰爭起るや一五七八年バルマ公は西班牙王フィリップ二世の命を受けて征討の任に當り特權を附與して舊教を奉づる南部十州を歸順させた。新教を奉ずる北部七州は依然抵抗をつづけ一五七八年ユトレヒトに同盟してユトレヒト聯合(Union of Utrecht)と

稱して一五八一年遂に獨立を宣言しウィリヤムを大統領に選立した。ネーデルランド合衆國(United Netherlands)と云ふ。是れ實に和蘭獨立の始めである。



B、ユトレヒト條約（一七一三年）

西班牙繼承戦争の結果として佛蘭西對英・蘭・普・サボヤ・ポルトガルとの講和條約である。

1、列國は將來佛・西の兩國は合同せぬ事を條件としてフィリップを西班牙王フィリップ五世とするを認める。

2、英は下記の地を獲得する

佛蘭西から——New-foundland, Nova Scotia, Hudson Bay,
西班牙から——Gibaltar, Minorca

3、サボヤ公はシシリー島を得てシシリー王國を建設すること。

4、ブランデンブルグ侯はプロシヤの王號を稱することを得。

西・佛が二流國に墮ち、英吉利は世界の海上權を掌握するの素地を作り、重大な史的意義を有する條約である。

ユリウス二世 (Julius II) (二十四本試)

十六世紀最初の羅馬法王（一五〇三年—一五一三年在位）である。

當時獨逸皇帝の威權全く伊太利に及ばず諸侯、都市各自立して割據の勢をなす——ヴェニス共和國・ミラノ公國・フロレンス共和國、ナポリ王國、法王領等分立する、此が佛王ルイ十二世 (Louis XII) 西班牙王フェルジナント五世・Holy Roman Empire の煥太利公マキシミリアン一世等の野心家の標的になつた。各々侵略の方策を圖つた。此時法王ユリウス二世は伊太利の霸權を握り外國の侵略を掃蕩せんとして一時國內戰場と化した。然るに目的は達成せなかつた。しかし彼は伊太利の統一的國粹運動の先驅者である。

彼は美術を愛好しサン・ペトロ寺 (St. Peter) の造營を始め、エプランマンテ、畫伯ミケランジェロ・ラファイエロ等を羅馬に聘して其得意の靈腕を振はせた。(箕作博士の西洋史講話四〇九頁参照)

。ライプニッツ (Leibnitz) (廿六回豫備)

獨逸の哲學者で法律家且つ數學者である。ライプチヒに生れ初め法律を専攻して法學博士の學位を得、巴里、倫敦に遊學し又後に英吉利のニュートンと同時代に微分・積分を發見して有數の數學者としての地位を得た。然し彼の眞に偉大なる所以は十七世紀の唯理哲學の最大巨人としてだ。ライプニッツの哲學は『モナッド單子哲學』と稱へられ宇宙は無限無數のモナッド (Monads) から成立つて居る。而してモナッドは精神的實在で、想念又は思惟が其の本性であるといふ。即ち知識又は理知を本質とする實在に外ならぬ。差千萬別の森羅萬象は盡く特殊な單子で高級完全なモナッドは明瞭確實なことを想念するとし知識の明瞭と不明瞭は、やがて實在の價値優劣の標準に外ならない。理知は宇宙最高の實在である。故に神は一切のモナッドに宇宙的大調和を附與する最高の理知に外ならぬ。現在見る宇宙は「理知で考へ得られる最高の眞善美の世界でこれ以上完全圓滿な世界は考へも出來ない」總々の惡業は諸善業への方便に外ならぬと云ひ同氏は有名な樂天主義者である。樂天主義は確かに唯理思想と密接な關係を持つに至つた。

彼は佛王ルイ十四世に獻言して曰く「世界政策を確立せんと欲すれば先づ埃及を經略すべし」と政治外交に於ても一片眼を有してゐた。(一六四七年—一七一六年)

ラッセル (John Russell) (卅六回豫備)

英國の政治家で、ペドフォード伯の末子で一八一三年國會議員に選ばれホイッグ黨に入った。當時、産業革命の結果寒村が俄に大工業都市となり殷賑な都會は衰微したが、選舉規定は從來の儘で、時勢の進歩に伴はなかつた。偶々佛蘭西に七月革命が起つて英國も其の影響を受けて、ホイッグ黨のグレイ (Grey) 内閣は一八三一年三月一日ラッセルをして國會改革案 (Reform Bill) を下院に提出させた。

- (1) 腐敗選舉區 (Rotten borough) の代議士の數を全廢又は減少し新興都市の選舉區を新設すること。
- (2) 選舉資格を低減して廣く中流の人士に選舉權を與へる事。

一時否決されたるも翌年六月四日上院をも通過して商工業者の權利を増加せしめた。一八三五年ピール内閣 (Peel) を斥け、又後には總理大臣にもなつた。(一七九二年—一八七八年)

ラムセス二世 (Rameses) (十四回豫備)

埃及第一の英主と稱せられ其功績は、外征と建築と運河の開鑿にある。當時エウフラテス河邊にセム種に屬する僥悍なる遊牧民ヒタ (Hittites, Kites) 人居住し屢々埃及に侵入しラムセス王之を征服せんとし頻りに兵を發して、交戦し大いに之を破りしが、永く之と争ふの不利を察して婚を結んで講和を成し其條約文はカルナツク (Karnak) の殿堂に刻まれ今尙存して實に世界最古の外交文書である。爾來王は退嬰策を執り専ら力を内政に用ひ、宏壯な宮殿神殿を造營し、堅牢なる方尖塔を建設し學術研究獎勵の爲に國立圖書館を創立し、又ナイル河と紅海と

の間に運河を通じ商業の發達を圖りしかば國勢大いに振興し史家之を埃及の最強盛時代と稱する。(紀元前一三〇〇年頃の人)

ラ・バンデー (La Vendée) (卅四回本試)

フランスのビスカヤ灣 (Biscay) の地方、ロアール河 (Loire) ガロンヌ河 (Garonne) の間にある地域。大革命の際此の地方の人民は勤王の志厚く一七九一年より諸所に一揆を起し王政廢止、ルイ十六世の處刑及び共和政治に反抗し遂に蜂起して勤王の兵を擧げ屢々共和政府の軍を破る。一七九五年後稍氣勢挫けたるも英吉利の援助ある爲に猶反抗を續け其の全く鎮壓したるは一八〇〇年の頃であつた。

ラ・ロッシュル (La Rochelle) (卅一回本試)

所在 ガロンヌ・ロアール兩河間にあつてロシフォル (Rochefort) の北にある。

史實

(1) 百年戦争中期に當つて英軍の志氣大いに衰へ、之に反して佛軍は海陸に勝利を收め一三七二年佛國と同盟せるカスチラの艦隊は此地の海上に同港上陸兵掩護中の英艦隊を要撃して全滅させた。ギエンヌ地方を奪取されて英軍の意氣全く阻喪する。

(2) 宗教改革の當時、一五六八年ユグノーの徒茲に本陣を置いて反抗し一五七二年バルトロメオ事件が起つて以來一層氣勢を昂めてゐた。——一六二七年リシュリウー之を圍みて平定して了つた。

(3)一八〇九年(奈翁戦争中)英軍は佛國艦隊を此の地に破碎せんことを企てた。

ランゲ (Leopold Von Ranke) (七回)

近世史學の泰斗、一七九五年獨逸のチュリンゲンに生れライプチヒ大學に學び古代と中世の歴史に精通し、一四九四年より一五一六年に至る羅馬・獨逸民族史』を著して名聲大いに擧り、直に拔擢せられて伯林大學教授に任ぜられ爾來殆んど五十年間其職に在り、日夜研鑽を怠らず古文書記録を蒐集し科學的研究法を史學に應用するの基礎を作り、ローマ法王史・宗教改革時代の獨逸史・プロシヤ史を初め近世史界の最大著述と稱せらるゝ世界史の傑作ありて後世史學研究方法に一新機軸を出すに至つた。(一七九五年—一八八六年)

ランニミード (Runimede) (廿二回本試・四十一回豫備)

英蘭のテームス河中の一小島上にある。

英蘭王ジョンは暗愚にして失政多く民意を失つた。その上重税を課し専横を行ひたれば國民は遂に叛旗を翻すに至つた。大僧正ステファン・ラングトン (Langton) は貴族僧侶市民と共に王に迫つて一二一五年此地に大憲章 (Magna Charta) に署名せしめた。これ英國憲法の基礎にして又實に世界に於ける憲法の始となつた。「王權を以て漫りに人民の權利自由を束縛せざる事」を規定した。

リガ (Riga) (廿九回本試)

所在 チユナ河下流に位し現にラトビア共和國の首府のある所。

史實

- (1)往昔ハンザ同盟の市として、殷盛を極めた。後瑞典の治下に立ちてバルト海商業の明星となつてゐた。
- (2)十六世紀中頃から獨逸文化が著しく昂進して其言語とルーテル派の新教はこの地にも普及した。
- (3)一七一〇年北方戦争ポルタバアの戦後露西亞はリヴァンド (Livland) を奪ひ、リガも露領となつた。十九世紀に及んでスラブ統一主義が勃興するや露國は此等の地方にスラブ化政策を實行し露語及び希臘正教を強要した。
- (4)世界大戦中露國は革命の爲に敗北し一九一七年九月四日獨逸軍は此地を占領して了つた。——プレストリトプスク條約にてリガは獨逸の保護下に服する事となつた。獨軍の敗退と共に一九一八年十一月十八日此地方民はリガに於て獨立を宣言したのであつた。——一九二一年世界各國から獨立を承認せらる。
- (5)リガ講和 波蘭政府は聯合軍側(特にフランス)の後援を恃んでウクライナと共同して、露西亞の過激派政府と開戦し第一回分割以前の國境に復活させ様と考へた。——その結果リガ講和となつた。

1、波蘭の獨立を確認する事。

2、過激派露西亞政府は償金三千萬留を、又バラノウイチ (Baranowitschi) ヴィンスク (Pinsk) ロボノ (Rowno) を経る線以西の地域を波蘭へ讓る。同じく露西亞とリトワニアとの狭少な地帯(ドヴィンスク Dwinsk の東方チスナからバラノウイチに至る線以西)をバルト海への通路として與へる。

リーグニッツ (Liegnitz) (七回)

所在 獨逸のシレシヤ、オーデル河の上流プレスラウ市の西方に當る古戰場。

史實 蒙古大汗窩闊臺の命で拔都の別軍は波蘭から獨逸へ侵入し、波蘭及び獨逸の諸侯・武士の聯合軍と此地に一二四二年會戦して粉碎し歐洲人をして、其の勇猛を驚歎せしめた。

リンボス (Lyaiippos) (十七回本試)

紀元前四世紀頃希臘のシキオンに生れた青銅彫刻家で亞歷山大王の寵愛を受けて大王の肖像を一手に引受くる光榮を荷つたと傳へらる。此他クレンツムの巨像、ソクラテスの肖像、皆傑作で彼の作品には氣高い風貌、波立つ毛髮其美は實に眞に逼ると稱せらる。——ヘレニヅム美術家の巨擘である。

リツサ (Lissa) (廿二回豫備)

アドリヤ海中の一小島で一八六六年七月の普墺戰役の際テゲトフの指揮せる奧地利艦隊は同島の近海に於て、ピサノの率ゐたる伊太利艦隊を撃破した。此戰は甲鐵艦戰争第二期を劃するものとして有名である。伊太利は敗北したるも普魯西の大勝によつて、從來希望せしヴェニス地方を獲得したのである。

リニー (Ligny) (卅一回豫備)

所在 白耳義のブラツセルから南方十數哩の地に在る。

史實 ナポレオンはウイン會議開會中兵を擧げた。西洋諸國は寡奪者征伐の爲に五十萬以上の兵を集めるが奈翁は先づ四方から集つた十二萬の兵で敵軍の足並揃はぬ内に各個に撃破せんとNetherlandへ侵入した。プロシ

ヤ軍はブリユヘル將軍 (Blücher) に率ゐられてリニーで奈翁の軍に打ち敗られ指揮者ブリユヘルは負傷し退却を始めた。(一八一五年六月十六日) 佛將グルシー (Grouchy) は追撃して戰場から遠く離れる。普軍は佛將グルシーを破つて、奈翁の本軍を側面攻撃して十八日のワートルロー (Waterloo) の大敗北を蒙らせた。

リチャード一世 (Richard the Lion Hearted) (二十六回本試)

一一八九年—一一九九年 在位したヘンリー二世の後嗣で英蘭王即位後十字軍の運動に熱中し一一九〇年佛王フィリップ二世及び獨逸のフレデリック・バルバロッサ (Friedrich Barbarosa) と第三十字軍に加はりたるも、フレデリックは小アジアのセルフ河で溺死し、英・佛王はシシリ島から海路を進んでアッコンを獨逸のオーストリア公レオポルドと共に攻陥したが、リチャードはレオポルドの戦功を嫉んで侮辱し戦利品を貪つたフィリップ・オーガストはリチャードの武名獨り盛なのを忌みて歸國する。——獅心王は單獨で靈地恢復を努力したがサラジーン (Saladin) の勢強く遂に休戰條約を結んで「聖地巡禮は妨害せぬ」ことも認めさせた。

リチャードは海上で暴風に遭つて獨逸を経て歸國しようとするオーストリア公は舊怨で囚へて獨逸の皇帝レオポルド六世に引渡された。帝は古城に幽閉して巨額の賠償金を得て放還した。騎士的精神に満ちたロマンチックな行動は中世の詩歌小説の好箇の題材を提供したのである。

リニツェン (Lutzen) (廿六回豫備)「ワレンスタイン」の條四八三頁参照

リニホベル (Limeville) (廿六回豫備)

所在 東佛蘭西のストラスブルグの西南方に當る。

史實 マレンゴ・ホーヘンリンデンに境地利軍を撃破して奈翁は此地に講和條約を締結する。

(1) ライン左岸の地を佛蘭西に割譲すること。

(2) 奈翁が先に伊太利にて建設したる小共和國を承認すること。

○リヒェンス (Rubeans) (廿二回本試・三十七回豫備)

フランドル派の巨匠で伊太利の畫家の様に理想にのみ走らず現實に即したネーザラントの山水・風景や其家庭生活を描いた。——殊に雄大な構圖と鮮麗な色彩と英雄的氣分とによつて當時の全歐洲を風靡させ以てよく彼等畫派の特色を發揮したのである。

ルイ十四世 (卅四回本試)

ルイ十三世の子、九歳にして父を喪ひ頭僧官マザレン (Mazarin) 政を執る。一六六〇年より親政し「朕は國家なり」(I am the State) の主義で専制侵略の權化となつた。經濟家コルベールを任用して重商主義を行ひ内外の諸政を刷新して前後四回の外征を起し國力を疲弊せしめ大革命の遠因を作る。然し王の治世中は文學・藝術非常に進歩し佛國文化の黄金時代と稱せられる。(一六三六年—一七一五年)

ルーボア (Louvois) (二十回豫備・三十三回本試)

ルイ十四世に奉仕した陸軍大臣で軍制の改革に従事し劈頭傭兵制度に反對して「兵士は國民中より召集するの

制を立て」所謂國民兵制度を確立したのである。精銳な軍器を採用して銃槍隊を組織し野戰砲隊を増加し又武官の任命權は國王の權限に屬せしめ、或は軍隊の服裝を一定する等その劃策による事が多い。此改革の爲に佛國軍隊の面目を改め西班牙繼承戰後の頃には四十萬の大軍を動かすを得てルイ十四世の「侵略主義の爪牙」とした。

ルーヴェン (Louvain) (三十七回本試)

所在 白耳義の首府東南方に當る都府。

史實 中古に於ける商工都市として榮え、封建時代の古建築の遺物に富み、ルーヴェン大學及び圖書館によりて特に名高く。

ルーヴェン大學は白耳義第一等の大學で殊に神學部最も盛大を極めヨセフ二世 (マリアテレサの子) の改革運動さに反抗した。圖書館には珍書多く藏書十五萬に及び歴史的に尊重されたるが、世界大戰時の戰亂場となりて全市獨逸軍によつて焼き拂はれた。大戰後復興の爲、全世界より書籍を贈る。

レウクトラ (Leuctra) (十七回豫備)

所在 希臘のボエオチヤ國テーベの南方に當る。

史實 紀元前三七一年テーベの將エパミノンドス (Epaminondas) は此地にスパルタの北上せる大軍を斜陣法と稱する新戰術を以て、精銳無比なる敵の右翼を潰滅させた。これスパルタ空前の大敗にして一舉テーベの覇權を確立したのである。

レオ一世 (Leo I) (廿七回豫備)

紀元第五世紀に居つたローマ法王で大法王と諡名せらる。

(1) フン王アツチラ、シャロンの戦(四五一年)後伊太利へ侵入せんとするやレオはアツチラの陣營に赴き、贈賄して熱心に其退却を説きて成功し羅馬市の危急を救ふた。

(2) 後ヴァンダル王ガイゼリック (Gaiseric) の侵入に際しても、亦之を説服してローマの危難を救つた。
ローマ人は其徳を稱して毎年十一月十日其の祭禮を怠らない。

レニスミス (Ladymith) (卅八回本試)

所在 南阿の Cape of Good Hope 州に在る。ダーバン港の西北に當る。

史實 一八九九年南阿戦争起るや英人はボーア人 (Boers) の實力を誤算せしと、軍備の不充分なりしとによりボーア人に機先を制せられ英のジョージ・ホワイト (George White) の指揮する主力軍は叛軍を率ゐるジュベルト將軍の爲に此地に包圍され、救援の英軍をコレンソに撃破して世界の耳目を聳動させた。——これが英國民の大なる刺戟となつて、後援軍の派遣と糧食武器の補充に盡し反つて士氣大いに振作し徹底的に南阿の叛軍鎮壓をなさとする。

レセツプス (Leaseps) (十九回豫備)

ベルサイユ生れの佛蘭西の外交官で且つ事業家で(一八〇五年—一八九四年)ある。始め埃及に赴いて、紅海

と地中海とを連絡する運河を開鑿して東西兩洋の航路を短縮せんとの雄志を抱き埃及王に説いて許可を得、本國へ歸つて株券を募集し一八五四年—一八六九年に亘つて萬難を排して開鑿に成功した。茲にスエズ (Suez) 運河は歐亞交通の要衝に當り、技師レセツプスの名聲大いに揚る。後更にパナマ運河をつくらんとして資本缺乏の爲に失敗した。

レヒフェルド (Lechfeld) (卅三回本試)

所在 南獨逸のバワリアのアウグスツスブルグの南方に在る。

史實 九五五年八月十日、ホンガリアより來襲したマジヤール軍を獨逸皇帝オットー一世は此の平原にて撃破して永く其憂患を斷つた。

レンス Rheims (Rheims) (廿七回・廿八回本試)

所在 北佛、巴里から東北百哩の地點にある古市。

史實

(1) ゲルマンの一派フランク人の王クロヴィウス(四八一年—五一一年)はローアル河からライン河に亘る廣大なる領土を得て、メロピウス王統を確立し四九六年王は他の貴族と共に、アタナシウス派の信仰に歸依して、レンスの大教堂で洗禮を受けた。——是實にフランク王國隆盛の原因である。

(2) 百年戦争の後期ジャヌ・ダークは祖國救済の神旨を受けたりと稱して、陣頭に立つて英軍を撃破し——オル

レヤンの重圍忽ち解きレンスの大伽藍で佛王チャールス七世の戴冠式を挙げたのである。然し不幸にして捕はれて焚殺された。

。レンブラント (Rembrandt) (十八回本試)

和蘭のアムステルダムの肖像畫家の泰斗で又歴史家である「復活」巡禮「病を治せる基督」等を描き、フラン
ドル派の大家リユベンスと對すべき和蘭派の巨匠である。文藝復興時代伊太利の畫家達が理想の開展に努めた
のに彼等ネーデルランドでは理想よりも現實を完全に描寫しやうとする一派が出来て殊にレンブラントの筆には
は人の心を強く牽き附ける神祕的な深さがある。無限な意味を物語る其光に於ては彼は正に第一人者である。

ロージーヤー・ベーン (Roger Bacon) (卅一回本試)

英國牛津大學をは出でフランス派の律僧として活動し大いに學問を好んだ。當時の中古教會を神學的に説明
づける事を任務とした所謂スコラ哲學 (Scholastic Philosophy) の學風裡に棲息して、少しく方面を異にしたサラ
セン風學術の研究即ち理化數學に通じ望遠鏡を發明し、火藥を知り因て魔術博士ドクトル・ミラビリスの稱を得てゐた。從來の研學方
法の誤謬を指摘して非難し——世の學者は聖書とアリストテレスの哲學を拉典語 (Latin) を通じて窺ひ知るのみ
で眞の知識でない。苟も學問を根本的に探究せんとするものは希臘語 (Greek) の原本に就て深く究めねばならぬ
と云つて敬虔な態度で學術研究のために勇往邁進したのである。

然し彼自身の希臘語は拉典語に劣つて居つたから實際上の効果は見られなかつた。彼の着眼は一頭地を擡き將

來の進路コースを示したものと云はねばならぬ。——此が文藝復興時代の盛んなりし希臘語研究の先驅である所は注目
に價する。

ロスバツハ (Rosbach) (十二回豫備)

獨逸サクソニアの一邑、一七五七年普魯西のフレデリック大王が佛・墺聯合軍を粉碎した古戰場である。——七
年戦争初頭普軍の意氣大いに揚つた戦である。

ローレー (Walter Raleigh) (卅四回本試)

英宮廷の侍臣、文武の才能兼備し、牛津大學に學び一五八〇年愛蘭の叛徒を征して功績あり。一五八二年英宮廷
に入つて女王エリザベスの寵遇に預り、北米遠征の途に上り植民地を作つて處女王 (Virgin Queen) の名に因み
バージニア植民地としたのである。後女王の寵を失ひ叛逆の嫌疑で刑殺された。(一五五一年—一六一八年)

ローン (Count Von Roon) (廿四回)

獨逸の將軍でバルト海岸のプルスハーゲン Pleushagen (ノールブルク Kolberg 附近) に一八〇三年一士官の
子に生れた。彼は一八二一年普魯西の軍隊に入り、勤勉と實直で鳴渡つてゐた。彼は『軍事地理』に關する述作
をなしてから名聲大いに揚り、遂に兵學校の教官となり參謀に拔擢された。——後、皇太子 Frederick Charles
の御附武官として働き漸次地位が昂まつた。ウイリヤム一世の軍制改革に助力して多くの反抗者に打勝つた。一
八五九年陸相に一八六一年海相に就任し兩大臣の地位を一八七一年迄持續け一八六六年七週戦争や一八七一年普

佛戦争は彼の努力の賜である。かくて獨逸帝國を隆盛ならしめたのである。一八七一年に伯爵となり一八七三年に陸軍元帥となり一八七一年—七二年は普魯西内閣の總裁としたが一八七九年死歿した。彼の自叙傳は彼の令息によつて出版された。要するに彼はウイリヤム一世の爲に忠實に働いて獨逸帝國を隆盛ならしめた人である。

ローレンツォ・チ・メチチ (Lorenzo di Medici) (廿九〇本試)

第十五世紀フィレンツェの政柄を握つて、政治及び文化の上に著しい効果を表はした。(一四四八—一四九二) フィレンツェの政權を握り、共和政體であつた同國を君主政體に變じ法王シクスマス四世がナポリ王フェルジナンド一世と結びメチチ家滅亡を企つるや、ローレンツォは自らナポリに行きフェルジナンド一世を説得し同盟を脱せしめ法王をしてメチチ家と和するの止むなきに至らしめミラノ公ロドヴィコ (Lodvico) と和親し伊太利の平和と均勢を維持せんと努めたのである。

“Friend of the People and the father of his Country” と稱せられるコシモ・デ・メチチ (Cosim ode Medici) の孫であるだけに文學・美術を奨励し學者・名匠を優遇した爲にフィレンツェは當時の復活式文化の中心地となつた。文化上フィレンツェ市に敵するものなく「希臘文明の雅典」の如き地位を得た。 Renaissance 文化上の偉人 Dante, Petrarch, Boccaccio, Machiavelli, Michael Angelo は此市が生んだ人々である。

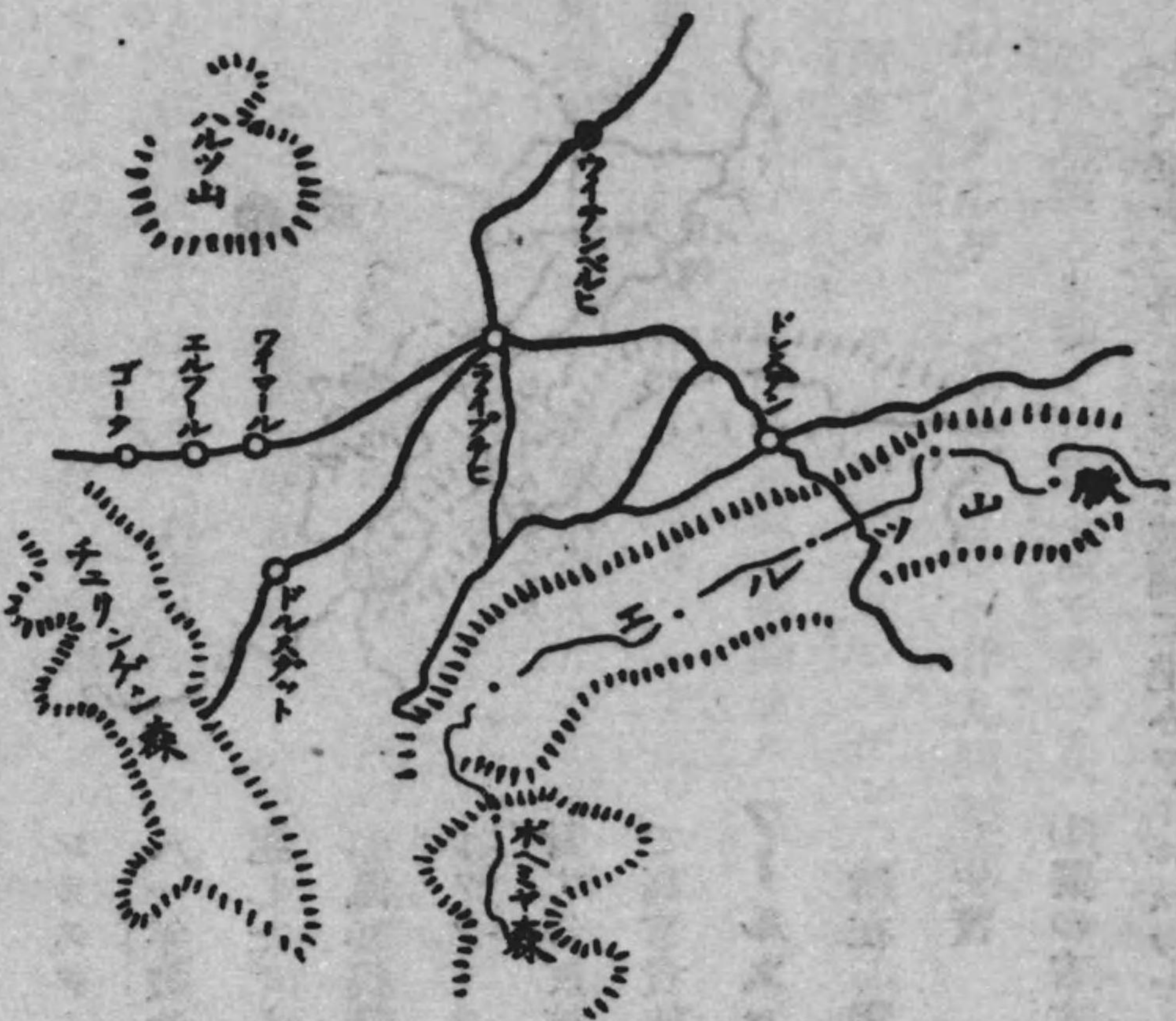
彼の歿後繼嗣不肖にしてフロレンス市の實權サボナローラ (Savonarolla) の掌中へ渡つた。

ワイマール (Weimar) (卅八回豫備)

獨逸の略々中部に在つてドレスデンの西方・ライプチヒの南西方に當る幽玄深遠な趣のある都會である。

(1) 詩都として 十八九世紀にては詩巢として世界に知られシルレル及びゲーテの住宅、ゲーテ國民博物館が現存して十九世紀の燦爛たる文化を物語る。

(2) 獨逸國民議會 一九一九年世界大戰の終局としての講和會議開かれ多少の波瀾を見たが對獨講和條約案を議了し之を獨逸に交付する——此より先獨逸にてはウイリヤム二世が退位した後、ワイマール國民議會は開かれエーベルト假大統領となり臨時憲法は可決され講和委員も任命された。同年六月十八日—二十三日講和調印の可否を論じ最後の日に至つて無條件調印を可決し外相ヘルマン・ミュルラー (Hermann Muller) 並に選相ベル (Bell) を派遣し廿八日ベルサイユ宮殿鏡の間で聯合國委員と會して相互の調印を了つた。ワイマール議會は大戰の跡仕末を



行ひ獨逸共和國の基礎を作つた。

ワット・タイラー (Wat Tyler) (二十三回本試)

英吉利王エドワード三世歿し(一三七七年)て黒太子の子リチャード二世王位を繼承したが幼少の爲、伯父ランカスター公ジョン政を専にした。重税を課して人民抑壓したから一三八一年鍛冶屋のワット・タイラー (Wat Tyler) 主魁となつて百姓一揆を起した。十萬の農民が煽動されて倫敦市へ闖入して朝廷及び貴族を威嚇し亂暴狼籍を極めた。社会主義の宗教家ジョン・ボール (John Ball) ウィッタリフの徒(貧僧)等の煽動にもよる。畢竟平民が貴族地主の壓制に對する反抗で中等社会代表の衆議院は貴族院の命に盲従せず自主的態度で高官貴族を弾劾した。

ワールスタット (Walslate) (十三回)

所在 獨逸シレンヤのプレスラウの略々西方の地である。

史實

(1) 蒙の古大祖成吉思汗の孫拔都は太宗の命を拜して西征し露西亞を經略して、軍を三分し北軍は波蘭に進みワールスタットにてリーグニツク侯ヘンリーの率ゐた波蘭・獨逸騎士聯合軍を得意の騎射にて粉碎し進んで獨逸を蹂躪せんとした折柄太宗の訃音で蒙古軍東歸した。



(2) 一八一三年八月廿六日、プロシヤの將軍ブリュヘル、マグドナルドのフランス軍を破り爲に同將軍はワールスタット公の尊稱を得た。同年十月十六日―十九日のライプチヒの戰所謂諸國民の戰爭 (Battle of the Nations) の序幕戦とも稱せられる戦であつた。奈翁の戰運愈々險惡となつて來る。

ワルトブルグ (Wartburg) (廿九回豫備)

所在 サクソニアの一市でドレスデンの西北方に當る。

ワルトブルク城には宗教改革論者ルーテル (Luther) が一五二二年ウオルムス勅令に従はず爲に身體危険の境遇に置かれたが幸にも、サクソニア公フレデリック賢王の庇護によつてワルトブルク城内に隠れ、聖書の獨逸語翻譯を成し文學上、宗教上著大なる影響を與へたのである。

ワレンスタイン (Wallenstein) (十回豫備)

ボヘミヤ生れの獨逸の名將にして且つ富豪、卅年戦役の際丁抹王クリスチヤン四世獨逸に侵入するや總督ワレンスタインは皇帝軍を率ゐてチリーと共に之を撃破した。次で瑞典王グスタフ・アドルフ北歐の覇權を掌握せんとて獨逸に侵入するやこれをリュツェン (Lutzen) に戦ひてグスタフを戦歿せしめた。(一六三二年) 戦後ワレンスタインの名聲舉り、反つて皇帝フェルディナンド二世に忌まれ、叛謀の疑を受け部下の將に暗殺された。(一六三四年) 卅年戦役の第二期以來皇帝を救けて獨逸統一の實を完成せんと欲し私兵を養ひて奮闘したるも帝に理解せられず。極めて波蘭に富む一生を遂げたのである。十八世紀の獨逸國民文學の驍將シルレル (Schiller) 作史劇

『ワレンスタイン』は卅年戦役の猛將が自己の充分に信頼してゐた人々に欺かれて、終に悲壯な死を遂げた運命劇で世に知られた主人公を勤めて居る。

第八章 受験の注意

試験場にては軍人が戦場に臨むが如き覺悟が要る。試験場は畢竟自己の平常修養練磨し蘊蓄した實力を發揮する場所である。換言すれば敵と雄雌を決する晴の舞臺である。所詮敵を倒すか。自ら斃れて醜い屍を曝すか。の二途より外にないのだ。故に精力の限をつくし知識の總動員を下し沈着に大膽に且つ細心の注意を拂ひ乍ら對應せねばならぬ。決して卑怯未練な振舞をしてはならぬ。自分の實力に信頼し公明正大、風光霽月の氣分で勇往邁進し、彼岸の月桂冠を手折らん事を念願せねばならぬ。

筆記試験の注意

- 1、必要なる携帯品は遺漏なく用意する事。
 - 時計（問題を平均に書く上には必需品だ）
 - 色鉛筆（略圖をかくのに要する）
 - 万年筆（能率の上から毛筆に數倍するから万年筆のよいのを二本位）

紙捻（六、七本）

- 2、文體は口語（含蓄ある）常體がよい。
- 3、文字は綺麗に且つ鮮明に。
 - 文字は下手でもキレイにかけばよい且つ鮮明に不明瞭なナグリ書は絶體に禁物である。行書體位にかくがよい。たとへ職務柄とは言へ試験委員に少しは同情を以て書かねばならぬ。しかし答案の書直しは愚の骨頂だと思ふそんな餘裕はない筈です。
- 4、問題の意味を冷静に思考せよ。
 - 試験場にては常態を逸し易い故に冷静に考へて發題の眞意義を深く探求してから筆をとらねばならぬ。
- 5、解答は易より難へ。
 - 問題は易いものから片づけて理解し難いものは最後に廻して置くこと。
- 6、要項をつくれ。
 - 問題はキレイに印刷されてゐるから其紙の餘白に書くべき要點をかき込んで首尾一貫した理路整然たるものを書く事。

7、大勢に着眼せよ。

文檢始まつて満點とつた人はないとの事だ。そんな事は殆ど不可能である。小問題に一つや二つ位不可能があつても大問題に對して確信さへあれば合格出来る。徒に小事件に貴重な時間を割いて大問題を半端にして丁つてはならぬ。

8、歴史として必要な Who, Where, When, Why, What (事件) What became of How を具備してゐるかをよく考へて置かねばならぬ。

9、書き終れば乾度一應吟味するがよい。兎にかく全體の答案を複製するに時間の餘裕などは決してない。然し時間が非常に足らぬと云ふ人は内容の精粗寛嚴其よろしきを得ぬ事を示す。與へられた時間一杯に筆をまとめる處に手腕と頭腦が判断される。

口述試問

兩試験委員の前であるから發問に對して比較的熟慮の餘裕がない。應問即答には少々困る。合格のみを願ふせず天下の碩學と對座して自己の史見を發表出來の光榮と思ひ大膽に應答し「知らぬ」は「知らぬ」として明かにし答を曖昧にしてはならぬ。教授法は筆記試験にパスする力があれば決してひつかしくない。——

問題の着眼點は如何に？

第一 問題の史的價值か何處にあるか。——達觀して要所を捕捉する事。

例へばサラトガといへば亞米利加合衆國獨立戰爭に決定的勝敗をつけた戦である事。

第二 史實を如何に解釋するか。如何なる史眼を有してゐるか。

史實年代を正確に記憶する事も必要なるが、それにもまして重要視せらるゝは史實の含む意味を眞に體して自己のものとしてゐるか。否か。を見られる。

第四十二回の豫備試験より大きな問題が三つとなつた。これは史眼を如何なる程度に養つてゐるかを檢せらるゝものだ。

總括的問題等であるならば一局部に明るくとも大局に着眼出來ぬ人は書きにくい。かゝる人は尙史眼が餘程幼稚であると思ふ。

試験する側から見れば大きい問題であればある程受験者の頭がよくわかる。——偶然の中もないわけになる。

適確に本の何頁から何頁までとならず自分の頭で創造せねばならぬ問題が眞に歴史力(史眼)を養ふによい問題なのだ。——余は自作問題を推賞する所以である。

第三 時局に照して考へよ。

歴史の本質として近代が詳細に、「現代世界の事相は歴史の成業に外ならぬ」から時局に如何なる影響と暗示を與へてゐるか。

英佛間の紛争は歴史的事實であるが——現在も、過去も。

第四 史實の詳記よりも流れ行く事相(時勢)の真相によく觸れよ。

西洋の文明發生の昔より——現代迄の、政治、經濟、宗教、文化の時流、社會に如何なる波紋を起して來たかを研究し真相を捉へること。

附 録

第一 ポエニ戦争の與ふる教訓

文學博士 村川堅固先生講述要約

一

歴史は繰返す、それは嚴密な意味では眞實でない。人間社會は假令靜止の状態にある様に見える時でも、時々刻々變化しつゝあるもので、前の或る時代に於ける状態が、その通りに繰返される事は、絶対にあり得ない。然し千變萬化する社會の状態の中では、或る程度まで前のある時代と類似したる形勢が形成せられる場合がある。それと一には人類の本質に一種の一致點(Identity)があつて、古來東西に亘つて變化しないものがあるので、歴史上には所謂類例(Analogy)なるものが幾多存在する。それで歴史上の重大なる事實を研駁し、比較し、咀嚼し、玩味する時は、そこに何等かの教訓を見出し得ないことは、殆どない。今述べんとするポエニ戦争の如きも即ちその一だ。

二

ポエニ戦争は誰も知る通り（紀元前二六四年—一四六年）前後百二十年間に亘るローマとカルタゴとの死活戦である。元よりその間數十年づゝの休止期間があつて三回に別れては居るが戦争の性質から見れば終始一貫したものだ。此の長き戦争がカルタゴの全滅を以て大團圓（Obergang）となつたのは、歴史上稀に見る大悲劇だが、此の戦争の世界史上における意義は、甚だ重大なものであつて、それは單にローマにカルタゴといふ二つの國家間の死活戦であるばかりでなく、同時にアリアン人種とセム人種の争覇戦であり、同時にローマによつて代表せられたるギリシヤ系文化と、カルタゴによつて代表せられたセム文化との存亡の戦である。それがローマの勝利を以て終局したことは、その影響するところ至大であつて、二十世紀の今日ギリシヤ・ローマ系統の歐米文明が、殆ど全世界を風靡せんとしてをるのも、畢竟ポエニ戦役におけるローマ側の勝利に、負ふところ甚だ大であると謂はねばならぬ。若し反對にカルタゴがローマを滅してゐたと考へれば、ローマが繼承し全帝國に普及し、そしてローマ滅亡後に於て全歐洲にひろまり、遂に南北兩米大陸に迄普及したギリシヤ・ローマ系の文化は、ローマの劣敗と同時にその進展の芽を折られて、之に代つてセム系統の文化が全歐を覆ふに至つたかも知れぬ。斯く考へ来れば、この戦争の意義の重大なることは、自然に明かになると同時に、此の戦争から吾々は幾多の教訓を引出し得ると思ふ。

三

所謂民族主義なるものが非常な勢力を占めることになつたのは、比較的新しいことではあるが、人種的反感なるものは既にポエニ戦役の當時から、甚だ熾烈だつたことが、此戦役によつて示されて居る。

現在の世界に於て、特に世界大戦後に於ては、人類協調・國際親善の精神が勃興したとはいへ、未だ間歴史的に養成維持せられた民族精神、及び之に伴ふ民族的反感が大戦の試練を経て、却て益々旺盛になつた事は、大戦終局後五ヶ年の世界各方面の事件によつて明示せられてゐる。又人種的反感の如きも今尙甚だ優勢であつて、最近日本人の血を沸かした米國の排日的新移民法制定の如きも、其の根底に人種的偏見がひそんで居ることは、争ふべからざる事實だ。

斯く考へ来ればポエニ戦役は、此の人種的反感の最も猛烈なる爆發の一例として、吾々を反省せしむる事が甚だ多い。今現に勃興しつつある世界人類協調の精神が國際聯盟の如き世界恒久平和維持機關の發達と共に、益々勢力を得て、幸に人種的反感に基く戦争を永久に、此の世界から一掃し去る事が出来る様になる事は、我々の最も望む所だが、もし不幸にしてその希望が實現されず、將來人種的戦争でも起る様な時があつたとしたら、吾々はこのポエニ戦役の指示する所に鑑る必要はなからうか

四

ポエニ戦争は前後三回に亘つて行はれたが、其れは何れもローマ對カルタゴの戦争であつたといふものゝ、各々多少性質上の差異を有つてゐる。

その第一回がローマカルタゴ間の争の林檎だつたシシリー島に於ける勢力争ひに端を發して、十四年の永い戦争となつたので、第一回は眞に兩國が相手を屈伏せしむる目的で戦つた。然るに此の第一回がローマの勝利を以つて終つた後、カルタゴは傭兵の亂によつて非常な窮境に陥つたのと、カルタゴ當局の考が政治的勢力の發展よりも、商業的發展を重んじたので、ローマがカルタゴの商業を阻害しない限り、ある程度までローマのいふなりになつても、平和を維持しようといふ考になつてゐた。然しカルタゴの方にも所謂愛國黨なるものがあつて、どうしても戦争でローマを打破り、カルタゴの名譽を恢復し、國威を發揚しなければならぬと考へた。有名なハミカル、バルカスは即ちその黨派の首領で、優柔不斷なカルタゴ當局の力を借りず、自己の事業としてローマに復讐し、カルタゴの名譽を恢復せんと欲した。而しその事業はなかく困難な大事業であるから、自分の一代の中にこれをなし遂げる事は出来ないで、その精神を子のハンニバルに傳へた。

五

第二回のポエニ戦争は、バルカスの遺志をついだハンニバルが、獨力で始めた戦争であるから、ローマとカルタゴの争といふものも、ローマ對ハンニバルの戦争といつた方が適切だ。しかし此の戦争がハンニバルの敗北に終つたことは、カルタゴの上に重大な損失を來し、その勢力は一朝にして失墜する結果となつた。

此の第二回戦役は十七年の永きに亘り、始めはハンニバルの連戦連勝でローマは非常な悲境に陥つたのだがローマ國民の堅忍不拔な如何なる連敗を以てしても不撓不屈で、遂に英雄ハンニバルを屈伏せしめた。

一體ハンニバルはこの戦争を起すについて、非常に大事をとり、必ずローマを打破り出來得べくんば之を滅亡せしめようと思つて、當時ローマの勅典を憎んでゐた周圍の諸國と大同盟をなして、周圍からローマを封鎖して必ず之を屈伏せしめようとしたのである。然し之に對するローマ側の政策がよろしきを得た爲に、折角のハンニバルの大同盟策も、その實效を現すことができなかつた。

開戦當時の形勢は世界大戰に於ける獨逸と聯合諸國の關係に似て居る。即ち獨逸をローマとすれば聯合諸國はハンニバルとその同盟國だ。然るに世界大戰にては、聯合國は遂に獨逸を屈伏せしめるが、ハンニバルの場合に於ては、孤立無援のローマが、却てハンニバルを屈伏せしめたので、恰度反

對の結果になつて居た。その原因は種々ある。乃ち前に述べた如くハンニバルの同盟者がその同盟の約を果すことのできなかつたのも、元より大なる原因だが、一方から見れば、此のハンニバルの戦役は、ローマの國民とハンニバルといふ一英傑との戦と見るべきだ。全戦役を通じて、ローマ側には、一人としてハンニバルに匹敵する程の大人物はゐない。

それにもかゝらずローマが遂に最後の勝利を得たといふのは、當時ローマの國民を指導せる當局者、元老院の旺なる元氣と、その指導をうくる國民全般が如何なる苦境に立つても、決して敵に屈しないといふ勇猛心の結果だ。

そこで吾々の此の戦役から學ぶ所は、如何なる英傑が現れても、一人の力ではとても元氣旺盛な敵國民に對して、之を屈伏せしむることは不可能だといふことだ。後世殆ど全歐を風靡する程の威力を振つたナポレオンが遂に敗北したことも矢張り佛國以外の周圍の國民の元氣に破れたのだ。

一體非常の大人物は始終どこの國民にも存在するものだ。が、如上の實例から考へる時には、たとへ敵國の有する程の大人物が味方になくとも、國民全體の力で永い間には最後の勝利を占めるといふ事がわかる。

六

第三回ポエニ戦争は第一回、第二回とは又性質を異にして居る。十七ヶ年に亘るハンニバルとの戦役で、ローマが非常な苦境に陥つた末、最後にハンニバルを破つてカルタゴに課した平和條件は、非常に苛酷で、將來カルタゴが再び勢力を恢復して、ローマに對する復讐戦を起す事を不可能ならしむる目的を以て、つくられたものだ。

カルタゴ側においても、此の辛き經驗上から、ローマに對して反抗を試みる考はなかつたのだが、而しその商業は自然に繁榮に赴いたので、ローマ當局者の間にはやはりカルタゴに對する危惧の念が存してゐて、機會があらば之を全滅しようと思つた。それで第三回ポエニ戦役は全然ローマが口實を設けて、進撃的態度に出で、カルタゴが飽く迄平和維持の方策を講じたにもかゝらず、遂に開戦して之を全滅せしむるに至つたのだ。

七

このカルタゴ全滅の如き事は、近世史上においては類例は餘り多くないが、然し絶無といふわけでもない。歐羅巴大陸の諸國の如く、國際關係が複雑になつてをり、各國の經濟が有機的に働いて居るところでは、一國を全滅せしむる事は殆ど不可能のことに屬するが歐洲以外の邊鄙な地方に對しては獨立せる國家を全滅せしめて、その地方を併呑する事實が、近き頃まで行はれて居る。即ち十九世紀

末より二十世紀初頭に亘る南阿戰爭にて、英國はオレンヂ、トランスヴァール兩共和國を亡し、その領土全部を自己の植民地としたるが如き、又二十世紀になつても米國が、西印度諸島中のハイチ、サント、ドミンゴ兩共和國を占領して、今だに之を還付しない事實の如きは、列國の共同利害によつて牽制せられない限り諸國は如何に對して横暴を逞しくするか知れぬ。

カルタゴの悲惨な末路を見、之を最近の事實と照合して我々は大いに鑑みる所がなければならぬと思ふ。(丁)(文責著者に在り)

第二 歐洲新興國の史的觀察

文學博士 村川堅固先生講述要約

本論文は文檢西洋史料試驗委員東大教授村川博士が大正九年八月國民教育獎勵會主催の第一回現代研究講習會の講演の大意で吾等西洋史を研究するもの反覆熟讀を要すると深く信じます。本文をよく讀めば同博士の名著「世界改造の史的觀察」は別段讀まないでよい。

(一) 改造と歴史

現時は所謂改造の時期で有形上、無形上非常なる變化が既に起り又起りつゝある時である。其改造とは如何なる事であるかと考へて見ると、其中には種々なる事が包含されてゐるが、先づ有形的方面に於て最も吾々の注意を惹くことは、吾人々類の住居する地球上の國家が數に於ても境界に於ても著しく變化された。今度の如き世界各國家の大變動は歴史上未だ會て見ざる所であつて、其間に幾多の國が新に興つた。乃ち歐羅巴に於て新しく興りたる國を歴史的に觀察して見やうと云ふのが、乃ち本題の趣意である。何故に斯かる題を選びしかと云へば、世間動もすれば改造 (Reconstruction) と云ふことは過去の歴史が消滅して全く世の中が新たに成り、又過去の因習を打破つて理想の上に今後の世界を立てるのが改造であると、斯様に説く人が少くないやうに見受ける。然しながら吾々史學者の立場よりしてかうして今日まで起りたる所謂改造の事象と云ふものを觀察して見ると其間に歴史の力が非常に働いて居ることを發見する。予は茲に於て若し過去の歴史的の力を無視して改造が出来るものであるとか、また若し之を無視して改造すべきものだと思ふやうに考へる人がありとすれば、それは非常な誤りで以下私の講述する所は、歐羅巴に於ける新興國に就て、從來の教科書若くは教授用の參考書

等に書てないやうな新しき事に纏めて一通り述べて同時に猶一方に於ては事實に就て過去の力が現在に如何に働きたつゝあるかと云ふことを少しく證據立て、見たいのが私の趣意である。若し改造を善き事であるとして、其の改造は過去の力を無視し從來の制度習慣其他を皆な悉く打破して爲すべきものであるとするならば、改造運動の爲には歴史と云ふものは非常なる妨害物となる、又何を苦んで國民教育に歴史科を置くの必要があらうか。秦の始皇帝がやつたやうに歴史は悉く焼き捨て歴史家は悉く坑に葬むることゝした方が改造の目的を達するに都合が宜い譯であつて、我々史家は第一に葬らるべき運命を有して居る人間である。然れども吾々は事實決してさうではないと云ふことを確信し又今後長く生き延びて行く望みあるものと信じて居る。萬一にも過去の力が今後に働かぬと云ふ見地からして教育も政治も行ふことになつたならば、三千年來の光輝ある我國體の運命の如きも、甚だ危殆なりと謂はなければならぬ。特に國民教育に従事して居らるゝ諸君は此の歴史の力が現在にも働き又將來にも働らくと云ふ確信を以て兒童を教育して行かれんことを切望する次第である。

今日は昨日の繼續であつた、明日は今日の發生である。今日無くして明日は無い、然るに如何にして過去と絶縁して今後の事を考へ得られやうか、到底不可能の事である。それが出来ない以上は過去の力は現在にも將來にも働くと云ふことを、豫定してかゝらなければならぬ。是れだけでは誠に抽象的の議論であつて、之に由つて諸君の御賛成を得らるゝかどうか甚だ疑問であるが故に事實に就て其事を證明したならば或は御賛成を得らるゝかと思ふ。

(二) 新興せる三國

其處で私はこれから愈々今度の新興國のお話に移るのであるが御承知の如く此の戰爭中に民族自決主義 (Self-determination) と云ふものがウキルソン大統領に依て高唱され、彼方此方に獨立を宣言した國は澤山ある。けれども其中眞に國家として存立し得るや否や頗る疑問のものもあり、或は既に泡沫の如く一度宣言はしても今は全く無くなつて居るやうな國が幾らもある。乃て私は此處には主として其中の三ヶ國に就き述べやうと思ふ。三ヶ國とはユーゴスラヴィヤ、チエツコスロヴァキヤ、波蘭の三つであつて、此の三ヶ國は媾和條約に依て獨立を承認され未だ其の境界等は確定しないけれども是等は必ず今後に存在する新しき國であると思ふ。其他芬蘭、ウクライナ、エストランド (エストニヤ) 等の諸國もあるが、是等の國は今日尙混沌たる形であつて、もう少し其の形勢の定まりたる後に、何かの機會で歴史的觀察をした方が適當であると思ふ。尙ほ與へられたる時間も僅かであるから諸方面の事を述べて居る暇がないので此の三ヶ國の事を概略申述べる積りである。

第一にユーゴスラヴィヤと云ふ新らしき國が出来たに付ては歴史的背景がなかく、澤山にある。今より少くとも十世紀まで遡つて説く必要があるが、大體此の國の起り來れる所以の必要な點のみを摘んだ。

(三) 巴爾幹の概観

其處で此處に巴爾幹半島全體に涉りての觀察であるが、巴爾幹半島と云ふものは一體どの位の面積があるか、是は確實に申上ることが出来ない。何故なれば巴爾幹と云ふ名は半島内の勃牙利の南方東西に亘つて居る山脈の名であつて、それから出て居る巴爾幹半島に包含されて居る地域は、北方は何所までが境界であると云ふことが出来ない。戰爭前まで巴爾幹諸國と稱せられた國が七つあつた。即ち羅馬尼亞、勃牙利、塞耳比亞、歐羅巴土耳其、希臘、モンテネグロの諸國であつて、それ等の面積を加へて見ると約二十萬方哩となり、巴爾幹半島は我が日本の面積位しかない。其の一國が如何に小さきものであるかは容易に察知せられる。就中、最も小なるモンテネグロの如きは一縣位である。千九百十三年に第二次巴爾幹戰役以前の希臘は我が北海道よりズット小さいものであつた。それ等の國が巴爾幹半島と云ふ狭き土地に於て互に爭鬪し、所謂蝸牛角上の争をやつて居る。加ふるに諸強國の利

害が衝突して巴爾幹問題が非常に複雑なものとなつて來る。他日歐羅巴の禍亂の基を巴爾幹から發するであらうと云ふことは從來言はれて居たことであつた。果せる哉我が大正三年六月二十八日塞耳比亞の變が導火線となつて世界大戰爭が起り、千九百十八年十一月休戰となつた其の機會も、巴爾幹方面の戰況に依て促進せられた。即ち中央同盟側に屬する勃牙利が英吉利、佛蘭西、伊太利、塞耳比亞の聯合軍に攻め立てられ、到底抵抗が出来なくなつて、千九百十八年九月三十日に殆ど無條件の休戰條約、或は降服と云ふのが適當であるやうな休戰條約を結ぶまでに獨、塙側が破れた結果であつた。それで今度の戰爭は巴爾幹に始まり巴爾幹に終ると云ふても或る點から云へば言はれるのである。

巴爾幹は何故其様に歐羅巴の國際關係に重要視せらるゝか、巴爾幹問題は何故に左まで複雑であるかと云ふことを考へると、巴爾幹と云ふ土地は歐羅巴土耳其と亞細亞土耳其との中間にあつて、古來東方から西の方へ移り行く民族の通過する地方である。一體世界の民族の移動は之を歴史的に考へると古來東方から西方に移り行くか或は北から南へ出ると云ふのが世界民族移動の大體の傾向である。歐羅巴人が亞米利加の新大陸に移り行きたるも其の一例であつて、亞細亞諸民族の歐羅巴の方へ入り、今日歐羅巴に存在して居る民族は多く東方から入り來つたものである。これと反對の除外例もあるけれども大體から云へばさうなつて居る。此の民族移動の際に或は巴爾幹半島に其の儘止つて居る

Nov. 1918.

者もあり、或は通り抜けて西の方へ往つた者もあるが、又歴史以前から此の地方に居る土着の民族も残つて居る。希臘人はいつ頃巴爾幹半島に來たものである分からねが矢張其の血統は巴爾幹に残つて居る。尙ほマケドニヤ人イリリヤ人等の希臘人と異なりたる民族もあつて、其の子孫も今に残つて居る。又アルバニヤ人等は昔のイリリヤ人の血を傳へて居る。其の後歴史的時代となつて入り來つた人種も色々ある。ゴート人の如きは東ゴート、西ゴートと分れて居るが、是も暫く居たのであつてゴート人は西の方へ移り行き、今日巴爾幹には残つて居らぬ。フン人種、是も一時巴爾幹に居たものであるが、洪牙利の方から埃太利の方に進入し其の子孫は今日残つて居らぬ。今日残つて居るのは希臘人の子孫、アルバニヤ人、マケドニヤ人、羅馬尼亞人等である。羅馬尼亞人は東方から來たものではなく、羅馬帝國の旺盛な時代に今の羅馬尼亞地方が羅馬の領地になつて居た。其の時邊疆守備の爲に拉典人が彼所に移された。それが今日の羅馬尼亞人の先祖である。併し其の純粹の往昔からの血を傳へた人種は殆ど無いと謂ふて宜い。色々な民族が次から次へと入來るものであるから、さう云ふ人種と混血して雜種となつた。それで今日の羅馬尼亞人の如きも以前は拉典民族であつた。それから塞耳比亞人は紀元前七八世紀頃に北の方から來たスラヴ人種である。又勃牙利人は人種的種族は判然判らぬが、多分蒙古種であらう。併し露西亞から來たスラヴの分子が多く入り、言語、風俗、習慣總てス

ラヴ化して居る。故に是は準スラヴと謂ふべきである。斯様に種々なる人種が此の狹隘な土地に入り込み、それも割然地域を限つて、それ／＼の民族が住んで居るのでなくして、互に混交雜居と云ふ形で居る。又最後に來た土耳其人も居る。斯様に混雜して異なりたる言語を有し、宗教の如きも統一せず、殊に土耳其人と其他の民族とは昔から歴史的に宗教上の反目がある。即ち土耳其人の方はマホメット教であつて其他は基督教であるから宗教上の反目がある。

(四) 巴爾幹諸民族の獨立欲求

十九世紀以來、民族主義或は國民主義(ナショナルイズム)が盛んになり是等の小民族が何れも獨立して民族的獨立を遂げやうと云ふのであるから、巴爾幹に於ては始終色々な事件が起るのである。其の民族主義も千八百七十八年の伯林條約(即ち七十六年から七十七年に涉る露土戰爭の結果、千八百七十八年の伯林會議に於て出來た伯林條約)に依つて略々解決されたのであるけれども、猶ほ幾多の問題が残されて居るので十分の解決が出來なかつた。

民族主義に依て巴爾幹の諸民族が互に競争する理由の一は、是等の民族は皆過去に於て非常に繁榮した歴史を有して居るからである。云ふまでもなく希臘は歐羅巴文明の淵源地である。希臘と云ふ國

家は古代に於て多くの小國が分立して居たのであつて、希臘全體を統一した國家が形造られたことは一度もない。アテネ・スパルタの如き都市國家が繁榮して希臘の他の地方を自分の覇權の下に置いたことはあるが、希臘全體が統一されて一國を形造つたことはなかつたのである。けれども希臘は歐羅巴文明の淵源であると云ふ自尊心がある。其の希臘人が三百年來異教徒たる土耳其の抑壓の下に苦んで居た。それが十九世紀に至りて民族主義が盛んに起り、遂に獨立戰爭を起して千八百二十九年に其の獨立の目的を遂げた。然れども希臘人は其の獨立した國家の境域を以て甘んぜず。異教徒たる土耳其を段々巴爾幹半島から驅逐して、而して此の方へ自分の境域を擴めやうとする。又勃牙利、塞耳比亞の如き、何れも旺盛なりし過去を有してゐる。勃牙利の最も盛なりし時代はシメオン汗在世の時であつた。是は基督紀元九世紀の後半から十世紀の前半まで在位した王であつて此時が最も勃牙利の勢力が盛で、領土も南の方まで擴大されて居た。其の時代を再現しやうと云ふのが勃牙利人の希望である。それから塞耳比亞、是は少し後れて十四世紀頃、即ちステファン・ヴシヤン王の時代が最も榮へたのであるが、此王は千三百五十六年に死んだ。其中に土耳其が東の方から侵入し來り、漸次巴爾幹諸國を征服し千三百八十九年にコンツェラポリエーの戰爭に於て基督教の諸國を打破り、巴爾幹全部土耳其の領地となつたので、塞耳比亞も勃牙利も共に滅亡して仕舞つた。それが十八世紀の前半から十

九世紀の前半にかけて、民族主義が非常に盛んになつて來て過去を追想し、獨立恢復運動が勃牙利にも塞耳比亞にも起つたのである。

(五) 列強の巴爾幹に對する野心

其所へ諸強國の巴爾幹に對する野心が織り込まれ、是等諸國の民族的要求を使嗾し、而して獨立運動を寧ろ教唆してやらせるやうにした。例へば露西亞は始終南の方へ出る爲に土耳其を滅亡せしめ君府を取らうと云ふのが、歴代の南下政策である。其の途中に勃牙利と云ふ國がある。勃牙利は前に申した如く準スラヴ民族である。露西亞は無論スラヴ人であつて、同人種の間柄である。故に其の獨立運動を援助することになる。塞耳比亞もスラヴ國であつて、是も露西亞が後援して南下の目的を達せんとする。然るに英吉利は露西亞が君府の方へ出て來るのを非常に危険な事と考へる。之が爲に英國の寶庫たる印度との交通を、横合から脅かさるゝやうな事になつては危険であるから、其の南下政策を喰ひ止めやうと云ふ所から、遂に千八百五十三年より五十五年は直るクリミア戰爭が起つたのである。それから千八百七十六年には黒山國が土耳其に對して獨立運動を開始した。其頃黒山國は土耳其の領地であつたが、此年に獨立運動を起し、塞耳比亞もそれと同時に戰爭を始め、露西亞も之を好機

會として土耳其に對して宣戰した。そうして土耳其を打破り、サンステファノの條約を結び、勃牙利の境域を擴めることゝなつた。是は露西亞が勃牙利を自分の屬國の如きものにして、而して地中海方面に向つて勢力を延ばす策である。英國は豫て此露土戰爭の際に、非常に猜疑と不平の眼を以て見て居たのであるが、自國に有利なる條件を露西亞が勝手に定めたと云ふので、英國人は非常に激昂し時の宰相ベコンスフィールドがビスマルクと協議し伯林會議を開いて、而して大體に於てベコンスフィールドの主張通りとなつた。即ち露西亞が勝手に定めたサンステファノ條約を破棄し、勃牙利の境域は大に縮小されることとなり、其の際に塞耳比亞、羅馬尼亞などの獨立が認められた。併し其時の境域は大戦前のそれより少さかつた。

(六) 日露戰爭の世界に及ぼせる影響

日露戰爭が千九百四年から千九百五年にかけて（明治三十七八年）戦はれた。此の日露戰爭の世界歴史に及ぼした影響と云ふものは實に大なるものである。我國があれだけの壯丁を滿洲の野に送りて死傷せしめ貧乏な世帯の中から尠なからざる國費を支出し、露西亞を撃ち破つたにも拘らず、日本國民の多くは此の日露戰爭が世界の歴史上どの位の影響を齎したかと云ふことに付ては十分の自覺が

ない。是は教育家は十分兒童の頭の中へ注ぎ込んで戴きたい。世界大戰の如きも、或る點から云へば間接に日露戰爭から出て居るとも見らるゝのである。日露戰爭で斯かる小國の日本が露西亞を撃ち破つた結果として、世界の各國に於てはどうして日本が露西亞に勝つことが出来たであらうか、多數の人の見る所ではどうしても日本の方が負ける筈である。地圖の上から考へても日本が負けるのが當然である。然るに日本が勝つた。其の原因に就ては世界各国に於て色々に説かれたのである。所で從來專制政治が行はれて居た處では、是は『日本の立憲政治が露西亞の專制政治に勝つた』ものであると解釋した。そこで日露戰爭の結果として諸方に立憲運動が起り、波斯にも起り、支那にも盛に起り、埃及、土耳其も同様であつた。土耳其は以前既に一度憲法政治を布いたことがあるが、憲法を發布しても憲法政治の實が擧つて居らぬ。日露戰爭後青年土耳其黨の革命が起り、其の機會の到來するを待て居た勃牙利が獨立を宣言した。然し土耳其は内が騷擾して居るので其の獨立を防止する力なく尙勃牙利が獨立を宣言した其の翌日、埃は千八百七十八年の伯林會議に於て名義上土耳其の領地ではあるが、其管理權を獲得して居たボスニヤ、ヘルゼゴヴィナ地方を併合することを宣言した。それが勃牙利が獨立を宣言した翌日であつて、兩國の間に豫め十分の諒解のあつたことは疑ない。是は隨分亂暴な話であるが、埃太利が、かゝる傍若無人の擧を敢てするに至つたのは、即ち日露戰爭が斯かる事を

可能ならしめた。

(七) 塞耳比亞と奥國のボ・ヘ兩州併合

尙又塞耳比亞との關係を見る必要がある。塞耳比亞は大戦前まで海を持たない國であつた。故に國の發展を圖る爲には、どうにかして海に出る地方が欲しい。所で塞耳比亞の常に狙つて居たのが此のボスニヤ、ヘルゼゴヴィナの地方である。塞耳比亞の全盛時代には、此の地方までも領土として居た歴史があるのみならず、ボスニヤ、ヘルゼゴヴィナ地方の住民は塞耳比亞人が多數を占めて居た關係上是非此の地方を將來領土としてアドリヤ海へ出口を得やうと云ふので、それが爲めオムラヂナと云ふやうな秘密結社などが出来て、大塞耳比亞主義の宣傳に努めて居た。所がボスニヤ、ヘルゼゴヴィナ地方を併合することになると塞耳比亞のアドリヤ海への出口は全く閉塞されることになつて了ふ。そこで塞耳比亞は伊太利の此の處置に對して非常に憤激し、強硬なる抗議を申込んだ。此時から塞耳比亞と奥太利の關係は連続的に悪くなつて、場合によつては戦争に訴へてまでも此の地方の併合を撤廢せしめやうと云ふのが其の時の塞耳比亞の希望であつた。然し塞耳比亞と奥太利とは武力の點に於ても非常な相違がある。それにも拘らず塞耳比亞が斯の如き強硬なる態度を執つたのは何故であるか。

言ふまでもなく塞耳比亞は豫てより露西亞の後援を恃んで居たからである。露西亞が背後から奥太利が斯の如き專横な處置をしたことは、許すべからざるものであると云ふ考を吹込んで居るから、塞耳比亞が強硬に奥太利に當つた。そこで當時露西亞の外務大臣イスツオルスキイ (Isvolsky) などは一片の宣言書を以てボスニヤ地方を併合することは甚しき不當な處置である。縱令併合すべき理由ありとしても、少くとも列國會議を開き、列國の承認を経てなすべきものであると異議を申込んだのであるが、奥太利の外務大臣エーレンタール (Aehrenthal) は此の露西亞の異議に對して、全く相關知せざるが如き態度を執り一向相手にしない。宜しい自分の方の處置が不法であると云ふことなら戦争でもやつたら宜からう。武力で御出でなさいと云ふ風の態度に出た。斯様に奥太利が強く出たのは又獨逸が背後から奥太利を押し居るからである。それは獨逸が伯林バグダット鐵道政策を取り、東南に延びんとする政策から、奥太利の後援をして居る。獨逸にせよ奥太利にせよ、是は大丈夫である。如何に露西亞や塞耳比亞が之に就いて不満を懷いても、到底戦争に訴へる氣遣ひはないと云ふ見込を附けたから、今申すやうな強硬な態度に出たのであつた。其處でさう云ふ見込は何に基いて立てたかと云ふと、それが即ち日露戦争で露西亞がアノ通り敗北し戦後に於ても國內紊亂し、其の傷は容易に癒えない。到底武力に訴へてまでもボスニヤ問題を解決する勇氣は無いものと見て取つたから、斯の如

き暴行も其儘になつて仕舞つた次第である。そこで塞耳比亞が非常に悲觀して此の方面から海に出る望みが無くなつたと云ふので、其時から兩國の關係は頗る險惡なものとなつた。それが遂に大正三年六月二十八日此のボスニヤの首府サライエヴォに於ける奥太利の皇儲夫妻暗殺の原因となり、其の暗殺が今度の大戦争の導火線となつたのであるから、此の點から見ても日露戦争が今度の戦争の間接の原因となつたと云ふことが謂はれるではないか。

(八) 伊土戦争——二回のバルカン戦争

却説前に申すやうな次第で多年塞耳比亞なり、勃牙利なり、希臘なり、巴爾幹諸國は土耳其を歐羅巴から驅逐して、自分々の領土を擴めやうと云ふ機會を窺つて居た。所が千九百十一年に至りて伊太利と土耳其との戦争が起つた。是は伊太利が多年着眼して居たトリポリ地方を取るのが目的である。伊太利が地中海を隔てた阿弗利加の北岸地方を取らうとした此の戦争の勃發は非常に世界を驚かしたのである。それまで何等重大問題も起つて居なかつた間柄であつたのに、電光石火の如く此の戦争が起つたので、大に世界を驚かした。それは土耳其が新たに立憲政治を布き頽廢を挽回して再び盛んになられては、伊太利が豫て望んで居るトリポリ地方を取るに事面倒になるから、今土耳其の革命

騒ぎの治まらぬ中に、早く取つた方が宜いと云ふので、此の戦争が起つた。其の結果トリポリは伊太利に取られたのみならず、エーゲ海の島嶼まで伊太利の占領する所となつた。さうして此の戦争は巴爾幹諸國が土耳其を苦しめやうと云ふ機會を造つたものである。此の伊太利と土耳其の戦争は千九百十一年から十二年まで續いて居るが、十二年の三月末日に先づ塞耳比亞と勃牙利の間に一の條約が締約された、其の同盟の條約文の中には、兩國が共同して土耳其と戦争を開き、戦後に土耳其から取つた土地を平等に分配する、開戦の場合には塞耳比亞は十五萬の兵を出し、勃牙利は二十萬の兵を出す。若し此の開戦の場合に奥太利洪牙利が北から塞耳比亞を攻むる場合があつたときは、更に二十萬の兵を出して塞耳比亞を助けると云ふ條項で同盟が出来た。同年の中に彼方にも此方にも同盟が出来た。此の同盟を打つて一丸としたのが同年七月二日の巴爾幹同盟と稱するものである。アルバニヤは未だ其の時分は無かつた、而して其戦争を開始したのが第一次巴爾幹戦役である。此の第一次巴爾幹戦役に於て儘に獨逸は違算をやつてゐる。獨逸は先に土耳其を懷柔して土耳其から種々の利權を獲得し、而して伯林バグダット鐵道政策を遂行して東方に延びやうと云ふのであるから此の場合には土耳其を自分で助くるか、奥太利をして助けしむるのが當然であるのに、獨逸は此の際巴爾幹諸國が土耳其に對して聯合して戦争しても土耳其は大丈夫之に打ち勝つことが出来ると考へて樂觀して居たやう

である。と云ふのは其の前千八百九十七年に希臘と土耳其の戦争のあつた場合に希臘軍が散々に敗北して居る。其様な事もあり又土耳其の陸軍獨逸の將校が行つて訓練を興へて居る關係から土耳其は案外強いと樂觀して居つた。所が戦争が開始されて見ると、土耳其の方が連戦連敗の形で、特にクマノヱアの戦争では塞耳比亞の爲に散々に撃ち破られ、遂に翌年の千九百十三年に倫敦に於て土耳其と巴爾幹諸國との間の平和條約が一旦締結せられ、土耳其は其歐洲に有する領地を大部分四ヶ國に割讓して僅かな土地を保つと云ふことに定つたのである。所が土耳其が割讓した土地の分配に就て巴爾幹諸國の間に内輪揉めを生じ、一方勃牙利と他方希臘、塞耳比亞、黒山三國との間に戦争が起つた。是が第二次巴爾幹戦役である。其の結果勃牙利が撃ち破られ、爲に土耳其は其の間に漁夫の利を占め、前の條約では當然失ふべき筈であつたアドリヤノーブルの都を恢復して此の戦争は終りを告げ條約が締結された。是が千九百十三年のブカレスト條約である。

(九) アルバニア國の新設

此の時にアルバニアと云ふ新興國が出来た。此所は黒山と希臘とが分割して取らうとした地域である。其所へアルバニアと云ふ國が出来たのであるが、此の國の出来たのは、獨逸、奧太利の暗中飛躍

の結果であつて、何の目的で斯様な新興國を造るに盡力したかと云ふに、前に申す如くボスニヤ、ヘルゼゴヴィナが取られて塞耳比亞は海に出ることが出来なくなつた。そこで塞耳比亞が次に望を囑して居たのが此の方面であるから、畢竟塞耳比亞に何所までも海を持たせぬやうにする必要から斯様な新興國も出来ることになつた。斯くして塞耳比亞の獨占に對する憤慨は一層其度を高むるやうになつて來た。是れで先づ今度の大戦争の勃發する前千九百十三年までの事を大體申した積りである。

(一〇) ユーゴスラヴィヤの勃興

所で今度の戦争の結果新らしく出来たユーゴスラヴィヤの大體の境域を此所に示してあるが、未だバナード地方等には境界は定つて居らぬ。此のユーゴスラヴィヤは南スラヴ人の國の義である。之に對して波蘭、ボヘミヤは西スラヴである。其の南スラヴ人を打て一團として新しき國家を打ち立てやうと云ふ希望は、既に十七世紀頃からあつたので、十九世紀となつて南スラヴ即ちユーゴスラヴ協會と云ふものが出来て、而して各地方に支部を置き、南スラヴ人種を總て包含したる一の國家を打立てやうと云ふ目的を有して居たけれども、此の目的を實現するのはなか／＼容易な事ではなかつた。それが今度實現せらるゝやうになつたのは、全く此の戦争に於て奧太利が敗北した結果である。それに付て

此の方面に於ける大戦争の経過を少し簡単に申して置く必要がある。千九百十四年七月廿八日の塞耳比亞と埃太利間に戦争が開始され、ベルグラード攻撃が行はれたのであるが若し今度の戦争が此の兩國間の戦争で終つたならば、無論塞耳比亞は埃太利の爲に全く滅亡されるか或は土地を削られて困難な地位に立つてあらうが、御承知の如く此の戦争が開始されてから一週間ばかりの間に、戦争は歐羅巴全體に擴大され、埃太利は塞耳比亞方面にのみ全力を傾注することが出来なくなり北方にも兵を送り露西亞方面に備へなければならぬことになつたから、翌年の秋頃までに埃太利軍は三度塞耳比亞の方面へ侵入を企てたけれども、塞國は國の西北隅を占領せられたのみで、中部以南は保全されて居つた。所が戦役の第二年千九百十五年の八月となつて、獨逸ヒンデンブルグの作戰計畫が功を奏し、北方諸方面は悉く獨、埃軍の占領する所となつた。さうして露軍は遠く東方に退却することゝなつた。

(一一) 獨埃軍の殺到——バルカン占領

そこで埃太利も獨逸も此の方面に多少の餘裕を生じたから、今度は巴爾幹方面に向つて大に力を注ぐことになつた。而して千九百十五年の十月からマツケンセンが優勢な軍を率ひてベルグラードから

塞耳比亞、黒山の方へ攻め込むことゝなつた。此時既に勃牙利は獨埃側となつて居たので、勃牙利は東から塞耳比亞に攻め込み、北の方から獨、埃軍が攻め込んだので、千九百十五年十月から塞耳比亞は非常な苦境に陥り、實に有らん限りの力を費して奮戦力闘したのであるが、衆寡敵せず、且つ戦ひ且つ退き、國民は名狀すべからざる慘禍を被ひり、十二月に至つて塞耳比亞は殆ど全部獨、埃軍に占領されて了つた。塞耳比亞國王のピーター王はコルフ島のコルフ市に蒙塵し、塞國政府は、そこに辛くも命脈を保つて居たが、本國は悉く敵軍の蹂躪する所となつた。されど塞耳比亞人、クロアチヤ人黒山國の南スラヴ人等の意氣は斯の如き困難の際に於ても萎靡せず、コルフ島に假政府を樹て、居る間に此の戦争が獨、埃側の敗北に終つた。此の機會に於て、豫て吾々の理想として居る南スラヴ國ユーゴスラヴィヤ國を是非打ち立てやうと云ふ決心が益々堅固になつて來た。併し其の當時に於ては殆ど夢のやうな考へで、本國は悉く獨埃軍に蹂躪せられ、其の占領する所となり、僅に小きコルフ島に餘命を保つて居ると云ふ際に、斯の如き雄大な計畫を起したのである。それが遂に實現して今日見るやうな面積約十萬方里、人口約一千萬のユーゴスラヴィヤ國が新たに地圖の上に描き出さるゝやうになつた。實に不思議なる運命といふべきである。是も塞耳比亞人が意氣地なして、本國が蹂躪され占領せられた上は、もう到底奈何ともなす能はずと挫折して了つたら出来なかつたのであるが、

どんな困難に際しても、如何なる苦難に陥るとも、どこまでもやらうといふ塞耳比亞人、南スラヴ人の強健なる意氣が、此の大なる國家を産み出すに至つた。次にお話するチエツコ、スロヴァキヤ民族に於ても同様敬服すべき點はあるが、是等の事は諸君が教授せらるゝ方に、大に力説せらるゝ價值あるものと思ふ。

(一二) 米國の參戰とユーゴスラヴの努力

千九百十七年二月に至り、それまで中立であつた亞米利加が獨逸に對し國交を斷絶し、四月六日となつて愈々宣戰の布告をした。此の亞米利加の斷交並に宣戰と云ふことは、聯合諸國が非常に歓迎し心から喜んだ事である。そこで英吉利、佛蘭西を始め聯合諸國は何れも使節を米國へ派遣し、米國に敬意を表し、感謝の意を表した。此時僅にコルフ島に餘命を保つて居た塞耳比亞政府が、他の諸國と同様に亞米利加へ使節を送り、而して亞米利加に大に依頼する所があり、又亞米利加に對して故國の窮狀を訴へて同情を求め、或は亞米利加に在住して居る塞耳比亞人を悉く驅り立て、さうして本國へ出征させると云ふ事をやつたのは注目し値ひする。此時ゲエスツニチと云ふ人が使節となつて、千九百十八年の一月に華盛頓に着いて、それ等の目的を達し、塞耳比亞人、クロアチヤ人、南スラヴ人

等の亞米利加に在住して居るものから、總體で二萬人以上の壯丁を選び出し、船に載せて本國に向はせ英佛聯合軍に加はつて戦線に立たせた。其當時斯様な事をするのは容易ではないが、其處に塞耳比亞人の意氣が現れて居る。それと同時に亞米利加の主なる人士に向つて非常にプロバガンダをやり、大に同情を得て物質的にも大なる救助を仰いで居る。

(一三) 『コルフの宣言』

一方コルフに於ては千九百十七年七月七日に塞耳比亞首相のバシツチと云ふ人が、所謂『コルフの宣言』と云ふものを發して居る。其の一節を讀んで見ると、冒頭には『塞耳比亞人、クロアチヤ人及スロヴェニヤ人及スロヴェニヤ人即ち一にユーゴスラヴの名を以て知らるゝ民族の國は、自由且つ獨立の王國たるべく分割すべからざる領土と權力の統一を有すべし。此國は立憲民主的にして議會を有する王國たるべく、國民的自由及意思を何よりも尊重せんとする國民の理想及感情を常に國民と共有せしカラゲオルゲヴィツチ王朝を其元首に戴くべし、云々』とある。此の宣言の終りには又『平和條約締結後に於て樹てらるゝ國の憲法は直接、秘密一般投票（普通選舉）に依りて選舉せらるべき憲法制定議會に於て定めらるべきものであつて、此の憲法が國家生命の基本たるべきなり（中略）此憲

法は憲法制定議會の多數に由りて其の全體に於て採用せられざるべからず。而して憲法制定議會に於て通過せられたる他の一切の法律は國王の裁可以前に效力を有せざるべし。斯くして統一したる國民は千二百萬の人口を有する國家を形成する」とある。是が千九百十七年七月に發せられたコルフ宣言の要點である。即ち斯様な精神を以て出來た國家である。カラゲオルゲヴィツチ王朝を以てユーゴスラヴィヤの君主に仰ぐと云ふのであるから其の自然の結果として、黒山國國王は廢されなければならぬ。國王のニコラスは不平であつたが致し方がない。黒山王朝が亡びてカラゲオルゲヴィツチ王朝が、新ユーゴスラヴィヤに君臨した次第である。

(一四) 塊洪敵國の羅馬議會

其の翌年の四月羅馬に於て塊太利、洪牙利を敵として居る諸國の代表者の會議が開かれた。塊洪國を敵として居る國と云ふと、塞耳比亞、黒山國は勿論、其の當時未だ獨立しては居らぬけれども、北の方のチエツコスロヴァキヤ、伊太利等の國々である。皆な代表者を出して羅馬で會議を開いた。其の時の決議の中には、ユーゴスラヴィヤの國民の統一と獨立と云ふことは伊太利に對して最も重要な利害關係を存する所である。領土上の係争は民族主義に依りて親交的に確定せらるべし。伊太利とユー

ゴスラヴ兩國は最も重要な利害關係あり、其利害關係は媾和會議に於て十分考慮せられなければならぬと云ふことが書いてあつた。其の當時は未だ塊太利洪牙利がなか／＼勢力があつたので、之を共同の敵として撃ち破らなければならぬと云ふ事から、ユーゴスラヴィヤと伊太利の關係は、極めて親密になつて居つた。所が一度休戦となり媾和會議となると、伊太利とユーゴスラヴィヤとの間に非常な反目が起つて來た。所謂フィウメ問題が起り來て、今日まで尙ほそれが未解決になつて居る。

(一五) フィウメ問題の起源

フィウメの起源を知るには、開戦の翌年即ち千九百十五年の四月二十六日、英、佛、伊、露の四箇國で結ばれた倫敦秘密條約を説かなければならぬ。此の倫敦條約を説く爲には、伊太利の建國當時の事を一寸述べなければならぬ。伊太利は千八百六十一年に從來四分五裂であつたが略々統一して今の伊太利王國が出來た。其當時伊太利人の住んで居る地方で新らしく出來た王國の中に入らぬものがチロールを初めイストリヤ、ダルマチヤ等であつて、此等の地方は伊太利民族が多數住んで居る地方である。それで伊太利は將來是非是等伊太利人の住んで居る地方を伊太利に取込んで仕舞はなければ伊太利の民族的統一が十分でない」と云ふことになつて居つた。さて今度の戦争開始以來最初伊太利は中立

であつた。一體三國同盟から云へば、即ち伊太利、奥太利、獨逸の間には豫て同盟があるが故に、伊太利が起つて獨逸を助けるのが當然の事のやうに思はれるが、三國同盟の出來た當時と戦争の開始された時とは歐羅巴の國際關係が非常に變じて居る。伊太利と佛蘭西は非常に親しくなつて居たのである。伊太利はまた、英佛露の三國協商側には入つては居らぬけれども其方へ足は踏込んで居ると云ふ有様である。さう云ふ譯で伊太利は獨逸、奥太利側には參加しない。そこで獨逸側の最も望む所は戦争の終るまで伊太利に中立を守らせやうと云ふことであつた。之に對して聯合側は是非伊太利を自分の方へ引きつけやうと云ふ運動が盛んに起つた。當時伊太利には親獨逸の政治家も居り國民中にも親獨派が随分居る。それに依て伊太利をどこまでも中立に置くことが出來ると思つて努力した。就中當時羅馬駐劄獨逸大使ビュロー伯などは大に努力した。それはどう云ふ風に努力したかと云ふと、豫て伊太利が自分の領土に取入れやうと希望して居る地方が奥領内にあるから、其の希望を出來るだけ満足させて、伊太利をして長く中立を守らせやうとした。所が伊太利の要求する地方は奥太利洪牙利の有する地方である。奥太利洪牙利は獨逸の同盟國であつて、同盟國の土地を削りて伊太利に與へ、而して中立を守らせることは、獨逸としては甚だ心苦しいことである。されど伊太利をして中立せしめるには已むを得ないと云ふので、獨逸が伊太利と奥太利の中間に立ち、千九百十五年の四月初旬に伊太

利の方から要求條件を出さしめたが、奥太利は十分讓歩する所があつたけれども要求の全部は之を容れなかつたので、伊太利の方では甚だ不平であつた。さう云ふことで中立を守ると云ふ束縛を受くることは出來ぬから、是非聯合軍に投じ獨逸と戦争して、此の機會に豫て望むイルレデンタを取ると云ふ論が盛んになつた。併し一方それに反對する親獨派の人々があつて、實は最後まで伊太利の國論は一定しなかつたのである。

(一六) 一九一五年の倫敦秘密條約

其の場合に前に申した如く英、佛、露の三國が伊太利と相談して四月二十六日に倫敦で秘密條約を締結した。是には佛蘭西のデルカッセなども随分盡力して居るが、互に嚴重に其の秘密を守ると云ふ申合せであつた。此の秘密條約の結果から伊太利は遂に立つて、五月下旬に聯合國側に入るこゝなつた。此の條約は非常に秘密にしてあつて、全く世間に知れなかつたのである。所が戦争の全く終熄せざる以前に、此の秘密條約が分つて來た。それは千九百十七年に露國の革命が起り、最初はロマノフ朝時代の國交書類、條約等は秘密にして置たのであるが、其の年の十一月ケレンスキーが失脚してレニン、トロツキーの過激派政府が立ち、政權を握るやうになつてから、條約の秘密などは一切公開

することとなり、無線電信で此の千九百十五年四月二十六日の倫敦秘密協約を發表して了つた。それに依ると豫て想像されて居た如く、トレンチノ地方、イストリヤ半島の大部分、尙ほダルマチヤの北方及其前面の島嶼、希臘の東方の島嶼、斯様な土地を戦後伊太利に割譲することになつて居た。詰り伊太利イルレデンタの大部分は此の協約に依て、戦後伊太利が取ると云ふことになつて居る。次に注意すべきことは、其の秘密協約の中にクロアチヤからダルマチヤに到る間の海岸はユーゴスラヴィヤ、クロアチヤ等の爲に保留することになつて居る。問題のフィウメも、其保留さるゝ一部として伊太利に遣らないと云ふことになつて居る。是が媾和會議に於て大問題を惹起した所以である。斯くて伊太利は聯合軍に加はり獨、塊も戦争して千九百十八年十一月に休戦となるや否や、伊太利は直に此のフィウメを占領して了つた。是は全く倫敦秘密協約の明文に背いた行爲であつて、ユーゴスラヴィヤは之に對して非常に不平である。

(一七) 米^(山)とフィウメ

所で亞米利加のウイルソンはユーゴスラヴィヤの熱心なる味方であつて、伊太利をどこまでも抑へつける方針を取つた。ウイルソンがなぜ左まで熱心にユーゴスラヴィヤを援助する考になつたかと云

ふことに付ては、所謂ウイルソン教書の十四箇條の中に第二條に、世界各國民は戦時と平時とを問はず自分の有して居る領海外との交通は絶対に自由でなければならぬ、と云ふことがある。即ち日本で海洋自由と言ふて居る點である。此の海洋自由とは或る一國が絶対に大なる制海權を有し戦時、平時に於て他の交通を妨碍せぬやうにと云ふのが目的である。それと聯關して或る一國が海への出口を有さないと云ふことは甚だ不法なことである、故に何等かの方法で、何れの國民も必ず海を利用することが出来るやうに出来るだけしなければならぬと云ふのが、海洋自由に聯關した思想である。其點から見てフィウメは新たに建國したユーゴスラヴィヤ國の自然の門戸であつて伊太利が之を取ると云ふことは甚だ不法であると云ふのが海洋自由に聯關した思想から來る自然の結論である。

(一八) 伊太利、ユーゴスラヴィヤのフィウメ

兩國要求の論據

之に對する伊太利の主張の中には斯う云ふことがある。フィウメの町には伊太利人が二萬四千二百十二人居る。然るにスラヴ人は一萬五千六百八十七人である故に民族自決主義上フィウメは當然伊太利に屬すべきであると云ふ。此統計は現在とは少し違て居て、千九百十年に奧太利洪牙利政府の發表

した統計であるが、兎に角是が伊太利側の主張の一である。此の點に就てユーゴースラヴィヤ方では、成程フィウメの市其ものだけに就てはさうであるが、フィウメに接続したるスシヤクの方を合せると左様ではない。スシヤクもフィウメの一部と見るべき市であつて、何所までがフィウメで、何所からかスシヤクか境界も分らぬ位であるが、スシヤクの方には、伊太利人の數は六百五十八人より居らぬ。スラヴの方は一萬千七百六人居る。そこで此の二つの市を一つと見て勘定すると、伊太利人が二萬四千八百七十人、スラヴ人は二萬七千三百九十三人も居る。詰り二千五百人許りスラヴ人の方が多い。故に民族自決といふ上から當然フィウメは伊太利に屬すべきものでないと云ふのがユーゴースラヴィヤの主張である。所で伊太利の方から言ふと、ユーゴースラヴィヤは必らずしもフィウメを取らぬでも其他に港もあるから門戸を塞ぐことにはならぬと言ふ。ユーゴースラヴィヤの方では、他の港はフィウメに比して港としての天然の價値に乏しいのみならず、港としての設備が缺けて居り、内地との鐵道の聯絡もないから、鐵道の聯絡をつけ、港としての設備等、色々大事業を起さなければならぬ。それは新らしく生れたユーゴースラヴィヤ國には出來ない相談である。故に是非フィウメは自分の方へ貰はなければならぬと主張する。伊太利の方ではもう一つ斯う云ふことを云ふ。フィウメの港はトリエストの港と共に、戦前に於て奧太利の港であつたのみならず、獨逸が盛んに此の港を利用して商賣をして

居る。今後敵國の獨逸、奧太利が再び頭を擡げ聯合國に對して復讐戦を起すことの無いやうにするには此の港を再び兩國が利用することの出來ないやうにしなければ危険である。伊太利が之を有し、確實に保持して行かなければならぬと云ふ。

(一九) 伊國委員の媾和會議脫退事情

そこで問題が非常に紛糾して來たので、ウイルソンが四月十四日頃に一の覺書を作つて伊太利の首相オルランドに送つた。それに依るとウイルソンは、自分の判斷する所ではフィウメ若くは其の以南の如何なる部分と雖も伊太利に與へると云ふ相當の理由を發見することが出來ぬ。是等の地方は新たに起つたユーゴースラヴィヤに屬すべきものであると云ふ覺書を送つた。さうして四月二十三日に至り長い意見書を書いて之を巴里の新聞で發表した。其の趣意は前にオルランドに送つた覺書と大同小異で、此所はユーゴースラヴィヤが有すべき自然の門戸であることを力説したものである。今一つは倫敦の秘密協約は破棄すべきものであると、ウイルソンは言ふて居る。而して民族自決に依て彼に此の門戸を與へると云ふことは米國の義務と考へる。之を伊太利が取る儘に放任して置くことは出來ぬと云ふ意味を新聞に書いて出した。是が伊太利のオルランドを怒らした所以で、聯合會議の上で言ふべ

き事があれば直接に言ふが宜い。豫め打合せもせず人を出し抜いて新聞に出すなどは今まで例の無いことである。斯様な會議に出るのは御免を蒙ると言ふて伊太利委員が巴里會議から脱退したのは斯様な次第からであつた。伊太利の國民は非常に此のオルランドの處置を歓迎した。オルランドが本國に着するや周圍を取巻いて群集は歡呼の聲を放つた。直にオルランドは議會に立つて自分の主張にはユーゴスラヴィヤは勿論、英佛も反對である。米國は固より反對である。是は自分の考が間違つて居るか、他の主張が間違つて居るか、國民の輿論に訴へやうと思ふて歸つて來たのであるから、信任投票をやつて呉れと云ふて、それをやつてみると、三百八十二に對する四十票の大多數に依てオルランドの信任決議をした。此の四十票は社會黨が入れたものである。此時は丁度日本の山東問題が出て居て、此フィウメ問題紛擾伊國委員の會議脱退の爲に、我國の委員は便宜を得たと云ふやうな話もあるが、それは事實の有無を保障する限りではない。英佛兩國は大に心配して仲裁の勞を執つたのであるが、伊太利國民の米國に對する反感は非常なもので、ウイルソンを倒せと絶叫するに至つた。前年の暮から此年の首めにかけてウイルソンが伊太利を訪ふた時の歡迎は殆ど熱狂的であつたが、僅三四月の後には、それがウイルソンを倒せと云ふ絶叫に變じた。斯くて遂に獨逸に對する平和條約も六月二十八日に調印を終つたものの、此の問題は今日まで依然未解決のままに残つて居る。

(110) ダヌンチオのフィウメ占領

其後九月に至りて、文豪飛行家ダヌンチオは、手兵を率ゐてフィウメ市を占領し、今日でも其處で威張つて居る。是は伊太利國民からは非常な壯舉として歡迎され、ガリバルディーがジェノア港から義勇兵を率ゐて出帆しシシリ島や、南伊太利を征服した壯舉とも比すべきものとして歡迎したが、伊太利政府としては甚だ困つたので、御前會議を開いたり色々な事をやつて、ダヌンチオを呼戻さうとしたが、ダヌンチオは非常な決心で、死すとも一步も此處は退かぬと言つて、フィウメの後方の高地で、景色の好き土地を自分の墓地に買ひ求め、此處に埋まる決心をしてゐる。政府から軍艦を差向けると自分は搭乗し軍艦の上を旋回し、多くの宣言書を撒き散らして居る。畢竟ダヌンチオは、フィウメはどうしても伊太利の領土としなければならぬと云ふ考へである。結局此の問題は如何に成り行くかわからぬけれども、右に説く所に依て民族的精神と云ふものが如何力強きものであるかその精神に基いて發し來る民族的利害の衝突、國家的利害の衝突の前には、正義を基とする、高遠なる理想から出發した努力も、如何に大なる障礙に逢ふかと云ふことを示して居ると思ふ。國際聯盟等の手段に依つて世界の平和を永久に維持することは極めて望ましい事であるが、それと同時に昔から傳はりたる民

族的反感が始終妨害すると云ふことを充分考慮しなければならぬことが此等の事實に依ても分ると思ふ。

(二一) 奥匈國の分裂とチエツコスロヴァキヤの新興

次にチエツコスロヴァキヤの御話を申し上げます。之に付ては今度の戦争で全く崩壊した奥匈國の事を一言しなければならぬ。我邦の如き民族的結合の完全なる國にあつては、殆ど想像も及ばぬことであるが歐羅巴諸國の中には随分多種多様の異民族を抱擁した國家がある。露西亞の如きも其一つであるが其人種雜駁なる點に於て奥匈國は他の國に例を見ない國である。斯の如く人種の雜駁なる國に於ては、十九世期以來殊に盛んになつた民族主義の結果として、其國が絶えず分裂したいと云ふ傾向を持つて居るのである。同一民族が數多の國家に分れて居る場合は、其れが併合して一つの國家にならうとする傾向を持つ。千八百七十一年に獨逸帝國が出来たのは、即ち分裂した民族が併合した例である。千八百六十一年に伊太利の統一したのも、矢張り同じに屬する。奥匈國の如く一つの國家に澤山の民族が抱擁されて居る場合には、其れが分裂して澤山の國にならうと云ふ傾向を絶えず持つて居るので、此の奥匈國の分裂が早晚避くべからざることであると云ふことは、久しい前からの識者の見る所

であつた。此度の戦争前に於ても既に或る程度迄其分裂が出来て居つた。奥太利の皇室ハプスブルグ家が持つて居た奥匈國は、千八百六十七年以來奥匈國に分れて居つた。唯此二國は同盟聯邦で同じくハプスブルグ家を戴いて居つた。君主は同じでも議會と政府は別々に持つて居た。併しながら軍事と外交とは兩國共通にやると云ふ極めて不完全な分れ方であるから、これでは未だ民族主義は徹底しない。所が今度の戦争で奥太利は獨逸と共に敗れたので、奥匈國は五三一頁の地圖に示した通りに分れてしまつた。斯くの如き何處にも認める事が出来ない。あれだけの大きな國が、圖の如き小さなものに成つて了つた。其分裂の仕方が民族主義から來て居ると云ふことは此圖と比較して見ると略々分るのである大體民族の分布と今度の分裂の仕方とは一致して居る。其の分裂した一つが今お話するチエツコスロヴァキヤである。

(二二) チエツコスロヴァキヤの民族

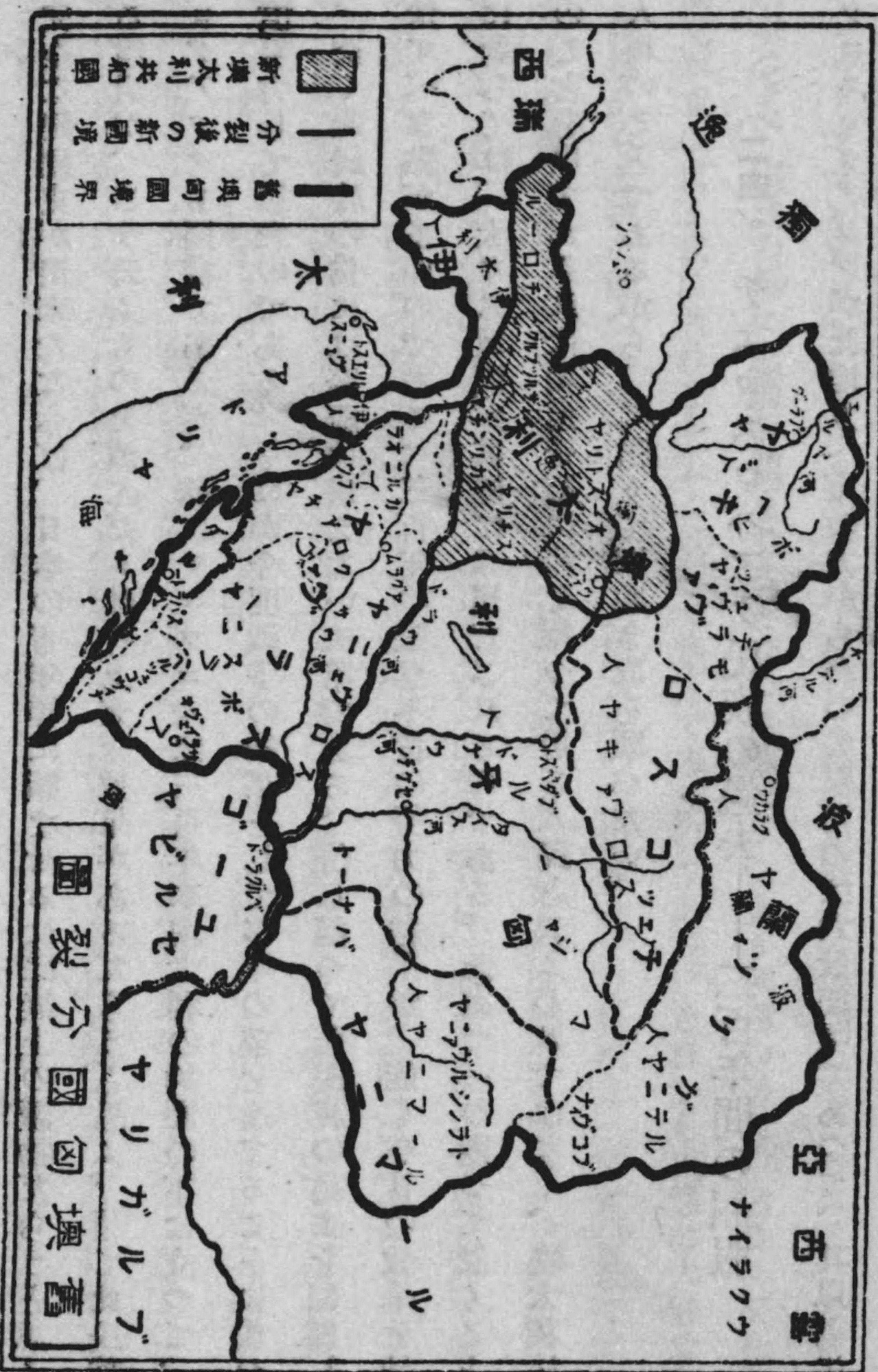
チエツコスロヴァキヤと云ふ國名はチエツヒ人とスロヴァキヤ人と云ふ二つの民族が合して出來た國の名であつて西の方では主としてチエツヒ人が住まつて居る。又其東の方にスロヴァックと云ふ民族が住んで居る。此二つは血縁の近い民族であり何方もスラヴ種である。前に南スラヴの事を話した

がチエツコスロヴァキヤは、南スラヴに對して西スラヴと云ふ。スラヴの本家は露西亞である。今度出來たチエツコスロヴァキヤ國は東の方の洪牙利との境は未だ國境が確定して居らぬが先づ大體四つの部分から成立つて居る。其は舊埃太利の一部のボヘミヤ地方と其東のモラヴィヤの地方、それから埃太利領のシレシヤその北の方には獨逸領のシレシヤがありすが、其南の方の埃太利領のシレシヤそれから其東の舊洪牙利領中スロヴァツク人の住んで居た地方、これだけのものが合して、チエツコスロヴァキヤ國と云ふものが出來たのである。併し先刻申した通り、洪牙利との國境は未だ確定して居らぬから、此の國の全面積ははつきり分らないが、先づ大體二萬五千方哩から四千方哩位に成ると想像して居る。これをユーゴスラヴィヤ國に比べると、面積は半分以下である。併しながら人口は略々南スラヴと同じ位で約千二百萬人もあらうと思ふ。一般の文化の程度、産業の進歩、物資の豊富な點等から云ふと、南スラヴに比べて、チエツコスロヴァキヤの方が非常に優れて居る。又波蘭に比べてもチエツコスロヴァキヤの方が前途有望な國だと思ふ。

(二三) 小説以上の冒險

併て此度の戦争で此國が獨立するに到つた由來は、實に面白い勇壯な事跡に富んで居る。事實は小

説よりも奇なりと云ふ言葉があるが、此チエツコスロヴァキヤの建國の歴史を考へて見ると、如何なる冒險小説家が想像を逞しうしても、恐らく此位雄大な冒險な小説は出來ないと思ふのである。他日



此國の完全な建國史が出来たならば、日本の青年等に讀ませるには無上の讀物だらうと思ふ。教育に従事する諸君が、さう云ふものを讀んだら教育上充分効果があるだらうと思ふ。偕て此民族はチエツコもスロヴァツクも同様であるが、殊にチエツコ人は三百年來埃太利の抑壓の下に立つて、國家の獨立に發憤努力して居たのである。それが今度戰爭の結果として多年の望を達することに成つたのであるから、全く此民族の爲には慶祝に堪えない次第である。併し翻つて此民族の過去を回顧して見ると随分同情すべき點が多いのである。三百年の堅忍不拔の努力の結果が、能く今日の効果を結んだと云ふことに對しては、大なる教訓が見出だされるのである。此處で一つ斷つて置くことは是から獨逸人のことを申すがそれは獨逸帝國に籍を持つて居る人民と云ふわけではなく、埃太利に住んで居る獨逸人種のことであるから、其積りて御聽き取を願ひたい。

(二四) チエコスロバアク民族の過去——二百年間の屈服

チエツコスロヴァツクが此地方へ東の方から移つて來たのは六世紀頃であつて、其以前には此處に獨逸種の者が居つた。其處へ東の方からやつて來て、獨逸種を驅逐して此地方を占領した。然るに其後獨逸帝國が段々盛んになつて東の方へ侵入して來るやうになつた。それで西紀九世紀に獨逸種のフ

ランク王國が段々境域を擴めて來てチエツコスロヴァツクの地方をも征服した。然し此處はフランク王國の一番東の端であつて、フランク王國の統治權が十分及んで居なかつたので、或る時代にはチエツコスロヴァツクが獨立した時代もあつた。併し又獨逸が盛んに興つて來た時には、忠實なる獨逸の屬國になつて、獨逸の爲に忠勤を擡んと云ふ次第で、つまり獨逸の勢力の消長に反比例して、民族の獨立が或は成り或は敗れると云ふ状態で進んで來たのである。それから獨逸に大層忠勤を擡てた爲に、獨逸から王號を賜つてボヘミヤ王國と云ふものが出來た。それが十一世紀の後半である。此稱號はずつと其後迄續いて居て、最近に埃太利が分裂する迄其名稱は残つて居つた。併ながら獨立の實は毫も無く、全く埃太利の一部になつて居たのである。昔は一時ボヘミヤ王國が中々盛んになつたことがあつて、十三世紀の後半にオットカール二世と云ふ人が國王の時には此ボヘミヤから段々南方を攻め取つて、一時アドリヤ海岸に達する迄、領土を擴めたことがある。然るに埃太利のルードルフと云ふ人が、千二百七十三年に獨逸皇帝になつてから、ボヘミヤ人がルードルフの獨逸皇帝たることを承認しなかつた爲に、埃太利とチエツヒ人との間に戰爭が始まつて、オットカールは二度も戰爭して遂に敗れて死んだ。それが爲に一旦南方アドリヤ海岸まで延びた領土が、急に狭くなつて、復た舊領土に限られることになつた。それが十三世紀の末である。其後土耳其が東の方から段々侵入して

来て、十六世紀の初め頃は、土耳其と盛んに戦争をした時代であつた。土耳其軍が舊埃洪國の領地へ段々侵入して来て、ウィーンの町を圍むまでやつて来た。千五百二十六年にモハツチと云ふ所で、基督教徒の聯合軍が土耳其軍と戦つた。其時ボヘミヤの國王が討死をして、それからボヘミヤが衰へて埃太利の屬國のやうになつたけれども、全く獨立を失つたのでない、自治權は與へられて居た。其後ヨハンリ・フスと云ふ神學者が出て、當時の基督教會が非常に俗化し腐敗して居るのを廓清する爲に宗教改革を唱へた。マルチン・ルーテルの先驅を爲した人であるが、其當時は改革の氣運が熟して居なかつた爲に、コンスタンツの宗教會議に於て、之は邪教徒である、異端者であると云つて燒殺されてしまつた。其ヨハンリ・フスの宗教改革は、一面に於て宗教界の廓清を目的とし、一方には國民的戦争を起してチエツヒ人の政治的獨立を恢復しやうと云ふ目的であつた。所が遂に失敗してしまつたのである。然しヨハンリ・フスの熱心な信者が出来、後にヨハンリ・フスと同じ考でマルチン・ルーテルが出て来て、獨逸に於て宗教改革を始めた。其時には氣運が熟して居たから、非常な勢で新教が擴まつた。それでボヘミヤからヨハンリ・フスが早く出たと云ふ關係から、其地方は直ぐに新教に改宗して、新教の地方になつたのである。然るに其頃歴代の獨逸皇帝を出して居た埃太利のハプスブルグ家が勢心な舊教の信者である爲に、自分の領地内のボヘミヤ地方に對して強制的に舊教を奉ぜしめ、應じない

者には迫害を加へると云ふ次第で、それが爲にハプスブルグ家に對するボヘミヤ人の憤慨が甚だ強くなつた。其等の關係から千六百十八年に三十年戦争と云ふものが始まり、三十年間獨逸を二分した大戦争が起つたのである。其戦争が起つた第三年目、即ち千六百二十年で、今年は千九百二十年であるから、チエツコスロヴァクは丁度三百年目で民族的獨立を恢復したことになる其後ボヘミヤ地方に對する埃太利の態度は、時の政府の政策に依て寛嚴の度は違ふけれども、先づ大體に於て始終抑へ付けられて居つた。斯様に是も古い時から獨逸帝國の勢力の下に在つた關係から、言語風俗習慣等が餘程獨逸化されて居る。殊に都會の上流社會は殆ど獨逸化されて居つた。

(二五) 民族主義の勃興とチエツコスロヴァクの覺醒

然るに十九世紀になつてから民族主義が彼方にも此方にも起り、同じ潮流がボヘミヤ地方にも盛んに起つて来た。是迄埃太利の獨逸人種の支配の下に立つて居た民族が、民族的自覺の結果、民族的獨立をせやうと云ふ精神が非常に燃え立つて来たのである。併ながら中一朝一夕に其目的を達し得られるものではない。そこで先づどう云ふ方面から民族的自覺の精神が起つて来たかと云ふと、學術文藝の方面に段々に獨立の徵候が現はれて来たのである。それは先づチエツコ語の研究から始まつた。元

來ボヘミヤ地方は永年獨逸の支配の下に在つた結果文章は獨逸語に限ることになつて居た。然るにチエツヒ語を言語學的に研究して、其價値を明かにし、さうして活ける言葉として文章にも用ひると云ふことになつた。ドブロヴスキと云ふ人がスラヴの言語學の創立者と云ふことになつて居る。此人が千八百二十六年に『スラヴ語の原則』と云ふ書を出して、それからスラヴ語の研究が起つて來た。千八百三十四年から三十九年に掛けてユングマンと云ふ人のチエツヒ語の辭書が始めて出來た。それから愛國詩人のコラーと云ふ人が、千八百二十四年に『スラヴの娘』と云ふ詩を拵えて居る。それからスロヴァック人のカヴァリツクと云ふ人が『スラヴの考古學』を著はした。それからバラツキと云ふ愛國的歴史家が『チエツヒ國民史』と云ふ書を著はした。斯う云ふ風にチエツヒの研究が起つて來たので、是迄塵だらけになつて居た古いチエツヒ語で書いた書物を、頻りに探出して翻刻する。而してそれを研究する風が盛んになつて來てチエツヒ人の國民的自覺を進める上に大變効果があつたのである。斯様にチエツヒ語の著述も出來たのであるが、中々官用語として用ゐられることにはならぬ。民間では使ふけれども、役所がチエツヒ語で書類を作ると云ふ迄には進んで來なかつたのである。所が千八百八十年にターフェーと云ふ人が奧太利の總理大臣をやつて居つた時に、此言語の上の束縛を破つて獨逸語でもチエツヒ語でも其當事者次第で用ゐても宜しいと云ふことに改めた。役所へ

出す書類でも、出す人がチエツヒ人であれば、チエツヒ語で書いても宜しい。又獨逸人ならば獨逸語で出せと云ふことにした。是がチエツヒの自信を高め、社會上政治上に大に向上する機會を作つたのである。さう云ふやうにチエツヒ語が官用語として認められることになれば、官吏なるものは、チエツヒ語も獨逸語も兩方出來る人が都合が好い。所がボヘミヤ地方では、獨逸人がチエツヒ人より少ないのに、役人は大部分獨逸人がなつて居たのであるが、今のやうに兩方の言葉を使つて宜いと云ふことになると、兩方の言葉を操る人が、官吏として適當である。所が獨逸人はチエツヒ語を輕蔑してやらない。然るにチエツヒ人の方は獨逸語を知らない者は無い。そこで官吏でも裁判官でもチエツヒ人の方が都合が好くなつた。そこで千八百八十二年にチエツヒ語のみを以て教育する大學がボヘミヤの首府プラハに出來た。從來あつたプラハ大學と云ふのは、歷史上歐羅巴の中でも古い方であつて獨逸の文化を代表する大學の一であるが、之に對して新しく出來た大學は、總てチエツヒ語で教育する。さう云ふ大學が出來た爲に、今度は其大學へ入る學生の爲に専らチエツヒ語で教育する高等學校がボヘミヤの各地に出來た。それで獨逸のお蔭を蒙らないチエツヒの學術の進歩が是から著しくなつて來た。之に對してボヘミヤ地方の獨逸種の間人は非常な反感を持つて居る。然るに此地方の人口増加率を見るとチエツヒの増加率が、獨逸人よりも多く、段々獨逸人を壓迫する傾向になつて來る。隨

つて益々獨逸人の反感が激しくなつて衝突が屢々起ると云ふ有様になつたので、千八百九十幾年かに
奥大利政府も何とか之を融和しなければいかぬと、所謂ポヘミヤ協調なるものを行つた。各役所に獨
逸部とチエツヒ部と二つの部を設けて、裁判所でも二部に分けてやると云ふ一の便法を講じたのであ
るが、此ポヘミヤ協調も餘り効果を奏しなかつたのである。今度の戦争勃發迄兩種の反目は中々盛ん
であつた。ブラーグの市へ行つて見ると、何でも二通り宛ある。大學も獨逸人の行く大學とチエツヒ
人の行く大學と二つあつて、學術に國境無しと申しますが、ブラーグの狭い市にある二つの大學は、
共に學術の進歩に努力して居る大學でありながら此二校の教授連は往來もしなければ全く交渉が無い
非常に反目して居る。學生などは時々デモンストレーションをやつて、途中で衝突して大喧嘩をや
る。劇場の如きも獨逸人の行く劇場とチエツヒ人の行く劇場と分れて居る。飯を喰ひに行つても、獨
逸人の行くレストランとチエツヒ人の行くレストランとは別々になつて居る。私はチエツヒのレスト
ランへ入つて註文書が分らないで困つたことがある。もう一つ困ることには此所で電車へ乗らうとす
ると、電車は行先がチエツヒ語で書いてあるから分らない。車掌で獨逸語の話せない者は無いけれど
も敵愾心で話さない。吾々は外國人だから獨逸語で話して呉れと云ふと、結構教へて呉れる。さう云
ふ状態であつた。

(二六) 大戦の勃發——乾坤一擲の冒險

そこへ今度の大戦争が始つた。其爲にチエツヒ人とスロヴァツク人とで軍隊に召集されたる者が少
くとも六十萬人あつたといふことである。さうして獨逸と聯合して東方の露西亞と對抗する運命にな
つた。所が露西亞はスラヴ種でチエツコスロヴァツクもスラヴ種である。さうして獨逸に對しては始
終反感を持つて居る。其獨逸人種の命令の下に、同人種たる露西亞と戦を交へて戦ふと云ふことは、
チエツコスロヴァツク人として到底忍び得ない所である。そこで六十萬ばかりの中から約半數三十萬
のチエツコスロヴァツクが斷然戦を投じて露西亞に降つた。さうして忠實な聯合軍となつて、是迄自
分達に命令を下して居つた獨逸軍に對して熱心に戦ふことになつた。彼等が續て露軍に降つて行くも
のだから、奥大利の方では非常に残酷な刑を設けて、逃げ損じた奴は片端から殺すと云ふやうな制裁
を加へて、彼等の敵方に降るのを防がうとしたが、却つて反感を起して、三十萬人ばかり露西亞の方
へ降つてしまつた。此三十萬人が斯る困難を忍んで露西亞に降つたと云ふことは非常な冒險である。
なぜかと云ふと戦争の末期になつては、獨逸軍が聯合軍に打勝つことが出来ないことが分つた。其頃
に見切を付けて聯合側へ往くなら冒險にならないけれども、彼等が露軍に降つた當時は、獨逸の勢で

甚だ盛んな時である。其際に斷然獨塊に反いて露軍に降つた。其結果將來どうなるかと考へて見ると假に此戦争が聯合側の勝利に終れば宜いけれども、若し是が獨塊側の勝利に歸すると云ふことになる。戦争は初めに於てチエツヒが敵軍に降つたと云ふことは、非常な冒険であつて、將來何様な目に遭ふか分らない。それこそ未來永勃彼等は浮ぶ瀬が無くなつたであらう。是迄よりもひどい抑壓を受けることは分り切つて居る。聯合軍が勝て殊勝の至りだと云つて、彼等の民族的獨立も出来るであらうが、降つた軍人の家族などは、片端から禁錮して財産を沒收してしまふと云ふやうな制裁をやつて露軍に降るのを防いで居た。それ等に對しては極端な残酷の處刑をやつて脅して居る。さう云ふ嚴しい中で三十萬の人が露西亞に降つたと云ふことは、餘程深い恨みがなければならぬ。其恨みたるや民族的反感である。さうして露軍に降つた者は、忠實な聯合軍の一員となつて獨塊軍に對して奮戦した。又本國に居ては危険であるから、西歐羅巴の方へ逃げ出して往く者も澤山にあつた。或は亞米利加迄逃げて行く者もあつた。戦争の半ば過ぎになつて約二百五十萬のチエツコスロヴァックが外國へ行つて居る。其者は西歐羅巴で軍隊を編制して聯合軍と共に戦つて居り、東へ行つた者は露軍と行動を共にして獨逸軍と戦つた。露西亞のブルシロフ將軍は、千九百十六年の夏露國から西方へ進出して、大分被占領地を恢復した有名な人であるが、此人がチエツコスロヴァック兵を批評して曰く、彼等は勇

敢なる而も忠實なる吾々の仲間である。彼等の戦争に於ける奮闘振を見たら、聯合諸國の國民は、跪いて彼等に禮を述べなければならぬと云ふ位に、ブルシロフ將軍が彼等を譽めたのである。

(二七) 露國革命——世界を一周して西部戰場に立たんとす

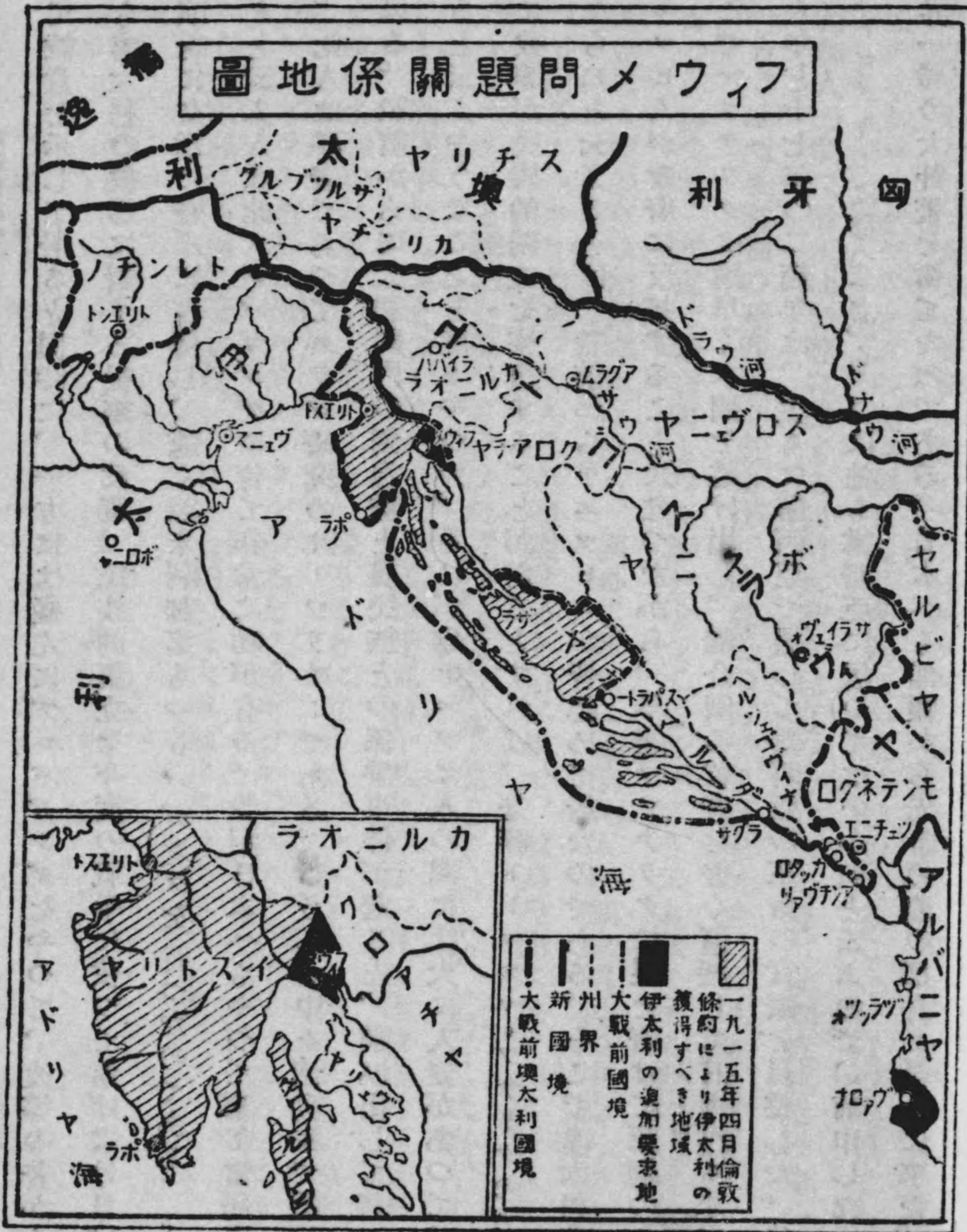
所が千九百十七年に露西亞に革命が起つて、露軍の軍紀が段々に亂れて、將校も士卒も士氣が沮喪して戦争する氣分が薄らいて來た。其間に立つてチエツコスロヴァックのみ依然として前の通り奮戦して居つた。其中に露西亞に過激派が起つてレーニン、トロツキーが政權を取る様になつてから、露軍の旗色が段々悪くなつて、戦争する者が無くなつた。それは過激主義が一般の將校士卒の頭に浸み込んだからである。所が其中に居つてチエツコスロヴァックのみは過激派に染まない。そこで獨逸の方からは頻りに手を廻して、彼等を過激主義に感染させやうと努めたけれども、どうしてもそれが成功しなかつた。其中に千九百十八年三月になつてプレストリトウスクに於て單獨平和條約が露獨兩國間に結ばれて、愈々露西亞は戦争を熄めることになつた。さう成つて來ると、如何にチエツコスロヴァック軍の將士が、心は矢竹に逸つても、自分達だけでは戦争が出来ない。そこで出来ることなら、露西亞の方から西部戰場に飛んで行つて、聯合軍と共に戦ひたいのであるが、其間に敵國の塊太利と獨

逸が挟まつて居るから、露西亞の方から西部戦場に行くことは到底出来ない。そこで露西亞から遙る
 西伯利亞の曠野を過ぎて、浦鹽へ出て、太平洋を渡つて亞米利加大陸を横斷し、もう一つ大西洋
 を渡つて、歐羅巴の西部戦場へ行つて聯合軍と共に戦はうといふ至難なる計畫を立てた。此計畫に付
 ては今日大統領になつて居るマサリックと云ふ人が案をたてた。實に素敵な冒險計畫であります。彼
 等は健氣にも此大膽なる計畫を實行せんとし、歐露から逃げ出して西伯利亞迄やつて來たが、途中過
 激派の爲に喰ひ止められてどうしても浦鹽へ出ることが出来ない。そこでチエツヒ軍援助の爲め日米
 協同して出兵することになつた。此間の議會でもチエツヒ救援の問題に就いて、政府當局者と議員と
 の間に問答があつたが、聯合軍の爲に忠實な軍隊を空しく西伯利亞の野に曝して置くことは忍びぬ。
 之を救はなければならぬと云ふことが、日米出兵の表面の理由である。今日未だ完全に其目的を達し
 ないで、大部チエツヒ軍が西伯利亞の東の方に引つ掛つて居ると云ふ状態である。

(二八) チエツヒ人のプロパガンダーマツサリックの功績

さう云ふ風にチエツヒは露西亞方面に於ては聯合軍の爲に戦ひ、一方には西歐羅巴の方へ逃げ出し
 て行つた連中が、軍隊を編成して、西部戦場に於て忠實に聯合軍の爲に戦つたと云ふことで、聯合軍

圖地係關題問メウィフ



に對して誠意を示して居ると同時に、一方には盛んにプロバガンダをやつて、彼等の昔からの歴史、それから埃太利の彼等に對する從來の政策、民族的獨立を今度の戦争に依つて遂げなければならぬ理由を、演説に文章に盛んに宣傳し、遠く亞米利加迄もプロバガンダを行つたのである。トーマスマッサリックと云ふ人は此プロバガンダに付て非常に功が有る。我が日本へもやつて來て當局者に宣傳をやつた。此人は學者であつてスラヴ研究のオーソリチーである。さうして中々活動家で義侠的精神に富んで居る。戦前から埃太利國內の獨逸種と異民族との係争事件が起ると、飛び出して行つて弱い方を助けると云ふやうなことを度々やつた。それが爲ちエツヒ人の間には大に人望があつて、將來何かの機會に彼等が民族的獨立を恢復することがあるとすれば、是非トーマスマッサリックの力を借りなければならぬと云ふことは、戦前からエツヒ人が皆認めて居たのである。そこで埃太利政府は開戦以來エツヒ人が政府に反抗することになつたから、早速マッサリックに眼を著けて死刑の宣告をした。そこでマッサリックは逸早く本國を逃げ出し、聯合國の首府を普く遍歴して日本へも來て居る。千九百十六年と十七年の二箇年は、主にも露西亞で過して露西亞の革命の實際を目撃した。後政權がレニン、トロツキーに移つてから、是は逆も露西亞に居つてはいかぬと云ふので、前申した通り西伯利横斷世界一周の大計畫を樹てたのである。日本へも浦鹽から先きの船の都合を頼みに來た。それから

千九百十八年には亞米利加合衆國へ渡つてウイルソン大統領を頻りに説いた。さうして彼から大に同情を得てエツコスロヴァツクの獨立對して亞米利加が大に助力することになつたのである。其前から亞米利加人の間に於ては彼等に對する同情が非常に有つたのである。此獨立運動の中心地と成つたのは、一方では亞米利加の華盛頓であるが、歐羅巴の方では巴里にエツコスロヴァツク國民會本部と云ふものがあつて、其處で聯合國との交渉をやつて居る。さう云ふ風にマッサリックが努力をし、又戦前から非常に人望の有つた人であるから、國外に於ては無論此人が獨立運動の中心人物となり、又國內に残つて居るエツヒ人も、此人に萬事委せると云ふ風で、敵國の間に包まれて居りながら、有ゆる方法でマッサリックと聯絡を取つて居つた。それ故戦が済んで此人が本國へ歸れば、直ぐに大統領に選ばれることは戦争中から決まつて居つた。そこで千九百十八年の十一月に休戦條約が出來ると其時マッサリックは亞米利加に居たが、早々本國へ歸ることになつた。マッサリックがブラーグのウイルソンステーション（ブラーグの中央ステーションの名をウエルソン、ステーションと改めた）に着いた時のエツヒ人の歓迎は其極に達した。それから續いて大統領になつたのである。

(二九) ステファアニツクとベネス

チエツコスロヴァツクの獨立に付て擧げなければならぬ人がマツサリクの外に二人ある。それはミラン・ステファニツクと云ふ人とエドワード・ベネスと言ふ人である。此二人はまだマツサリクに比べて年下であるが、ベネスの方はブラトグ大學の教授であつて、マツサリクの弟子である。戦争前迄ブラトグ大學で社會學の講座を擔任して居た人である。此の人は非常に誠實な人で頭腦が非常に明敏で、さうして人に對して極めて穩かな人である。此の人が巴里の獨立運動の中心なるチエツコスロヴァツク國民會本部に詰め切つて居つた。此の人の言説應對が餘程各國の同情を得る爲に効果が有つた事は没すべからざることである。それからミラン・ステファニツクと云ふ人はスロヴァツク人であつて、大學で法律もやり、醫學もやり、其他の科學もやり、百科全書的の學問をやつた中々頭腦の良い人である。それに旅行が好きで、西藏へ行つたこともあり、西印度、南亞米利加の端へ行つたこともある。戦争の起る際は巴里の天文臺へ行つて氣象學の研究をやつて居た。此方で大分成績を擧げて學者として名を成し掛つて居つた。そこへ戦争が始ると中々愛國的精神が強いものだから、直ぐ自分の研究を抛つてどうか戦線に立たせて呉れと云ふことを佛蘭西の陸軍當局者に頼んだ。所が佛蘭西の陸軍當局者が、君は科學には明いだらうが、身體が弱さうだから、其様に危険な戦線部隊へ行かずに、佛蘭西陸軍の氣象學勤務の方をやつたらどうかと云ふことを言つてくれた。併しどうしても言ふ事を

聞かないで、自ら戦線に立つて佛蘭西軍が巴爾幹半島へ出征する時にも從軍した。それから獨逸軍が殺到して英佛軍が塞耳比亞から撤退した時に病院へ入つて佛蘭西の方へ歸つて來た。それからマツサリク流に聯合國の各首府を遍歴して、プロバガンダをやつた。又其間には自ら軍隊を編成して、伊太利の戦線などに出たこともある。以上三人はチエツコスロヴァツクの獨立に付て、最も功績があつたのである。斯の如く聯合諸國から非常な同情を得て居たから、媾和會議以前に既に多くの國は此國の獨立を承認し、日本も早くから之を承認した。

(三〇) チエツコスロヴァキヤ國の前途

所で此國の前途はどうであらうかと云ふことを考へて見ると、南スラヴ、チエツコスロヴァキヤ、波蘭此三つの中でチエツコスロヴァキヤが最も有望であらうと思ふ。其理由は此地方は戦前に於て埃太利の寶庫と言はれて居つた位で、埃太利政府の収入の六割以上は、ボヘミヤ地方から出て居つた。鑛山有り、森林有り、エルベ河、モルダウ河の流域には耕地も可なり廣くある。モラヴィヤの方には耕地が澤山ある。此處の農業と此處の鑛業が埃太利を養つて居たと云つても宜い位である。今後新興國の勢ひを以て是等の事業に盡したならば、屹度榮えるだらうと思ふ。之に反してそれを失つた埃太利

の前途と云ふものは、實に悲惨である。今日何處が歐羅巴の中で一番物資が缺乏して居るかと云ふと、埃太利程困つて居る處は無い。ウィーンの一市の人口を養ふ食物が恐らく残された埃太利の領内では出来まいと思ふ。以前はモラヴィヤ洪牙利地方から入つて來たけれども、洪牙利も獨立してしまつたから、物資の點に於ては埃太利が一番困難である。埃太利人の希望は獨逸と合併すると云ふことにあるが、聯合國が絶対に之を許さない。獨逸が一緒に成ると、獨逸の勢が恢復し過ぎて、何時復讐戦を起すかも知れぬ。さう云ふ危険があるから絶対に許さない。今日の埃太利の慘狀と云ふものは、全然饑饉の如く、餓卒路に滿つと云ふ状態になつて居る敵國であるけれども、人道の上から亞米利加が骨を折つて、殊に兒童が一番可哀想だと言ふので兒童に食物を與へる所を埃太利の諸處に開いて居る。是も毎日三食喰はせると大變だから、毎日一食宛粥のやうな物を喰はせて居る。亞米利加の飛行家がウィーンを通つた記事を此間讀んで見たが、實にひどいものである。汽車がウィーンの停車場へ着いて客が降りて來ると、停車場前に瘦せ衰へた子供が澤山居つて、どうか麵麩を下さいと云つてゾロ／＼附いて來ると云ふ有様である。埃太利の前途は甚だ心細い。私は永く獨立が出来るかどうかを危んで居る。

(三一) チェッコスロヴァキヤ國の缺點

之に反してチェッコスロヴァキヤの方は甚だ有望であるが、此國に一つ大なる缺點がある。それは何であるかと云ふと、海を持たない事である。海と云ふものは國家の發展上必要缺くべからざるものであるが、それを持たない。前に申述べたウィルソンの海洋の自由と云ふ點から、陸地は昔から色々な民族が占有して居るから、それを勝手に移すことは出来ないが、海は公海であつて、誰の海と云ふことはない。どの國民でも利用して差支ないのであるがチェッコスロヴァキヤの如く大陸の中央に位置する國では四方とも遠く海から隔だつて居て、海岸へ出る迄非常に大きな運河を作ること出来ない。どうにも仕様が無い。そこで國際河川の規約を設けて、海と連絡せしむる方法を探る。國際河川と云ふのは、其河の航行權を、自由に諸國に持たせるのである。昔からダニューヴ河の下流若くは萊茵河の如き二箇國以上に跨がる河は、國際河川として、各國が自由に航行することが出来るやうにしてあつた。其原則を今度更に多くの河川に適用するやうになつた。チェッコスロヴァキヤの場合に於ては、ボヘミヤの中央を流れて居るモルダウ河、即ち此河はブライグ市の中を流れて、其下でエルベ河に合してエルベ河が獨逸の方へ流れて行く。さうして其下流が漢堡へ行つて海に注いで居る。此モル

ダウ河とエルベ河とを此新しい國に利用させて、海に連絡を取る。モルダウ河の中流ブラーグ市から下流エルベ河に合する處迄と、此會流點から下のエルベ河全部を國際河川とする。さうして漢堡の町を自由市にして、チエツコス、ロザアツク人が勝手に物質の出入をするやうにする。それが一つの方法である。それからもう一つはモラヴィヤの北の方から獨逸へ流れこんで居るオーデル河がある。此河は今度波蘭のものになるか獨逸のものになるか、人民投票で決まる舊獨領上シレシアの地方へ入り、下シレシアを通つてステツチンと云ふ町で海に注ぐ。此河の此國境の處にオツバ河といふ河が西から來てオーデル河に注いで居る。其會流點にオストラウと云ふ町がある。其オストラウの町から下を國際河川として使はせる。さうしてステツチンの港も自由市として使はせると云ふことで、海を持たない缺點を出来るだけ補はうとして居る。又ポヘミヤ地方からフィウメの港に向つては、鐵道の聯絡があるから、之を伊太利に遣らないで、南スラヴに持たせやうと云ふことも、チエツコス、ロザアキヤが利用するに都合が好いと云ふ考から出て居る。チエツヒも同じスラヴであるから、ユーゴースラヴィヤが此港を持つて居るとチエツヒが利用するに都合が好いと言ふのである。

(三二) 史上の異例——波蘭の再興

波蘭が今度再興したに付ては、歐羅巴の歴史上餘程珍しい點がある。一度滅びてから獨立する迄百二十五年其長い間に波蘭人の血も變らず、其再興した地も、舊領と同じ地域の内にあると云ふことは餘程珍しい事である。例へば希臘人の如きも、昔の希臘人と今の希臘人とは大變血が變つて居る。伊太利にしても、昔の伊太利とは大變違つて居る。所が波蘭の場合では、矢張り前の波蘭人の血が今日の波蘭人の血と同じである。是迄に或國が盛んになつて種々なる國を征服した場合に、其強い國が久しからずして滅びた爲に、復た前の國が獨立を恢復すると云ふやうな場合は隨分ある。例へばナポレオンの盛んな時代には、歐羅巴の大部分を勝手に處分した。それが爲め民族的獨立を失つた國は澤山ある。然しナポレオンが滅びてしまふと復たそれが獨立する。さう云ふ場合には同じ人種が同じ地に再興するのであるが、波蘭のやうに、百二十五年も滅びて居た國が、昔と同じ場所に再興したと云ふことは一寸他に例を見ない。此點に於て餘程珍しい。御承知の通り波蘭は三國の分割に依つて地圖の上から無くなつてしまつた。今度出來た波蘭は分割前の波蘭に比べると三分の一の面積である。昔波蘭と云ふ國は一時非常に榮えた。十四世紀から十七世紀迄は歐羅巴の大國であつた。或る時代には歐羅巴第一の大國であつたこともある。それに較べると今度の波蘭は非常に小さいけれども、兎に角昔の波蘭と同じ地域に再興されたのである。是は餘程珍しい例である。

(三三三) 波蘭衰亡の回顧

波蘭滅亡の歴史は略して置くが、唯滅亡の原因を一言して置かうと思ふ。波蘭は昔から貴族の勢力の盛んな所であるが、十四世紀頃波蘭は非常に盛んになつた。と云ふのは波蘭の元の本部と北の方のリトワニアと云ふ國が併合した爲に、波蘭は急に大きくなつた。此併合と云ふのは波蘭の王室の娘さんがリトワニア王ヤゲローと結婚して、リトワニア王が波蘭王になつて急に國が大きくなつたのである。處で其波蘭王のヤゲローと云ふ人が入婿になる時、波蘭の貴族に憚つて貴族の特権を非常に大きくした。それから貴族は大に増長して王様を段々壓迫して、王は名前だけで實権は貴族が持つて居ると云ふことになつた。つまりそれが甚だいけなかつたのである。其後十六世紀になつてヤゲロー家が斷絶した時に、貴族達が、是から世襲の王を載かない。吾々の間で一代々國王を選擧しやう、選擧される國王は必しも波蘭人で無くても宜しい、誰でも宜しいから適當な人が宜いと云ふ決議をした。是が此國の衰えて行く最大原因であつた。さうなると歐羅巴の他の國の王室で波蘭に勢力を揮はうと思ふ人が候補者になる。さうして選擧されるには、どうしても貴族達の歡心を得なければならぬから色々な利益を貴族達へ與へる。さうして運動して波蘭王にならうとする。貴族はそれを好い事に思つ

て成るべく有利な條件を提供する人を選擧して自分の腹を肥さうとする。候補者が幾人もあると、貴族の黨派が分れて互に相争ふ。それも國家的觀念から、斯う云ふ人を立てれば波蘭の爲に好いと考へて選擧をやるならば宜しいけれども、さう云ふことは一向を構ひ無しで、少しでも自分達に好い條件を持つて來る人を立てやうと云ふ方針でやる。それだから選ばれた國王が波蘭の利益を思はない是が衰亡の第一原因である。それから國會と云ふものがあつて、其國會で貴族が政權を揮ふのであるが、其國會に妙な制度がある。それは總ての法案は満場一致でなければならぬ一票でも反對者があると成立たぬといふのである。是は國際聯盟にもさうなつて居るが、是が國務の澁滯を來たすこと夥だしい。それから波蘭には今云ふ通り政權を専らにする貴族と半奴隸のやうな小作人が澤山居る。非常に貧乏な者と大地主即ち貴族とがあつて中等社會が無。國家を維持するには、どうしても中等社會が必要である。さう云ふ原因から國の政治が段々腐つて往く。其處へ周圍の國から偉い人が出て此國を削り取る事になつてしまつた。東の方には露西亞の女帝カザリン二世と云ふやうな女丈夫が出て來る。西の方にはフレデリック大王と云ふやうな英王が現れて、それが互に相談をして、此處を争つて戦争をやつて互に損である。兩方で削り取つて仕舞ふのが一番よいと云ふ相談が纏まつて左右から挟み撃にして段々削り取つて無くなつて仕舞つた。此外部の壓迫と云ふことには、國民は始終覺悟して居